

ノ形式ヲ以テ起訴スルモノアラハ訴ノ内容ヲ調査スルコトナク職權ヲ以テ其訴ハ訴訟條件  
ヲ欠缺スル不適法ノモノナリトシテ之ヲ棄却セサル可ラス而シテ本件ニ於テ被告上告人タル  
原告ハ第一審以來金二千八百九十圓九十七錢四厘及ヒ金五百四十三圓四十錢並ニ其合計額  
ニ對スル明治三十四年五月一日ヨリ本件執行濟ニ至ル迄年六分ノ損害利子ヲ附加シタル金  
額ヲ以テ請求ノ目的物トシテ要求セリ然レトモ本件執行ノ終ルヘキ時日ハ起訴當時ニ於テ  
豫メ確定シ得ヘカラサルコト勿論ナルカ故ニ原告ノ要求スル利子總計額ハ全ク不定ノモノ  
ナリトス從テ原告カ此不定ノ利子ト一定ノ元金トヲ加ヘタル元利合計額ヲ以テ請求ノ目的  
物ト爲シタルハ一定ノ金額ノ支拂ヲ請求スルヲ目的トスル爲替訴訟トシテ形式上許スヘカ  
ラサルモノタリ然ルニ原裁判所ニ於テ此點ヲ看過シ漫然訴訟ノ内容ニ入り爲替訴訟トシテ  
審理判決セルハ明カニ民事訴訟法第四百八十四條及同第四百八十九條第二項ノ規定ニ違背  
スル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○本件ノ主タル請求ノ金額ノ確定シタルモノナルコ  
トハ上告人モ認ムル所ナリ唯此主タル請求ニ附帶スル遲延利息ノ請求ハ主タル請求金額ニ  
對スル明治三十四年五月一日ヨリ本件判決執行ノ日マテ年六分ノ金額ノ支拂ヲ目的ト爲ス  
カ故ニ本件判決執行ノ遲延ニ因リ其金額ヲ異ニシ今日之ヲ確定スルコトヲ得サルモノ之ヲ確  
定スルノ標準ニ總テ一定シ本件判決執行ノ時ニ至レハ算數上直ニ其金額ヲ確定スルコトヲ  
得ヘキモノナレハ此附帶ノ請求ヲ以テ民事訴訟法第四百八十四條ニ所謂一定ノ金額ノ支拂  
ヲ目的トスル請求ニ非スト謂フコトヲ得ス故ニ本上告論旨モ亦失當ナリトス

以上説明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ  
從ヒ棄却スヘキモノトス

●有體動產假差押解除請求事件

明治三十五年(大)第十號  
明治三十五年六月二十三日判決 (棄却)

判決要旨

- 一、假差押ノ繼續中判決確定シタルトキハ別ニ本差押ノ手續  
ヲナサズシテ已ニナシタル假差押ヲ本差押ニ變更シ之ニ  
依リ強制執行ヲ續行シ得ヘキハ判例ノ認ムル所タリ
- 二、假差押解除ノ訴ヲナシ其ノ訴訟繼續中假差押カ本差押ニ  
變シタルトキハ申請者ハ申立ヲ擴張シ其ノ本差押ノ解除  
アラシムコトヲ求ムルモ訴ノ原因ヲ變更スルモノニアラス  
從テ之ニ向テ直チニ判決ヲ下スモ違法ニアラス

說明

本件ハ說明ヲ要セズ

第一審 盛岡地方裁判所

第二審 宮城控訴院

假差押ト本執行トノ關係

原告人 高橋 養吉 訴訟代理人 中村 徳重 郎  
被告 人 工藤 金藏

右當事者間ノ有體動產假差押解除請求事件ニ付宮城控訴院カ明治三十四年十一月八日言渡シタル判決ニ對シ止告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告第三點ノ要旨ハ原告ニ於テ被控訴人ノ一定ノ申立訂正ハ當初控訴人ノ爲シタル假差押ニ對シ被控訴人ヨリ其解除ノ請求ヲ爲シ居ル中控訴人ハ同一債權ニ基ク強制執行ニ依リ該假差押カ差押ニ變更シタルヲ以テ云云ト判示シ假差押カ差押ニ變更シタルモノト認メタルハ法律ニ違背シテ不當ニ事實ヲ確定シタル裁判ナリ何トナレハ假差押ナルモノハ差押ニ變更セラルヘキモノニ非スシテ前ニ假差押ヲ爲シ置キタル同一物件ニ對シ強制執行上新ニ差押手續ヲ施シタル結果前假差押ハ當然解消ニ歸シタルモノニシテ變更トハ全ク其趣ヲ異ニスレハナリト云ヒ「上告第二點ノ要旨ハ此變更ニアラスシテ解消セル假差押ノ解除ヲ請求シタル被告上告人カ更ニ申立訂正ヲ爲シタルニ原告ニ於テハ本訴ノ目的ヲ達スルノ必要上止ムヲ得サルノ手續ニシテ訴ノ申立ヲ擴張シタルモノニ外ナラサレハ之ヲ以テ訴ノ變更ト云フヲ得ス云云ト判示シタルトモ強制執行ノ爲メ當然假差押解消シタル以上ハ強制執行ナ

ルモノハ其目的異ナルト同時ニ其性質ヲ異ニスルヲ以テ訴ノ變更ナラズ然ルヲ附帶控訴ト以テ一定ノ申立訂正シ訴ノ變更ヲ認容シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ裁判ナリト云フニ在リ  
按スルニ凡ソ假差押ナルモノハ金錢ノ債權ノ強制執行ヲ保全スルヲ目的トスヘキモノナリ故ニ其金錢ノ債權ニシテ確定スルニ至レハ右假差押ハ之ヲ解除セシメテ直チニ強制執行ニ移リ即チ本差押ニ變更シ之ヲ續行スルヲ得ヘキトハ既ニ當院カ法意トシテ認ムル所ノ判例ナリ而シテ訴訟中ニ其訴訟ノ目的物ニ變更ヲ來シタル場合ニ於テハ起訴ノ當時ニ於ケル狀態ニ依ラスシテ判決當時ノ狀態ニ依リ其裁判ヲ受クヘキモノナルコトモ亦當院ノ法理トシテ認ムル所ノ判例ナリ然リ而シテ本件ニ於ケル有體動產ハ初メ上告人カ訴外人工藤徳兵衛ニ係ル金錢ノ債權ノ爲メ假差押ヲ爲シタルヨリ被告上告人ハ之ニ對シ假差押解除ノ請求ヲ訴ヘ其訴訟中右上告人ノ債權ハ確定シ之カ強制執行ニ移リ即チ本差押ニ變更シタル事實ハ記録中殊ニ原因ニ於ケル法定調書中上告人申立ノ部ニ「新乙第一一號證ノ自體及ヒ本案假差押ノ本差押ニ變更シタルコトハ爭ヒナシ」トアルニ徴シテ明カナリ然ラハ被告上告人カ最

初一定ノ申立ニ假差押ノ解除ヲ求ムル旨申立テ置キ其後訴訟中目的物ノ狀態變更シタルヨリ原告ニ於テ判決ヲ受クヘキ當時ノ狀態ニ應シ申立ヲ擴張シ即チ請求ノ原因ヲ變更セスシテ唯差押ノ解除ヲ求ムル旨申立テ訂正シタルモノナレハ訴ノ變更ニ非サレハ勿論相當ノ申立ト云ハサルヲ得ス故ニ原告判決ニ於テ之ヲ認容シタルモ敢テ不當ニ事實ヲ確定シ又ハ法則假差押ト本執行トノ關係

ヲ不當ニ適用シタル違法ナシニ依リテモ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第二項ノ規定ニ依リ之ヲ棄却スルモノナリ

契約履行請求事件

明治三十五年(オ)第七十八號

(破毀)

判決要旨

民法第八百八十八條ニ依リ未成年者ノ爲メ親族會ニ對シ特別代理人ヲ撰任スルコトヲ求ムルノ權ハ獨リ其ノ親權者ノミニ限ラス同第九百四十四條ニ依リ親族會ヲ招集スルノ權アル者皆之レヲ有ス

說明

民法第八百八十八條ニ依リ未成年者ノ爲メニ親權者カ特別代理人ヲ撰任スヘキヲ親族會ニ求ムル所以ノモノハ親權者ノ利益ノ爲メニアラヌシテ專ラ幼者ノ權利ヲ保護スルニ在リ而シテ同第九百四十四條ノ規定ニ依テ考フル所キハ本件ノ場合ハ同條ノ所謂親族會議ヲ開ク場合ノニ該當スルコト同條ノ規定ニ照シ明カナリ然ラハ則チ同條ニ列記セラレタル者ハ

親權者以外ノモノト雖トモ此ノ場合ニ於テ親族會議ノ招集ヲ請求スルコトヲ得ヘキヤ勿論ナリトス然ルニ今若シ第八百八十八條ノ正面的解釋トシテ未成年者ノ爲メニ特別代理人ヲ撰任スルハ獨リ親權者ニ限ルトナサハ實ニ奇怪ナル結果ヲ生スルニ至ラン何トナレハ若シ斯ル解釋ヲ以テ正當トセハ第九百四十四條ニ列記シタル親權者以外ノ者ハ幼者ノ爲メ親族會ノ招集ヲ求ムルハ之レヲ爲シ得ル所ナルモ其ノ開始セラレタル親族會ニ對シ特別代理人ノ撰任ヲ求ムルノ權ハ之ナシト云フカ如キ奇觀ヲ呈スルニ至ルヘケレハナリ加之ス若シ親權者ノミニ其ノ撰任ヲ求ムル權アルモノトセハ親權ハ自己ニ利益ナル場合ニ於テハ其ノ撰任ヲ求ム不利ナル場合ニハ之レカ請求ヲ爲サルコトアリテ幼者ヲ保護セントシタル法律上ノ精神ハ到底之レヲ達シ得サルニ至ル可ヘケレハナリ

(參照) 親權ヲ行フ父又ハ母ト其未成年ノ子ト利益相反スル行爲ニ付テハ父又ハ母ハ其子ノ爲メニ特別代理人ヲ撰任スルコトヲ親族會ニ請求スルコトヲ要ス父又ハ母カ數人ノ子ニ對シテ親權ヲ行フ場合ニ於テ其一人ト他ノ子トノ利益相反スル行爲ニ付テハ其一方ノ爲メ前項ノ規定ヲ進用ス(民法第八百)

(參照) 本法其他ノ法令ノ規定ニ依リ親族會ヲ開クヘキ場合ニ於テハ會議ヲ要スル事件ノ本人、戶主、親族、後見人、後見監督人、保佐人、檢事又ハ利害關係人ノ請求ニ因リ裁判所之ヲ招集ス(民法第九百)

第一審 新潟地方裁判所高田支部 第二審 東京控訴院  
上告人 小出ハルノ  
右特別訴訟代理人 小出ヤツ  
訴訟代理人 石塚  
未成年者ノ特別代理人選任ノ請求 三百七十九

被上告人

小出ハナ

訴訟代理人

上原 鹿 造

三百八十

右當事者間ノ契約履行請求事件ニ付キ東京控訴院カ明治三十五年二月十七日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判 決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理 由

上告論旨ノ第三ハ民法第八百八十八條ニ依レハ親權ヲ行フ父又ハ母ト其未成年ノ子ト利益相反スル行爲ニ付テハ父又ハ母ハ其子ノ爲メニ特別代理人ヲ選任スルコトヲ親族會ニ請求スルコトヲ要スト規定セリ本條ハ親權者カ自己ノ利益ヲ主張スル場合ニ適用スルキモノニシテ本件ノ如ク未成年者カ親權者ニ對シテ利益ヲ主張スル場合ニ於テハ民法第九百四十四條ニ基キ普通親族會招集ノ請求ヲ爲シ得ヘキ者ニ於テ其手續ヲ爲スハ當然ノ筋合ナリトス若シ夫レ此場合ニ於テモ民法第八百八十八條ノ手續ニ依ラサル可ラサルモノトセハ不利益ヲ蒙ルヘキ親權者ハ到底其手續ヲ爲ササルヘク未成年者ハ遂ニ法律ノ保護ヲ受クル能ハサルニ至ラン豈ニ斯ノ如キノ理アラザラヤ故ニ本件ニ於テ上告人ノ祖母小出ヤシカ親族會招集ノ請求ヲ爲シタルハ相當ノ筋合ナリト原裁判所ハ本件ノ場合ニ於テモ尚且民法第八百八十八條ノ手續ニ依ラサル可ラサルモノ、如ク判決セラレタルハ法則ヲ不當ニ適用シタルモノト確信スト云フニ在リ

三六

依テ按スルニ民法第八百八十八條ニハ父又ハ母ハ其子ノ爲メニ特別代理人ヲ選任スルコトヲ親族會ニ請求スルコトヲ要ストアルニ因リ特別代理人ノ選任ハ未成年者ノ父又ハ母ニ限リ之ヲ請求シ得ルモノノ如シト雖モ同條ハ未成年者ヲ保護スルノ精神ニ基キ親權者ニ其選任請求ノ義務ヲ負擔セシムルモノニシテ親權者ノ利益ノ爲メニ其權利ヲ與ヘザルモノニアラサルナリ故ニ同法第九百四十四條ノ推理解釋ヨリシテ親族會ノ招集ヲ請求スルハ權アル者ハ又同法第八百八十八條ノ特別代理人選任ノ請求權アルモノト云ハザルヘガラズ何トナレハ第八百八十八條ハ親族會ヲ開クヘキ規定ノ一ナレハ第九百四十四條ノ規定ニ依リ同條列記者ハ親族會ノ招集ヲ請求シ得ルヤ明ナルニ特別代理人選任ノ請求ヲ爲シ得サルモノトセハ親權者ニ於テ其選任ヲ請求ヲ爲ササルニ於テハ親族會招集ノ目的ハ之ヲ達シ得サルヲ奇果ヲ生スルニ至ルヘキヲ以テナリ加之若シ親權者ノ其選任請求ノ權アルモノトセハ自己ニ利益ナル場合ニハ其選任ヲ求メ不利ナル場合ニハ之カ請求ヲ爲ササルコトアリテ幼者ヲ保護セントスル法律ノ精神ハ到底之ヲ達シ得サルニシ然ラハ則チ上告人ノ祖母タルヤシノ請求ニ因リ親族會カ特別代理人ヲ選任シタルハ毫モ不法ニ非ス然ルニ原院ニ於テ其選任ヲ不法トシ上告人ニ不利ノ判決ヲ與タルハ不法ヲ免レズ被上告人ニ於テハ新抗辯ト稱シ第二ニ民法第八百八十八條ニ謂フ利益トハ財産上ノ利益ノミヲ指シタルモノニテ本訴ニ於ケルカ如キ財産以外ノ利益ヲ包含スルモノニアラザラハ本件ニ付ヤシ上告人ノ特別代理人ト選任シタル親族會ノ議決ハ無効ナルヲ以テ此點ニ於テ上告ハ棄却スヘキモノナリ

三七

未成年者ノ特別代理人選任ノ請求

三百八十一

辯スルモ同法文ニ其區別ノ存スルナキノミナラス若シ如上ノ解釋ヲ採ルトキハ幼者ヲ保  
護セントスル同條ノ精神ヲ達シ得サルノ結果ヲ生スルニ至ルヲ以テ本訴ノ場合モ亦同條ニ  
云フ利益相反スル場合ニ適應スルモノト解セサル可ラス第三ニ親族會ノ決議ハ其會員三名  
ナルトキハ全員出席ノ上過半数ヲ以テ之ヲ爲スニアラサレハ有效ナラスト辯スルモ親族會  
カ三名ノ會員ヨリ組織セラレタルトキハ其全員出席シ其過半数ヲ以テスルニアラサレハ該  
議決ハ有效ナラストノ規定民法中ニ存セス同法第九百四十五條ハ親族會ノ成立ニ必要ナル  
員數ヲ定メタル規定ニシテ其開會ニ必要ナル員數ヲ定メタルモノニアラサレハ該條ノ規定  
アルカ爲メニ被上告人所論ノ如ク論斷スヘキモノニアラズ然リ而シテ其議決條項ニ關スル  
第九百四十七條ニハ親族會カ三名ノ會員ヨリ組織セラレト否トニ區別ナク會員ノ過半数  
ヲ以テ爲シタル議決ハ有效ナル旨ノ規定アリテ被上告人ノ主張ニ依ルモ係爭議決カ三人ノ  
會員中現ニ出席シタル二名ノ一致ヲ以テ爲サレタルコト明瞭ナルヲ以テ其不法ニアラサル  
ヤ論ナシ假リニ被上告人ノ解釋ヲ正當ナリトスルモ其主張事實ハ原院カ確定シタル所ニア  
ラサレハ之ニ對シ本院ニ於テ直チニ法律ヲ適用ヲ爲シ得ヘキモノニアラス第三ニ民法第八  
百八十八條ノ特別代理人ニ對シ未成年者ニ代リ訴訟ヲ爲スル權能ヲ與ヘタル法規ノ存スル  
コトナシ假リニ之アリトスルモ親族會以外ノ者ニ對シモテ幼者ヲ代表スルノ權能ヲ之ニ與  
ヘタル法規ナキヲ以テ少クモ被上告人阿部政太郎ニ對スル上告ハ此點ニ於テ棄却スヘキモ  
ノナリト辯スルモ民法第八百八十八條ハ幼者ト其親權者トノ利益相反スル行爲ナル以上ハ

裁判上ノ行爲ナルト裁判外ノ行爲ナルトニ付キ區別ヲ爲サルヲ以テ利益相反スル以上ハ  
其行爲カ訴訟行爲ナルトキニモ亦親族會ハ特別代理人ヲ選任シ得ルモノトス故ニ本訴提起  
ノ爲メ特別代理人ニ選任セラレタルヤンカ本訴ノ請求ヲ爲シ得ルヤ勿論ナリ而シテ本件ノ  
如ク被上告人兩名ヲ義務共通者トシテ訴ヲ提起スル場合ニ於テハ特別代理人ハ親權者以外  
ノ者ニ對シテモ其行爲ニ付テハ幼者ヲ代表スヘキモノナルヲ以テヤンカ被上告人政太郎ニ  
對シテモ亦本訴請求ヲ爲スル權能ヲ有スルモノトス  
前記原判決ノ不法ハ其全部ニ影響シ全部破毀ノ理由タルヲ以テ他ノ上告論旨ニ對スル説明  
ヲ省キ民事訴訟法第四百四十七條第一項數第四百四十八條第一項ニ則リ主文ノ如ク判決ス  
ヘキモノトス

損害要償請求事件

明治三十五年(オ)第二百二十二號  
明治三十五年六月十六日判決 (棄却)

判決要旨

現行ノ民法商法及民事訴訟法ニ於テハ普通ノ私署證書ト  
人證トノ間ニ證據力ノ優劣ニ關スル規定ナキヲ以テ裁判  
所ハ此等ノ證據ニ對シテハ自由ナル心證ヲ以テ事實上ノ  
判斷ヲ爲スコトヲ得ヘシ

未成年者ノ特別代理人選任ノ請求

本件證明ヲ要セス  
第一審 神戶地方裁判所 第二審 大阪控訴院

原告人 小島 梅次郎 被告代理人 田中 謙一

被告代理人 合名会社「アサヒ」 代表者 エス、イ、レビー

右當事者ノ損害要償請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年二月十九日言渡シタル判決ニ對シ原告代理人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第三點ノ要旨ハ人證ト書證トハ其效力ニ於テ軒輊スル所ナシト雖モ是唯普通ノ書證ニ關シテ言フヘキニシテ若シ夫レ紛争ヲ未然ニ防クカ爲メ法律行為ノ證據トシテ特ニ作爲シタル書類即チ證書ニ至テハ之ヲ人證ト同視スルコトヲ得ス民事訴訟法モ亦書證ニ二種ノ別アルコトヲ認メタリ(第四八四條四八七條第二項)凡ソ法律行為ノ證據ニ供スル爲メ特ニ證書ヲ作成シタルトキハ文意ノ疑義ヲ解釋スル爲メニスルハ格別證書ノ趣意ヲ變更スル爲メニ人證ヲ許ス可カラサルハ證據ニ關スル普通ノ法理ナリ若シ此法理ヲ認メザラシ乎如何ニ完全ナル證書ヲ作製スルモ尙ホ人證ヲ以テ證書以外ノ條件ヲ附加シ又ハ證書ノ文意ニ異ナ

ル事項ヲ證明セント試ムルニ至ルヘク從テ證書ノ作製ハ以テ紛議ヲ豫防スルニ足ラス偽證愈多クシテ健訟益盛ナラントス殊ニ我國人證ノ現狀ヲ視レハ蓋シ寒心スヘキモノアラシ夫レ然リ而シテ一タヒ前陳ノ法則ヲ認ムル以上ハ其例外タル解釋ハ眞ノ解釋ナラサルヘカラス否ラサレハ則チ名ヲ解釋ニ假リテ反對ノ人證ヲ容レ法則ヲシテ徒法ニ歸セシムルニ至ルヘケレハナリ今本件ノ書證ヲ見ルニ被告上告人ヨリ甲第一號證ナル賣附證ヲ上告人ニ交付シ上告人ハ之ニ對シ買附證ヲ被告上告人ニ交付シ而シテ該證書ニ所謂直渡ノ約旨ニ從ヒ被告上告人ハ即時ニ貨物ト看做シテ甲第二號證ナル倉出證ヲ交付シ上告人ハ之ニ對シ乙第一號證ナル貨物領收證及ヒ現金ト看做シテ甲第三號證ナル手形ヲ交付シタルモノナリ夫レ斯ノ如シ證書整頓シ其意義明確ニシテ毫モ被告上告人ノ主張スルカ如キ約旨ノ痕跡ヲ認メサルノミナラス倉出證ナルモノハ其文意ニ依ルモ將タ顯著ナル商慣習ニ依ルモ引渡ノ時期到來スルニアラサレ發スヘキモノニアラス (明治三十四年十一月十四日附被控訴人追加準備書面第一項第二號及第三號) 然リ而シテ被告上告人ノ前雇人美澤ノ證言ハ被告上告人カ因テ以テ割引云々ノ約旨ヲ證明センカ爲メ第二審ニ至リ提出シタル孤立ノ證據ニシテ全然證書ノ約旨ニ異ル立證ヲ試ムルモノニ外ナラス (乙第二號證ハ引取商ノ間ニ行ハル、案内書ニシテ本件爭點ニ何等關係ナク第一審ニテモ願ミラレサリ所ナリ) 左レハ原院カ該證言ヲ採用シ甲第二號證其他ノ證書ノ趣意ニ異ナリタル事實ヲ認定シタルハ前掲法則ニ違背シタル不法ノ判決ナリ (參考舊民法證據編第六〇、第六三、舊商法第二七七、第二七九、佛國民法第一

人證ト證書トノ證據力ノ優劣

三四一、伊國商法第九二、第九三、西國商法第二三五、第二三七、英國詐欺條例第二七)

下云フニ在リ  
按之我國現行ノ民法商法及ヒ民事訴訟法ニ於テハ普通ノ私署證書ト入證トノ證據力ハ優劣  
ニ關スル規定ノ設ナシ故ニ事物ノ輕重ヲ問ハス金額ノ多寡ヲ論セス裁判所ハ民事訴訟法第  
二百十七條ノ規定ニ依リ是等ノ證據方法ニ就テハ其證據調ノ結果ヲ斟酌シ自由ナル心證ヲ  
以テ事實上ノ判斷ヲ爲シ得ヘキモノト云ハサルヲ得ス是ヲ以テ原院ハ其書證ト入證トニ依  
リ敢テ斟酌セス一般證據調ノ結果ヲ斟酌シ其自由ナル心證判斷ノ範圍内ニ於テ證據ヲ取捨  
シ事實上ノ判定ヲ下シタルモノナレハ原判決ハ法則ニ違背シタル不法ノ裁判ナリト云フヲ  
得ス

以上説明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ノ  
規定ニ依リ之ヲ棄却スルモノナリ

貸金請求事件 明治三十五年(オ)第九十八號 (破毀)

判決要旨

一、通知ニ依ル債權讓渡ノ場合ニ於テハ債務者カ債權者ニ對  
シテ有シタル抗辯事由ハ之レヲ以テ讓受人ニ對抗スルコ

二

トヲ得

二、前項ノ所謂抗辯事由トハ債務者カ債權讓渡ノ通知ヲ受ク  
ル以前ニ於テ已ニ何時ニテモ之レヲ主張シ得ヘキ事由ノ  
存在シタルコトヲ要ス

三、債務者カ讓渡人ニ對シ債權ヲ有スルモ讓渡ノ通知以前兩  
者ノ債權相殺ヲ爲スニ適セサルトキハ其ノ相殺ヲ以テ讓  
受人ニ對抗スルコトヲ得ス

說明

通知ニ依ル債權讓渡ノ場合ニ於テハ債務者カ讓渡人ニ對シ有シタル債務  
履行ニ關スル抗辯ノ事由ハ之レヲ以テ讓受人ニ對抗スルコトヲ得ヘキハ  
民法第四百六十八條末項ノ規定スル所ナリ蓋シ債務者カ債權者ニ對シ一  
且有效ニ收得シタル抗辯事由ハ其ノ承諾ナキ限りハ債權者ノ變更ニ因テ  
消滅スヘキモノニ非スト爲ニアラスンハ強慾ノ債權者ハ常ニ債務者ノ抗  
辯ヲ避ケンカ爲メ一時債權ノ讓渡ヲ假裝シ他人ノ名義ヲ用ヒテ自己ノ債  
權ノ完全ナル履行ヲ領得シ債務者ヲシテ自己ニ對スル抗辯ノ目的ヲ達ス

債權讓渡ノ債務者ノ抗辯事由

三

ルコト能ハサラシムルニ至レハナリ。然リ而シテ所謂抗辯ノ事由トハ如何ナル意義ナル乎之レ甚タ明確ナルニ似テ其ノ實頗ル講究ヲ要スルモノアリ。所謂抗辯ノ事由トハ讓渡ノ通知以前單ニ抗辯事由ヲ發生スヘキ原因ノ存在シタルヲ以テ足レリトセス。現ニ抗辯事由其ノモノ、實在スルコトヲ要ス抗辯事由ノ實在トハ抗辯者ノ意思ニ依リ何時ニテモ有效ニ抗辯ヲ提供シ得ヘキ法律關係ノ存在スルヲ謂フ而シテ已ニ此ノ關係存立シタル以上ハ必スシモ其ノ抗辯ヲ主張シタルコトヲ要セス之レ法文ノ規定ハ單ニ讓渡人ニ對シ生シタル事由云々トノミアリテ之レヲ主張シタルコトヲ要スルノ規定存セサルニ依テ知ルヘキナリ。

債務者カ讓受人ニ向テ主張スルコトヲ得ヘキ抗辯事由ノ何モノタル以上説明ノ如シトセハ本件ノ冒頭ニ掲クル第三ノ判旨ハ其ノ理由自ラ明瞭ナルヘシ即チ債務者カ債權者ニ對シ債權ヲ有スルモ其ノ讓渡ノ通知以前未ダ兩者ノ債務供ニ履行期限ニ至ラザリシトキハ相殺ノ原因タル法律關係已ニ存在スルモ未ダ相殺ヲ主張スル時期ニアラサルナリ是レ即チ抗辯事由ヲ發生スヘキ原因存スルモ未ダ抗辯事由其ノモノ、實在セサルナリ之レヲ以テ民法第四百六十八條ノ抗辯事由トナスコトヲ得サルヤ勿論ナリトス。

(參照) 讓渡人カ讓渡ノ通知ヲ爲シタルニ止マルトキハ債務者ハ其通知ヲ受クルマテニ讓渡人ニ對シテ生シタル事由ヲ以テ讓受人ニ對抗スルコトヲ得(民法第四百六十八條第二項)

第一審 廣島地方裁判所 第二審 廣島控訴院  
 上告人 磯部清次郎 訴訟代理人 高野井卓重  
 被上告人 佐々木彌平次 訴訟代理人 三戸有治

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付廣島控訴院カ明治三十五年二月十四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決中訴訟費用中控訴人ノ差間ニ係ル期日變更ノ申請ニ關スル部分ハ控訴人ニ於テ負擔ス可シトノ一部ヲ除キ其他ノ部分ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ廣島控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨ノ第一ハ民法第四百六十八條第二項ニ依リ債務者カ債權讓渡ノ通知ヲ受クルマテニ讓渡人ニ對シテ生シタル事由ヲ以テ讓受人ニ對抗スルニハ其事由カ債權讓渡ノ通知前ニ發生シタルコトヲ要スルヤ論ヲ竣タス例之ハ相殺ヲ以テ對抗スル場合ノ如キ相殺ノ資料タルヘキ債權ノ發生シタルノミヲ以テ足レリトセス債權讓渡ノ通知前ニ於テ已ニ相殺ノ意思表示ヲ爲シタルコトヲ要ス然ラサレハ同條ニ所謂債權讓渡ノ通知前ニ讓渡人ニ對シタル事

債權讓渡ノ債務者ノ抗辯事由



由ト云フヲ得サルナリ然ルニ原判決ハ「民法第四百六十八條第二項ニ所謂讓渡ヲ通知ヲ受クル迄テニ讓渡人ニ對シ生シタル事由トハ必ラスシモ其通知前ニ於テ相殺ヲ爲スノ意思表示アリタルコトヲ要スルモノニアラスシテ云々」ト判示シ上告人ノ請求ヲ斥ケタルハ債權讓渡ノ法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リテ之ニ對スル被上告代理人ノ答辯ハ本案上告人ノ請求ハ訴外木村庄三郎ヨリ讓受テ其通知ヲ爲シタリト云フ債權ノ請求ナレトモ元來債權ノ讓渡ナルモノハ讓受人ハ讓渡人ノ地位ヲ承繼スルニアリ既ニ承繼ナリトセハ讓受人ハ讓渡人ト債務者トノ間ニ存スル權利關係ヲ取得スルニ止マルカ故ニ若シ債務者カ讓渡人ニ對シテ有シタリシ事由アラハ債務者ハ總テ之レヲ以テ讓受人ニ對抗シ得ルニ原則トス從テ債務者カ相殺ヲ以テ對抗スル場合固ヨリ相殺ノ意思表示ヲ讓渡ノ通知前ニ爲スヲ要セス只讓渡債權ニ對シ相殺シ得ヘキ狀態ニアル債權ノ存在セシテ以テ足ルモノト信ス之レ讓渡ノ通知ヲ爲シタルニ止マル場合ニ於テハ讓渡ノ承諾ノ場合ト異ナリ債務者ハ未タ讓受人ヲ以テ自己ノ債權者ト認メサルモノナルカ故ニ民法ハ殊ニ債務者ヲ保護スル精神ヨリ視ルモ又相殺ノ意思表示ハ既往ニ遡及シテ效力ヲ生セシムル民法ノ規定ヨリ察スルモ明カナル所ナリ若シ然ラスハ狡猾ナル債權者ハ債務者ニ對スル債務ノ責任ヲ免カレ自己ノミ利得セント欲シ漫リニ讓渡ヲ爲シテ自己ハ責任ヲ免カレ債務者ハ其讓渡セラレタル債權ノ辨濟ヲ爲シ自己ハ辨濟ヲ受クルコト能ハサルノ不幸ニ陥リ甚タ權衡ヲ失スルニ至ルヘケレハナリ是故ニ原院カ民法第四百六十八條第二項ニ所謂讓渡ノ通知ヲ受クル迄テニ讓

六

渡人ニ對シ生シタル事由トハ必スシモ其通知前ニ於テ相殺ヲ爲スノ意思表示アリタルコトヲ要スルモノニアラスシテ只其當時ニ在テ債務者カ其讓渡債權ニ對シテ自己ノ債權者ヲ以テ相殺ヲ主張シ得ヘキ狀況ニ在リタルヲ以テ足レリトスル趣旨ナリト判示シタルハ相當ナリ(御院明治三十一年二月八日ノ判決參照)ト云フニ在リ

按スルニ民法第四百六十八條第二項ニ謂フ「生シタル事由」トハ債務者カ債權讓渡ノ通知ヲ受クルマテニ已ニ發生シタル事由ニシテ必要ナリシ場合ニ於テハ債務者カ當時既ニ其債權者ニ對抗シ得ヘカリシモノナラサルヘカラス若シ其對抗セントスル事由カ債務ノ相殺ナルトキハ債權讓渡ノ通知ヲ受クル前ニ於テ民法第五百五條第一項ニ規定スル如ク相殺ヲ爲スニ適スル債權カ相互ノ間ニ存シ其意思ノ表示アルトキハ相殺ニ因ル債權消滅ノ結果ヲ生スヘキ如キ場合ナルコトヲ要ス而シテ債權讓渡ノ通知前相殺ニ適スル債權對立スルトキハ當時既ニ相殺ノ意思表示ヲ爲シタルコトヲ要セサルヤ言テ俟タサルコトハ被上告代理人答辯ノ如クナリトス故ニ原判決ニハ上告代理人ノ論述スル如キ不法ナシト雖モ本論旨ニ關シ他ニ破毀ノ理由アルヲ免レス蓋シ債務者カ其債權者ニ對シ有效ニ提出シ得ヘキ既得ノ抗辯事由ハ其承諾ナキ限ハ債權者ノ變更ニ因リテ消滅スヘキモノニ非サルヲ以テ債權讓受人ニ對シテモ亦其效力ヲ有スルノミナラス債權讓受人ハ其讓渡人ノ權利ヲ承繼スル者ニ過キササルニ因リ讓受クタル債權ニ付キ既ニ存セル抗辯事由ヲ對抗セラルヘキハ固ヨリ當然ニシテ敢テ不服ヲ唱フヘキ正當ノ理由ヲ有セス民法第四百六十八條第二項ノ規定ハ究竟斯ル理由ニ

七

債權讓渡○債務者ノ抗辯事由

基クモノニシテ債務者カ債權讓渡ノ通知ヲ受ケタル時ヲ以テ其債權讓受人ニ對抗シ得ヘキ  
事由ノ有無ヲ區別セシムル準據ト爲シタルモノ亦此理由アルニ依ルナリ本件ニ付キ原院ノ  
確定シタル事實ニ依レハ被告上告人カ本訴ノ債權讓渡人ナル木村庄三郎ニ對シ取得シタル三  
箇ノ債權中最後ノ辨濟期ニ在ルモノモ明治三十三年三月八日既ニ辨濟期ニ違シ本訴債權讓  
渡ノ通知アリシハ同年七月の中ナルヲ以テ若シ上告人カ讓受ケタル債權ノ辨濟期カ同年七月  
三十日ニ在ルトキハ民法第四百六十八條第二項ニ依ル事由即チ相殺ニ適スル事由存シタリ  
ト云フコトヲ得ヘシ然レトモ右債權ノ辨濟期ハ同年十一月十五日ナルヲ以テ其讓受ノ通知  
アリシ當時既ニ相殺ニ適スル相互ノ債權存シタリト云フヘカラス乃チ前掲條文ニ謂フ「生  
シタル事由」存シタリト云フコトヲ得サルヤ明白ナリトス抑期限ノ利益カ債務者ノ爲メノ  
ミニ存スル係争債務ノ如キモノニ付テハ債務者ハ何時ト雖モ自由ニ其利益ヲ拋棄スルコト  
ヲ妨ケサルヲ以テ若シ被告上告人カ讓渡ノ通知アルマテニ期限ノ利益ヲ拋棄シタル事實アリ  
シモノトセンニハ所謂生シタル事由即チ相殺ノ事由存シタルコト明ナルモ被告上告人カ當時  
既ニ其拋棄ヲ爲シタリト云フ事實ハ原判決ニ於テ認メタルモノニ非サルコトハ其全文ノ趣  
旨ニ徴シ毫モ疑ヲ存セス而シテ被告上告人カ本訴ノ提起後ニ至リ相殺抗辯ヲ提出シタル事實  
ハ未タ以テ讓渡ノ通知アリシ當時既ニ期限ノ利益ヲ拋棄シタルコトヲ推定セシムルニ足ラ  
ス故ニ原判旨ノ如ク上告人ノ請求ヲ排斥セントスルニハ債權讓渡ノ通知ヲ受ケル前被告上告  
人カ期限ノ利益ヲ拋棄シタル事實ヲ確定セサルヘカラス然ルニ此點ニ關スル原判決ニハ被

上告人ハ自由ニ期限ノ利益ヲ拋棄シ得ヘキ場合ナルコト及ヒ明治三十四年四月四日即チ讓  
渡ノ通知アリシ後ニ相殺ノ意思表示アリタルコトヲ確定シタルニ止リ其通知アリタル當時  
既ニ相殺ニ適スル期限利益ノ拋棄アリシヤ否ニ至リテハ何等ノ説明ナシ是ニ由リテ之ヲ觀  
レハ原判決ニハ直接ニ上告論旨ノ如キ不法ナシト確モ民法第四百六十八條第二項ヲ適用ス  
ルニ付キ必要ナル事實ヲ確定セサル爲メ其理由ヲ欠ク不法アルモノト謂ハサルヘカラス而  
シテ之ヲ不法ナリトスル理由ハ本上告論旨ニ關シ自ラ生スヘキモノナルヲ以テ原判決ハ此  
點ニ於テ破毀セサルヘカラス  
以上説明スル如ク他ノ上告論旨ニ對スル説明ヲ要セサル場合ナルニ因リ之ニ關スル説明ヲ  
省キ民事訴訟法第四百四十七條第一項及ヒ第四百四十八條第一項ニ依リ主文ノ訴ク判決ス

當座小切手金償還請求事件

明治三十五年(光)第二百九十五號  
明治三十五年八月二十九日判決 (破毀)

判決要旨

- 一、署名トハ氏名ヲ自記スルノ義ナリ從テ署名ヲ要件トスル  
證券ニ對シ自筆ヲ以テ氏名ヲ記セサルトキス無効タルヲ  
免レヌ
- 二、小切手以署名ヲ必要トス從テ氏名ヲ自記セス版行ヲ以テ



其ノ不動上ノ利益ヲ有スルカ故ニ之レヲ以テ被保險利益トナシ有效ニ保險契約ヲ締結スルコトヲ得

三百九十六

說明

不動産ノ移轉ハ登記法ノ定ムル所ニ依リ登記ヲナスニアラスンハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得サルハ法律ノ明記スル所ナリ今皮想ノ觀ヲ以テ本件ノ場合ヲ考フルトキハ登記セザル不動産ノ讓受人ハ第三者タル保險者ニ對シテハ未タ之カ所有者タルノ地位ニ立ツテ能ハス從テ其ノ讓受ケタル不動産ニ對スル利益モ亦タ保險者ニ對シ被保險利益トナス可ラサルノ感ナキニアラスト雖モ法理ハ決シテ然ラス法文ノ規定ヲ考フルニ不動産ニ關スル物權ヲ以テ第三者ニ對抗セシムルニハ登記ヲ必要トスト雖モ單ニ不動産上ノ利益ヲ主張スルニ付テハ登記ノ手續ヲ經ルコトヲ必要トスル法文一モ存スル所ナシ抑モ權利ノ對抗ト利益ノ主張トハ同一ナラス權利ヲ以テ他人ニ對抗スルトハ其ノ權利ニ對スル侵害ヲ排除スル爲メニ法律ノ保護ヲ援用スルヲ云フ而シテ此ノ援用ヲ爲サンニハ不動産ニ關シテハ宜シシ登記法ノ規定ニ從ヒ登記ノ手續ヲ經ルヲ要スト雖モ反是利益ノ主張ハ物ノ經濟的價額ノ實在ヲ表示スルノ謂ニ外ナラサルヲ以テ此等ノ

主張ヲナサンニハ單ニ其ノ利益ノ存在スルヲ以テ足り敢テ其ノ目的物件ニ對シ登記ヲ要スヘキモノニアラス荷モ正當ニ自己ノ所有ニ屬シタル物件ニ對シテ一定ノ利益ヲ有スルヲ得ヘシハ法律上自己ノ利益トシテ之レヲ主張スル取テ妨クル所ナキモノトス夫レ保險ハ權利ノ對抗ニ關スルニアラステ專ラ被保險者ノ利益ヲ補償スルヲ以テ目的トナス然ラハ則登記ヲ經タル物件ニアラストスルモ苟モ之ニ對シ一定ノ利益ヲ有シ得ヘシハ之レヲ以テ被保險利益トナシ保險契約ノ目的トナス取テ法律ニ抵觸スル所ナキヲ知ルヘキナリ

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 家屋物品火災保險株式會社

右法定代理人 齋藤利三郎

被上告人 小川カッ

訴訟代理人 天野大藏

右當事者間ノ保險金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十五年二月二十一日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決 理由

被保險利益

三百九十七

上告論旨ハ抑々家屋ノ買主カ未タ買主登記ヲ爲サ、ル間ハ第三者ニ對シテ其所有權ヲ主張スル事ヲ得ス然ラハ被上告人ハ上告人ニ對シテ被保險家屋ニ付キ所有權ヲ有スル者ナル事ヲ主張シテ保險金ノ請求ヲ爲ス事ヲ得サルヤ論ヲ待タズ然ルニ原院カ「之ヲ被保險物トシテ保險契約ヲ取り結ヒタル場合ニ於テ被保險利益ヲ缺ク者トシテ保險契約ヲ無効ナリト論スルヲ得サル者トス何者買主ハ其家屋上ニ財産的利益ヲ有スル者ナレハナリ」ト判示シ被上告人ノ請求ヲ認メタルハ不法タルヲ免カレサル者トスト云フニ在リ○然レトモ本案係争ノ被保險物タル家屋ハ實際被上告人カ買受ケ以テ之ヲ所有シ居ル事實ハ原院ノ正ニ認ムル所ナリ果シテ然ラハ被上告人ハ未タ其登記ヲ爲サ、ルモ自己ノ所有タル上ハ其火災ニ因テ生スルコトアルヘキ損害ハ即チ被上告人ノ損害ナルカ故ニ之ヲ填補スルカ爲メニ該家屋ヲ被保險物ト爲シ以テ適法ニ火災保險契約ヲ取結ヒ得ヘキコトハ商法第三百八十四條、第三百八十五條、第四百十九條ノ規定ニ毫モ悖戾スル所ナキヲ以テ明カナリ故ニ原判決ハ適法ニシテ上告ハ其理由ナシ以上説明セシ如クナルヲ以テ民事訴訟法四百三十九第一項ニ從ヒ

正文ノ如ク判決ス

●商法及日本勸業銀行法違反事件 抗告事件

明治三十五年(ウ)第五百十四號 明治三十五年七月八日判決 (棄却)

判決要旨

株式會社ノ總會ヲ召集スルニ當リ各株主ニ對シテ發スル

通知書ニハ其議事日程タルヘキ事項ノ如何ヲ了解スルニ足ルヘク記載スルコトヲ要ス

說明

之レ蓋シ商法第五百十六條第二項ハ其ノ議定スヘキ事項ニ對シ評決權ヲ行フニ十分ナル準備ヲ爲サシメントノ趣旨ニ出スルカ故ニ若シ其ノ通知ノ記載事項ニシテ要領ヲ得サランカ到底本條ノ目的ヲ達スルコト能ハサルニ至レハナリ

(參照)總會ヲ召集スルニハ會日ヨリ二週間前ニ各株主ニ對シテ其通知ヲ發スルコトヲ要ス前項ノ通知ニハ總會ノ目的及ヒ總會ニ於テ決議スヘキ事項ヲ記載スルコトヲ要ス(商法第五百十六條、第一、二項)

原 審 東京控訴院

抗 告 人 日本勸業銀行總裁 高橋新吉

訴訟代理人 (三) 好退藏 長尾大郎

右抗告人ハ明治三十五年五月十日東京控訴院カ與ヘタル商法違反及ヒ日本勸業銀行法違反事件ノ決定ニ對シ抗告ノ申立ヲナシタルニ因リ檢事古賀廉造ノ意見ヲ聽キ決定スルコト左ノ如シ

決定

本件抗告ハ之ヲ棄却ス

總會召集ノ通知書ノ要件

理由

抗告理由ノ第一ハ原裁判所抗告人カ明治三十四年一月二十四日通常總會ヲ召集スルニ當リ單ニ「第七期諸計算書並ニ利益金配當ニ關スル件」ニ付決議ヲ求ムル旨ヲ通知シ而シテ又其臨時總會ヲ召集スルニ當リ「故副總裁片山遠平君ニ功勞金贈與ノ件」ニ付決議ヲ求ムル旨ヲ通知シタルノミニテ計算書ノ内容利益配當金若クハ功勞金ノ數額ヲ明示セザリシハ總會ノ目的ヲ通知シタルニ止マリ所謂總會ニ於テ決議スヘキ事項ヲ通知セザルモノナルヲ以テ商法第百五十六條ノ規定ニ背反シ從テ同法第二百六十一條ニ該當シ過料ノ裁制ヲ受クヘキモノナリト決定セラレタルモ商法第百五十六條第二項ハ必スシモ總會ノ目的及ヒ總會ニ於テ決議スヘキ事項ヲ各別ニ記載スヘキコトヲ強要スルニアラサレハ苟クモ第百五十六條第一項通知書中ノ記載ニヨリ總會カ何ノ爲メニ召集セラレ而シテ其總會ニ於テ如何ナル事項ノ決議セラレヘキヤヲ知ルヲ得ハ毫モ商法ノ規定ニ違反スルモノニアラス且記載ノ詳密ナルト簡約ナルトハ固ヨリ其間ハサル所ナリ本件「諸計算書等並ニ利益金配當ニ關スル件」ニ付キ決議スル爲メ通常總會ヲ召集スト云フハ之レ總會ノ目的ヲ示スト共ニ其決議スヘキ事項ヲ明示シタルモノナリ「又片山遠平君ニ功勞金贈與ノ件」ニ付キ決議ヲ求ムル爲メ臨時總會ヲ召集スト云フ之レ亦其總會ヲ召集スルノ目的ト共ニ其總會ニ於テ決議スヘキ事項ノ何タルヤヲ明示シタルモノナリ利益配當金ノ數額又ハ功勞金ノ金額等其數字ノ明示ヲ缺クカ爲メニ總會召集ノ目的ヲ通知シタルニ止マリ決議スヘキ事項ノ記載ヲ缺クト謂フカ如

キハ畢竟法文ノ字句ニ拘泥シタルノ議論ナリ若シ夫レ取締役選舉ニ爲メ總會ヲ召集スト云フカ如キ何ヲ以テ目的ト做シ何ヲ以テ決議事項ト認ム可キ乎原決定ノ如クセハ到底其範圍分界ヲ定ムル能ハサルヘシ假リニ本案通知ノ如キ單ニ目的ヲ通知シタルニ止マリ事項ノ通知ヲ缺クモノト爲サソ乎斯ノ如キ通知方法ハ商法實施以來全國一般商事會社ノ慣用ニシテ今日ニ於テハ最早一ノ商習慣ト認ムヘク若シ此通知方法ニシテ商法ニ違反スルモノトセハ全國無數ノ商事會社ハ一トシテ抗告人ト同一ノ制裁ヲ蒙ラサルモノナキニ至ルヘシト云フニ在リ

商法第百五十六條第二項ハ株主ヲシテ總會ノ目的及ヒ其總會ニ於テ評決セラレヘキ事項如何ヲ豫知スルコトヲ得セシメ其決議權ヲ行フニ付キ十分ノ準備ヲ爲サシムル規定ナルヲ以テ會社カ株主ニ爲ス總會ノ通知ニハ其議事日程タルヘキ事項如何ヲ了解スルコトヲ得セシムルニ足ル記載アルコトヲ要ス今抗告人ノ發シタルモノナリト云フ通常總會ニ關スル通知ニハ「第七期諸計算書並ニ利益金配當ニ關スル件」トアリテ第七期計算及ヒ利益金配當ニ關スル件カ議事トナルヘキコトヲ推知セシムルコトヲ得ヘシト雖モ如何ナル計算ニ因リテ如何ナル割合ノ利益配當ト爲ルヘキヤ其計算ノ果シテ相當ナルヤ否等總會ノ決議ニ付スヘキ事項ニ至リテハ之ヲ知ルニ由ナキモノナルヲ以テ右商法ノ規定ニ違背スルコト瞭然タル何トナレハ斯ル通知ニ依ルモ株主ハ決議ヲ爲サルヘカヲササルモ下セシメハ議事ノ何タルヲ研究スルニ違ナカリシ株主ヲシテ遽カニ評決ノ數ニ加ハラシムルコトヲ強要スルハ異

總會召集ノ通知書ノ要件

ル所ナシ決議事項ヲ豫知セシメントスル立法ノ趣旨ヲ貫徹スルコトヲ得サレハナリ又其臨時總會ノ召集ニ付キ發シタリト云フ通知ヲ見ルニ「故副總裁片山遠平君ニ功勞金贈與ノ件」トナルヲ以テ其功勞ニ報スル爲メ金圓ヲ贈與スルコトヲ決議スル目的ノ總會ヲ召集シテ推知シ得ルモ贈與セントスル金額ハ果シテ若干ナルヤヲ知ラシムルコトナク株主カ決議スベキ事項ヲ表示ヲ爲スニ足ラサルカ故ニ此通知モ亦違法ナリトス而シテ抗告代理人カ右見解ヲ不當ナリトシテ引用スル例示ノ場合ニ於テモ新ニ選任スルト再選ヲ爲ス等決議事項異ルコトナキニ非ラス又慣習ハ法律ニ規定シタル事項ニ付テハ其效力ヲ有スルモノニ非サルコトハ法例第二條及ヒ商法第一條ニ依リ明ナルヲ以テ本案通知ノ如キ違法ノ通知ニ因リ總會ヲ開キタル幾多ノ實例アリトスルモ商法第五十六條第二項ノ規定ヲ除外セシムル效力ヲ有スルコトナシ

判決要旨

一、先取特權者カ目的物ノ對價ニ對シ其ノ權利ヲ行ハシムルニハ

清酒賣掛代金請求事件

明治三十五年(大)第六十號  
明治三十五年七月三日判決

(破毀)

質權抵當權ノ實行ノ場合ヲ除ク外其ノ對價ノ拂渡前ニ於テ差押ヲナスコトヲ要ス  
二、破産管財人ノ任務ハ總債權者ニ共通スル利益ニ限り之ヲ代表ス各債權者ニ專屬スル特別ナル利益ニ付キ代表スルモノニアラス  
三、破産管財人カ先取特權ノ目的タル物件ヲ換價スルニ當リ先取特權者カ其ノ對價ニ對シ差押ヲナサ、ルトキハ之ニ對スル優先權ヲ失フ

說明

一、先取特權ノ性質。先取特權ハ目的物ノ對價ニ對シ他ノ債權者ニ先テ之ヲ優先スルノ權利ヲ有スルニ止マリ地上權永小作權等ノ如ク直接ニ物ニ對スル使用權ヲ有スルモノニアラス然レトモ其ノ權利ノ直接ノ目的物ニ存シ對價ヲ優先スルハ權利ノ效果ニ過キサルカ故ニ物自體ノ滅失ハ其ノ影響ヲ權利ノ存在ニ及シ來ル故ニ苟モ先取所持權ノ目的物ニシテ已ニ消滅ニ歸センカ之ヲ目的トスル權利モ亦從テ消滅ニ歸ス

先取特權ノ性質及民法第三百四條ニ依ル先取特權ノ行使

キヤ言ヲ待タサルナリ。今民法ノ規定ヲ繙クニ此ノ觀念ハ動産ノ目的ト  
 スル先取特權ニ對シテハ尙ホ一層其ノ範圍ヲ擴張セラレ先取特權ノ消  
 滅ハ獨リ其目的物件ノ消滅ノ場合ニ止ラズ債務者カ其動産ヲ占有者  
 他人ニ移シタル場合モ尙ホ且ツ之カ消滅ヲ來スモノトセリ(民法第三三  
 三條)是レ蓋シ動産ニ對スル物權ノ消長ハ常ニ其目的物件ニ對スル  
 三條)占有權ノ有益ヲ以テ標準トスル一般法制ノ結果ニ外ナラス  
 先取特權ノ性質以上説明ノ如クナルニ不拘民法第三百四條ノ規定ニ於  
 テ先取特權ハ其ノ目的物件ノ賣買賃借滅失毀損等ニ依リテ債務者カ受ク  
 ヘキ金錢其ノ他ノ物ニ對シテモ之ヲ行フコトヲ得云々トアリテ目的物  
 件ノ滅失毀損其ノ他ノ轉換ニ依リ變體セル金錢其ノ他ノ物ノ上ニ尙ホ  
 斯ノ權利ノ存在ヲ認ムル何ソヤ是レ畢竟法律カ先取特權者ヲ保護セシ  
 トスル一ノ例外ノ規定ニシテ別ニ深淵ナル法理ノ存スルニアラサルナ  
 リ若シ夫レ先取特權ヲシテ一般ノ原則ニ放任シ此ノ例外ヲ認メズンハ  
 不良ノ債務者ハ讓渡其ノ他ノ方法ニ依リ容易ニ先取特權ノ行使ヲ免カ  
 レ追ニ其ノ目的ヲ達スルニ能ハサラシムルニ至レハ大ニ然リ而シテ凡  
 ソ例外ノ規定ハ法律ノ明文ニ依リ始メテ創設セラル、カ故ニ之ニ依テ  
 爲スニ權利ノ主張ハ專ラ其ノ規定ヲ遵守スルニ依テ始メテ法律上ノ效  
 力ヲ有スルハ一般解釋法ノ認ムル所ナリ今民法第三百四條ノ規定ヲ以

四百四

テ先取特權ノ例外ノ規定ナリトセハ之ニ依テ行使スル先取特權ハ復タ  
 專ラ同條ノ規定ニ遵守スルヲ要スルヤ言ヲ待タズ而シテ目的物件ノ對價  
 ニ對スル先取特權ノ行使ハ其ノ拂渡以前ニ差押ヲ要スヘキハ同條ノ明  
 規スル所ナルヲ以テ此ノ規定ニ依ラサル先取特權ノ行使ハ有效ニ其ソ  
 對價ヲ優先スルヲ得サルナリ  
 質權抵當權ノ實行ノ場合ニ於テ其ノ代價ヲ優先スルニ付キ拂渡以前ニ  
 差押ヲ要セサル所以ノモノハ目的物件ノ換價ハ他人ノ行爲ニ依ルニアラ  
 スシテ質權若シハ抵當權者自ラ之ヲ行フカ故ニ更ラニ其ノ對價ノ差押  
 ヲオスルカ如キハ重複ノ手續ニ屬スルハナリ  
 二本項ノ説明ヲ要セス  
 三動産ニ關スル先取特權ハ債務者カ其動産ヲ他人ニ引渡シタルトキ  
 レヲ行フコトヲ得サルハ民法第三百三十三條ノ明規スル所ナリ而シテ  
 破産管財人ハ債務者ニ代リテ其ノ財產ヲ處理スルモノナルカ故ニ破産  
 管財人カ換價ノ爲メニ動産ヲ引渡サスハ債務者自身ニ之レヲ引渡ス  
 下毫無異ナル所ナリモ特ニ從テ其ノ對價ニ付キ先取特權ヲ行使セシ  
 トセハ等シシ民法第三百四條未段ノ規定ニ從ヒ之レカ差押ヲ要スルキモ  
 又是レ等シシ民法第三百四條ニ依ル先取特權ノ行使

四百五



皮想ノ感ヲ以テセハ破産管財人ハ債務者ニ代テ凡テノ財産ヲ處理スル  
ト同時ニ各債權者之利益ヲ代表スルモノナルカ故ニ若シ換價ノ爲メニ  
引渡ス物件ニ對シ先取特權ヲ有スル債權者アリトモハ破産管財人ハ宜  
シク其ノ債權者ノ爲メニ差押行爲ヲ施スヘキニ似タリト雖モ這ハ是レ  
一般債權者ニ共通スル利害問題ニアラスシテ單ニ其ノ債權者ノ特別  
利害ニ關スルモノト云フヘシ破産管財人ハ一般債權者ニ共通スル利害  
問題ニ關シテノ各債權者ヲ代表スルニ止マリ或ル一人ニ對スル特別  
ノ利害ニ關シテハ之ヲ代表セサルコト本件第二判旨ノ示ス處ナルヲ以  
テ此差押行爲ニ對シテハ管財人ノ代表スヘキ限リニアラサルナリ

第一審 函館地方裁判所 第二審 函館控訴院

上告人 小原仙造 訴訟代理人 高橋文之助

被上告人 瀧澤文四郎 訴訟代理人 山口憲

右當事者間ノ清酒賣掛代金請求事件ニ付函館控訴院カ明治三十四年十二月二日言渡シタル  
判決ニ對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタル

判決

原判決中被告訴人ノ優先權ヲ承諾スヘシトアル部分ハ之ヲ破毀ス  
被上告人ノ控訴ハ之ヲ棄却ス

上告ニ關スル訴訟費用ハ被上告人負擔ス可シ

理由

上告ノ趣旨ハ原院ハ事實ヲ誤認シ不當ニ法律ヲ適用シタル違法ノ判決ナリ先取特權ハ特ニ  
或ル債權者ヲ保護スル法律ノ變例ニシテ平等分配ノ原理ニ反スルモノナルヲ以テ其權利ノ  
實行ニ必要ナル法律上ノ條件ハ嚴正ニ之ヲ解釋セサル可カラズ民法第三百二十二條ニ動産  
賣買ノ先取特權ハ動産ノ代價ニ付其動産ノ上ニ存スルコトヲ定ムレトモ總則タル第三百四  
條但書ハ此特權ヲ行フニハ先取特權者ハ其拂渡前ニ差押ヲ爲スコトヲ要スルコトヲ明記セ  
リ然ルニ本件ニ於テ先取特權ノ主張者タル被上告人ハ總テ差押ヲ爲シタルコトナキハ被上  
告人モ亦爭ハサル事實ニシテ原院モ亦認ムル所ナリ然ラハ則チ被上告人ハ第三百四條ノ條  
件ヲ履行セサルモノニシテ其先取特權ナキコト明白ナリ原院カ之ヲ以テ尙先取特權アルモ  
ノトセラレタルハ民法第三百四條ヲ無視セル不法ノ判決ナリ原院ハ其判決理由ニ於テ先取  
特權ハ清酒ヲ代表シ其變體タルヘキ代金ノ上ニ存在スト辯明セラレタレトモ先取特權ノ其  
變體タル代金ニ存在スルハ一般ノ通則ニシテ言ヲ待タサル所毫モ之レカ爲メニ先取特權ノ  
行使ニ必要ナル差押自身ニ何等ノ影響スル所無シ又原院ハ一般ノ賣買ト競賣トハ其趣ヲ異  
ニスト説明セラレタレトモ何等法律ノ明文ナキニシテ之レカ爲メニ差押ノ必要ナキ事  
トセラレタルニ至リテハ是又法律ノ明文ヲ無視スルモノナリト云フニ在リ

按ス所ニ被上告人ヨリ破産者ニ賣渡シタル清酒ハ上告人即チ破産管財人カ既ニ換價處分ヲ  
先取特權ノ性質及民法第三百四條ニ依ル先取特權ノ行使

亦シテ被上告人ハ其代價ノ拂渡前ニ於テ差押ヲ爲サザルコト事實ハ原判決ヲ確定シタル所ニシテ被上告人カ其債權及モ優先權ノ届出ヲ爲シタルハ換價終了シ後即チ其既ニ別除權ヲ行使スルヲ得サル時期ニ在リテ實ニ訴訟記録ニ徴シテ明瞭ナリ抑先取特權ハ目的物トシテ存スル權利ニシテ就中本件ノ如ク動産ノ上ニ存スルモノハ目的物ヲ第三取得者ニ引渡シタル後ハ其動産ニ付先取特權ヲ行フヲ得サルコトハ民法第三百三十三條ニ於テ明カニ規定スル所ナリ然リ而シテ先取特權ノ性質タルキ唯目的物ノ上ニ存在スルニ過キサルミナラス其目的物第三取得者ノ占有ニ歸シタル後ハ之ヲ行フ能ハサルコト亦止述フ如クナリ得セハ純理ヲ以テ之ヲ言ハル此場合ニ於テ先取特權ハ業已ニ消滅シタルモノト斷定セサルヲ得ス然レハ則チ民法第三百四條ノ規定即チ先取特權ヲ目的物ノ對價ニ對シテ行フコトヲ得トノ規定ハ特ニ法律ノ明文ヲ待テ而シテ後始メテ然ルコトヲ得ルニ過キス先チ其先取特權當然ノ作用ニ非サルコト誠ニ明ニシテ其對價ノ拂渡又ハ引渡前ニ差押ヲ爲スコトヲ要スル所以ノ理由實ニ此ニ在リト云フハ先取特權ノ性質既ニ此ノ如クナリトセハ若シ先取特權者目的物ノ對價ニ對シテ之ヲ行ハント欲スレハ必ス其拂渡又ハ引渡前ニ於テ差押ヲ爲スコトヲ要スルコトハ債務者カ目的物ヲ賣渡シタル場合ト破産管財人カ適法ノ手續ニ依リテ換價ヲ爲シタル場合トニ因リテ消長スルノ理アル可ラス何トナレハ破産管財人カ其任務トシテ破産財團ニ對スル總債權者ニ共通ナル利益ニ付テ之ヲ代表スルコトアルニ過キスシテ各個債權者ノ特殊ナル利益ニ付テ代表スル者ニ非サレハナリ由是觀之本件ニ於テ被上告

人カ清酒ヲ換價シタル金額ノ上ニ先取特權ヲ有セサルコト誠ニ明白ナリ被上告人ハ民法第三百四條ニ債務者カ受クヘキ金錢云々ノ語アルヲ以テ債務者カ破産シタル場合ニハ其規定ニ適用スヘキ限リニ在ラズト辯明スレトモ前既ニ說明シタル如ク先取特權ヲ目的物ノ對價ニ對シテ行フコトヲ得ル所以ハ該條ノ規定アルニ依ル故ニ若シ被上告人ノ辯明ヲ以テ果シテ當レリト爲サンカ被上告人ハ優先權ノ主張ト相容レサル結論ヲ得ルニ至ルヘシ況ンヤ破産者ハ其財產ニ關シテ權利ヲ行使スルコトヲ得サルニ止マリ之ヲ喪失スルモノニ非サルヲ以テ民法第三百四條ノ債務者ノ語ニハ破産ノ宣告ヲ受ケタル債務者モ亦包含スルモノト解釋スヘキニ於テオヤ被上告人ノ論旨ハ固ヨリ失當タルコトヲ免カレス又被上告人ハ抵當權者質權者カ各其權利ノ目的ヲ競賣スル場合ニ於テハ特ニ競落人ニ對シテ差押ヲ爲ス要ナキコトヲ援引シテ本件ニ於テモ亦差押ノ要ナキ旨主張スレトモ此ハ是抵當權質權ノ行使ニ因リテ競賣ヲ爲ス場合ナルヲ以テ特ニ競落人ニ對シテ其拂渡スヘキ對價ニ付テ差押ヲ爲ス要ナキニ外ナラス況ンヤ強制競賣ノ場合ニ於テハ必スヤ目的物ヲ差押ヘ而シテ之ヲ競賣スル手續ナルヲ以テ再對價ノ差押ヲ爲スカ如キハ重複ノ手續ナルニ於テオヤ加之抵當權者及ヒ質權者ト雖モ各其權利ノ行使ニ因ラスシテ目的物ノ賣却セラレタル場合ニ於テ其對價ニ付テ優先權ヲ行ハント欲スルトキハ民法第三百四條ノ規定ニ從ヒ差押ヲ爲スノ要アルコトハ同法第三百五十五條及ヒ第三百七十二條ニ徴シテ毫モ疑ヲ容ルヘシ然レバ故ニ被上告人ノ此少論旨亦採採用スル由ナシ

先取特權ノ性質及民法第三百四條ニ依ル先取特權ノ行使

上來説明スル如ク被告上告人ハ清酒ノ對價ニ付キ優先權ヲ有セサルコト誠ニ明ニシテ其事實ハ裁判ヲ爲スニ熟スルニ因リ民事訴訟法第四百四十七條第一項第四百五十一條第四百五十二條及七十三條第一項ノ規定ニ從テ主文ノ如ク判決ス

●約束手形金請求事件

明治三十五年(オ)第三三十三號  
明治三十五年九月五日判決 (破毀)

判決要旨

一、償還請求ノ爲メニ發スヘキ通知ハ法律上一定ノ法式ヲ限定セサルカ故ニ必スシモ意思傳達ノ機關トシテ定メラレタルモノニ依ルコトヲ要セス其ノ通知カ通常到達シ得ヘキ手續ヲ完了シタルトキハ其ノ方法ノ如何ヲ不問之レテ以テ送達アリタルモノトナスニ足ル

二、償還請求ノ通知ノ送達ヲ執達吏ニ委任シタルトキハ其ノ通知ヲ發シタルモノトナスコトヲ得

本件ハ説明ヲ要セス

(參照) 所持人カ前條ノ請求ヲ爲サント欲スルトキハ支拂ヲ求ムル爲メ爲替手形ヲ支拂人ニ呈示シ、若シ手形金額ノ支拂ナキトキハ滿期日又ハ其後二日內ニ支拂拒絶證書ヲ作ラシメ且償還ヲ爲サシメント欲スル者ニ對シ拒絶證書作成ノ翌日マテニ償還請求ノ通知ヲ發スルコトヲ要ス。所持人カ前項ニ定メタル手續ヲ爲サリシトキハ其前者ニ對スル手形上ノ權利ヲ失フ(商法第四百八十七條)

第一審 東京地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人 藤本徳之進

被告上告人 木村授彌太

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十五年五月三日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨ノ第一ハ原因ハ「執達吏ハ意思傳達ノ機具ニ非ス當事者ノ委仕ニ依リ其職務ヲ行フモノナルヲ以テ右ノ通知ヲ執達吏ニ委任セル時ヲ以テ通知ヲ發シタルモノトナスコトヲ得ス云々」ト説明シ上告人ノ請求ヲ棄却シタルモ此判決ハ(一)明治二十三年法律第五十二號執達吏規則第二條ニ於テ執達吏ヲ意思傳達ノ機關トシタルモノニ違ヒ(二)委任ニ依ル法律行為ノ效力ト委任其モノト混同セル不法ヲ免レス委任ニ依ル法律行為ノ效力ト本人直接ニ爲ス行為トハ其效力ヲ同フスヘシト雖モ委任ノ事實ハ之ヲ否定スヘキモノニ非ス抑モ發着

償還請求ノ爲メニ爲ス通知ノ法式

ハ甲者ノ手ヲ離脱シ乙者ニ達スル迄ノ事實ヲ指スモノニシテ其傳送ノ事實ハ委任ニ依ル  
 其其他ノ方法ニ依ルトニ因リテ異ルコトナシ故ニ上告人カ執達吏ニ通知ヲ委任シタルトキ  
 小則其發送アリト云ハサルヲ得ズト云ヒ其第二ハ執達吏ハ當事者ノ委任ニ依リ法定ノ  
 職務ヲ行フモ以テシテ其代理人ニ非サルニモ拘ハラズ原院ハ執達吏ヲ以テ委任者ノ代理人  
 ナリト認メ上告人カ償還請求ノ通知ノ委任ハ未タ通知ヲ發シタルモノト爲スコトヲ得スト  
 判示シタル不法ニ陥レルモノナリト云フニ在リ

被上告人ハ辯論期日ヲ懈怠シタリ  
 按スルニ商法第四百八十七條ニハ償還請求通知ノ發送ヲ以テ償還請求ヲ爲ス要件中ニ置キ  
 タルノミニテ其方法ヲ定メサルニ固リ通知カ通常到達シ得ヘキ手續ヲ執了スルヲ以テ其發  
 送アリトスルニ足レリ(明治三十四年十一月二十一日(オ)第三六二號事件判決參照)必シモ  
 意思傳達ノ機關ト定リタルモノニ依ルコトヲ要セサルナリ蓋シ執達吏ハ特ニ意思傳達ノ機  
 關トシテ任用セラレタル者ニ非スト雖モ當事者ノ委任ニ依リテハ其意思ノ通知ヲ爲スコト  
 ヲ妨ケサルヲ以テ本件ノ如ク償還請求ノ通知ヲ爲スコトヲ執達吏ニ委任シ其拒絕ナカリシ  
 場合ニ於テハ上告人ハ償還請求ニ必要ナル通知ヲ發シタルモノト云ハサルヘカラス然ルニ  
 原院カ意思傳達ノ機關(原判決附本ニハ機具トアルモ機關ノ誤寫ナラン)タラサル執達吏  
 ニ委任シタル償還請求ノ通知ハ未タ其發送ト爲ラスト説明シタルハ前掲法文ヲ不當ニ適用  
 シタルモノニシテ其判決ニハ全部破毀セラルヘキ瑕瑾アルモノトス

以上説明ノ如クナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項及第四百四十八條第一項ニ依  
 リ注文ノ如ク評決ス

●商法違犯事件ノ決定ニ對スル抗告事

明治三十五年(ク)第五百七十二號 (棄却)

判決要旨

商法第九十五條ニ所謂精算人ハ會社ノ債務ヲ辨濟シタル後ニア  
 ハ會社ノ負擔スル凡テノ債務ヲ悉ク償却シタル後ニアラ  
 サレハ其ノ財産ヲ分配スルコトヲ得ストノ意ニシテ相當  
 ノ金額ヲ準備シ置クトキハ負債辨濟前ニ在テモ之レヲ分  
 配スルコトヲ得トノ法意ナラス

說明

是レ商法第九十五條ノ規定ハ專ラ債權者ヲ保護スルノ規定ナルニ由ル  
 若シ夫レ清算人ニ於テ債權者ニ對スル負債額ノ全部ヲ準備シタリトスル  
 モ未タ之ヲ辨濟スルニ非スハ債權者ヲ満足セシムルヲ能ハス辨濟ニ先  
 チ財産ノ分配ヲ爲カ如キハ債權者ヲ完全ニ保護スル所以ニ非サレハナリ  
 是レ同條ノ規定中債務ヲ辨濟シタル後ニ非サレハ云々トアル所以ナリ

殘餘財産分配ノ時期

原告 東京控訴院  
 被告 株式会社東京十二商品  
 取引所清算人 熊谷平 外三名  
 訴訟代理人 降旗龍太郎  
 右原告人ハ商法違犯事件ニ付東京控訴院カ明治三十五年五月二十七日與ヘタル決定ニ對シ更ニ當院ニ抗告ヲ爲シタリ依テ決定ヲ爲ス左ノ如シ  
 本件抗告ハ之ヲ棄却ス

理由

抗告第一ノ趣旨ハ商法第九十五條ニ所謂清算人ハ會社ノ債務ヲ辨濟シタル後ニ非サレハ會社ノ財産ヲ社員ニ分配スルコトヲ得ストノ意ハ現實ニ會社ニ存スル債務ヲ支拂ヒタル後ニ非サレハ分配ヲ爲スコト能ハサルノ意ニ非シテ現實ノ辨濟ハ勿論其債務ニ對シ適當ナル辨濟方法ノ途講セラレ有之ニ於テハ敢テ會社財産ヲ社員ニ分配スルコトヲ得サルノ意ニ非サルコト明瞭ナリトス本件ノ場合ニ於テ杉山信平ナルモノカ債權者ナリト主張シ訴訟繫屬中ニ屬スレトモ右ニ對スル債務ノ辨濟方法ハ乙第一號證ノ債權ヲ以テ優ニ辨濟シ盡シテ餘リアル次第ナレハ假リニ會社ニ於テ支拂義務有之モノトスルモ本件清算人カ爲シタル分配行為タル適法ニシテ些ノ瑕瑾ナキモノナリ原裁判所ニ於テ原告人カ清算行為ハ實體上終了シタルモノナリトノ意ハ上來主張スル所ヲ敷衍シタル次第ニシテ毫モ違法ノ廉無之者ト信スト云フニ在リ

依テ按スルニ商法第九十五條ニ所謂清算人ハ會社ノ債務ヲ辨濟シタル後ニ非サレハ會社ノ財産ヲ社員ニ分配スルコトヲ得ストノ意ハ會社ノ其負擔スル債務ヲ悉皆償却シタル後ニ非サレハ其財産ヲ分配スルコトヲ得ストノ意ニシテ原告人所論ノ如ク相當ノ金額ヲ準備シ置クトキハ負擔辨濟前ニ在テモ財産ヲ分配スルコトヲ得トノ律意ニテ何カ本條ハ債權者ヲ保護スル爲メ設クタル規定ナルニ抗告論旨ノ如ク清算人ニ斯ル臨機ノ取扱ヲ爲ス權限アルモノトスルトキハ決シテ債權者ヲ完全ニ保護スルコトヲ得サレハナリ故ニ本論旨ハ其理由ナシ依テ正文ノ如ク判決スルモノナリ

追徴訴訟事件

明治三十五年(才)第五十五號  
 明治三十五年七月四日判決 (破毀)

判決要旨

株式会社ノ總會召集ノ手續又ハ其ノ決議ニ不方アルノ故ヲ以テ總會ノ決議ヲ無効トセンニハ舊商法ニ依リタルト新商法ニ基キタルトナ不問訴ヲ以テ無効ノ宣告ヲ受クルコトヲ要ス

說明

本件ハ說明ヲ要セズ

株主總會決議ノ無効

(參照) 總會招集手續又ハ其ノ決議ノ方法カ法令又ハ定款ニ反スルトキハ株主ハ其ノ決議ノ無効ノ宣告ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得(商法第六十條第一項)

(參照) 商法第六十三條第一項第二項ノ規定ハ舊商法ノ規定ニ依リテ招集シタル創業總會ノ決議ニ之レヲ準用ス以下(商法施行法第四十八條)

第一審 奈良地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 勢和鐵道株式會社清算人 外一名

訴訟代理人 大加藤 鐘彦 市吉

被上告人 瀬能 篤 助 外五十八名

訴訟代理人 八登高 藤田 木部 益四 三郎 三郎 三郎

右當事者間ノ不法公賣取消請求並株式公賣不足金追徵訴訟事件ニ付大阪控訴院カ明明三十四年十月三十日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ闕席セラル被上告人ニ對シテハ闕席ノ儘判決アリ度旨申立テ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判 決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ差戻ス

理 由

上告諭旨第三點ハ明治三十年四月十五日ニ開ケル株主總會ノ決議ハ商法施行法第四十八條ノ規定ニヨリ現行商法施行後一ヶ月ヲ經テ既ニ確定シタルモノニシテ本件起訴ノ時即チ明

治三十一年九月二十九日ニ在テハ請求ノ目的若クハ原因トシテ其效力ノ有無ヲ争フコトヲ得ス然ルニ原判決文ハ假株券臺帳中記入ノ精確ナラサル諸點ヲ列擧シ且ツ曰ク「之レニ依テ之ヲ見レハ控訴人會社ノ株主名簿ハ舊商法第七十四條ニ所定セル事項ヲ記載セサル頗ル亂雜不正確ノモノナルコトヲ推定スルニ餘アリ果シテ然ラハ明治三十年四月十五日ノ株主總會ハ真正ノ株主ヲ招集シ決議ヲナシタルモノト認ムルコトヲ得サルヲ以テ從テ同總會ニ於テ選舉セラレタル役員ハ無効ニシテ同役員ノ決議ニ基キ爲シタル所ノ本件公賣處分ハ無効ノモノト判定セサルヲ得ス故ニ七九五號事件ノ被控訴人ノ請求三九八號事件ノ被控訴人ノ抗辯ハ此點ニ於テ其理由アルモノトス」ト是レ即チ真正ノ株主ヲ招集セザリシテ理由トシテ該決議ヲ無効ナリトシタルモノニ外ナラス果シテ然ラハ總會招集ノ手續違法ナリシ場合ナルヲ以テ商法第六十三條商法施行法第四十八條ヲ適用セラルヘカラス然ルニ原院ハ其理由ノ末段ニ於テ「右ニ列擧スル所ノモノハ總會招集ノ手續又ハ決議ノ方法ニ關スルモノニアラサルヲ以テ云々ト恰モ假株券臺帳記入ノ不整頓ヲ以テ決議無効ノ理由トナスモノ、如クニ説明シ該條ノ支配ヲ受クヘキモノニアラストセリ然レトモ假株券臺帳ノ不數頓ナルコトハ夫レ自ラニ於テ決議無効ノ原因ニアラスシテ決議無効ノ原因タル事實即チ總會出席者ノ真正ノ株主ニアラザリシコトヲ證明スヘキ證據方法タルニ過キス左レハ原院ハ二者ヲ混同シ前後二様ノ説明ヲ爲シタルモノニシテ要スルニ商法第六十三條ヲ適用セサルノ不法アルモノトス」

株主總會決議ノ無効

其第四點ハ原判決ハ「前畧明治三十年四月十五日ノ株主總會ハ真正ノ株主ヲ召集シ決議ヲ爲シタルモノト認ムルコトヲ得サルヲ以テ從テ選舉セラレタル役員ハ無効ニシテ同役員ノ決議ニ基キ爲シタル所ノ本件公賣處分ハ無効ノモノト判定セサルヲ得ス」ト說明セリ然レトモ抑モ株主總會ヲ召集シ役員ヲ選舉スルカ如キ事ハ假リニ召集ノ手續ニアラストスルモ一種ノ法律行爲ニシテ苟モ役員ノ選舉其モノカ不法ナルトキ(例ヘハ選舉セラレタル役員カ株主ニアラサルカ如キ場合)ノ外假令其株主中一二ノ株主權ノ不明確ナルモノカ誤リテ決議ニ參與セリトスルモ當然無効ニ歸シ全ク株主總會ナク又役員ノ選舉ナカリシモノト同一ナリト爲スヘカラス法律行爲存在スルニモ拘ハラズ(假リニ瑕疵アリトスルモ)之ヲ全ク存在セサルモノ即チ當然無効ナリト爲スニハ法律ノ規定ヲ必要トス本件ノ株主總會ハ明治三十年四月十五日ナルカ故ニ舊商法ニ依リテ律セラルヘク舊商法ニハ總株主會ヲ無効トセル規定ナシ是或ハ法律ノ不備ナルヘシト雖モ之ヲ曲解シテ何時ニテモ株主總會ノ有效無効ヲ爭訟スルヲ得ト解釋セハ株主總會ハ永久確定スルノ期ナクシテ會社事業ハ安全ヲ保持スルコト能ハサルニ至ルヘシ現行商法ニ於テモ株主總會ハ當然無効ト爲ルモノニアラスシテ第三點ニ說明セル特殊ノ場合ニ限り裁判所ノ宣告ヲ經テ初メテ無効トナルナリ是等新舊兩法ヲ比照スルモ株主總會ハ決議ヲ無効ト爲スニハ必ス法律ノ規定スル所ニシテ而シテ裁判所ノ宣告ヲ要ストセリ株主總會カ法律ノ特別規定ナキニモ拘ハラズ當然無効トナリ何時ニテモ無効ヲ主張スルヲ得ルカ如キ法理存在セサルモノトス然ルニ原院判決ハ明治三十年

四月十五日ノ株主總會ハ上告會社ノ株主總會タルコトヲ認メ而シテ其株主中ニ真正ナル株主ト認ムヘカラサルモノアリトノ理由ニ依リ其株主總會ノ決議ヲ無効ト爲シタルハ法律ノ解釋ヲ誤リタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ

按スルニ原判決理由第五號ニ「控訴人ノ訴訟自體ニ關スル陳述第四點ニ對シ說明ヲ付スルニハ先ツ被控訴人ノ陳述ニ係ル控訴人會社ノ株主名簿ハ法律ノ規定ニ從ハサルノミナラス甚ダ亂雜ニシテ不正式ニ増減變更ヲ爲シ正當ノ株主ヲ認知シ難ク從テ之ニ基キ召集シタル明治三十年四月十五日ノ株主總會ハ無効ニシテ同會ニ於テ選舉セラレタル役員ハ其效ナキモノナリヤ否ヤニ付審究ヲ爲サル可カラス因テ被控訴人ノ申請ニ因リ提出シタル假株券臺帳ヲ閱スルニ云々是ニ以テ之ヲ見レハ控訴人會社ノ株主名簿ハ舊商法第七十四條ニ所定セル事項ヲ記載セサル頗ル亂雜不正確ノモノナルコトヲ推知スルニ餘リアリ果シテ然ラハ明治三十年四月十五日ノ株主總會ハ真正ノ株主ヲ召集シ決議ヲ爲シタルモノト認ムルヲ得サルヲ以テ從テ同總會ニ於テ選舉セラレタル役員ハ無効ニシテ同役員ノ決議ニ基キ爲シタル所ノ本件公賣處分ノ無効ノモノト判定セサルヲ得ス」ト說明セリ此判旨タル要スルニ明治三十年四月十五日ノ總會ハ真正ノ株主ヲ召集シタルモノト認ムルヲ得サルヲ以テ同總會ニ於テ選舉セラレタル役員ハ無効ニシテ從テ其役員ノ爲シタル公賣處分ハ無効ナリト云フニ在ルヲ以テ即チ總會召集ノ手續不當ナリト云フノ故ヲ以テ總會ノ決議即チ役員ノ選舉ヲ無効ナリト認メ以テ公賣處分ヲ無効ト斷定シタルモノナリ凡ソ株式會社ノ總會召集ノ手續

續又ハ其決議ノ方法カ不法ナルノ故ヲ以テ總會ノ決議ヲ無効ト爲スニハ舊商法ニ依リタル  
モノナルト新商法ニ基キタルモノナルトヲ問ハス訴ヲ以テ無効タルノ宣告受ケサル可カ  
ラサルモノニシテ無効ノ宣告受ケタル事實ナキ總會ノ決議ニ對シ漫ニ之ヲ無効視スルコ  
トヲ得サルコトハ商法第六十三條第一項ニ「總會招集ノ手續又ハ其決議ノ方法カ法令又  
ハ定款ニ反スルトキハ株主ハ其決議ノ無効ノ宣告ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得」トアリ其  
第二項ニハ「前項ノ請求ハ決議ノ日ヨリ一ヶ月内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス」トアリ尙ホ商法  
施行法第四十八條ニハ「商法第六十三條第二項及第二項ノ規定ハ舊商法ノ規定ニ依リテ  
招集シタル創業總會ノ決議ニ之ヲ準用ス但同條第二項ノ期間ハ商法施行前ニ決議ヲ爲シタ  
ル場合ニ於テハ其施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス」トアルニ依リ自ラ明ナリ然ルニ原判決ハ前掲  
ノ如ク明治三十年四月十五日ノ總會決議ノ會ヲ無効ノ宣告ヲ受ケタル事實ヲモ認メス恰モ  
總會招集ノ手續ニ不當ノ廉アレハ其決議カ當然無効ナルカ如ク斷定シタルハ株主總會ノ決  
議無効ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタル不法ヲ免カレサルモノトス但原判決ハ其理由末段  
ニ於テ右ニ列舉スル所ノモノハ總會招集ノ手續又ハ決議ノ方法ニ關スルモノニアラサルヲ  
以テ此點ニ付テハ控訴人ノ第四ノ陳述ハ別ニ攻撃防禦ノ方法ニ供スル理由ト爲スニ足ラサ  
ルモノトス」ト判示シ前掲ノ判決理由ハ招集ノ手續又ハ決議ノ方法ニ關スルモノニアラサ  
ルカ如ク説明セルモ原判決カ明治三十年四月十五日ノ總會ノ決議ヲ無効ナリト認メタルハ  
真正ノ株主ヲ招集シタルニアラスト云フニ基キタルモノナルコトハ前掲判文上一點ノ疑ヲ

容ル、ノ餘地ヲク末段ノ説明列舉云々ノ如キハ上告人所論ノ如ク真正ノ株主ヲ招集シタル  
ニアラスト認メタル材料タルニ過キササルモノニシテ決議ヲ無効トセル直接ノ理由ニアラス  
故ニ末段ノ説明ハ前掲ノ判旨ヲ支持スル理由ト爲スニ足ラス既ニ右ノ點ニ於テ原判決ヲ破  
毀ス可キモノト認ムルニ因リ他ノ上告論旨ニ對シ一ニ説明ヲ要セス而シテ共同被上告人中  
口頭辯論ニ出頭セサルモノアレトモ右ノ斷案ハ法律上ノ問題ニシテ事實上ニ關係ナキヲ以  
テ對質判決トシテ宣告ス可キモノトス  
以上説明スル如ク本件上告ハ其理由アルヲ以テ民事訴訟法第四百四十四條第一項ノ規定ニ  
依リ原判決ノ全部ヲ破毀シ同法第四百四十八條第一項ノ規定ニ從ヒ事件ヲ原院ニ差戻スヘ  
キモノト決ス是主文ノ如ク判決ヲ爲ス所以ナリ

●土地所有權確認并地代請求事件 明治三十五年(オ)第百七十二號 (棄却)

判決要旨

一、甲者カ乙者ニ對シ係争物件ノ所有者ニアラストノ確定判  
決ヲ受ケタルトキハ其判決ノ效力ハ甲者ヨリ輾轉シテ同  
一物件ノ所有權ヲ取得シタリト主張スル丙者ニ對シテモ  
其ノ效力ヲ及スコトヲ得



二、競賣ニ依リ物件ヲ買受ケタル場合ト雖モ其物件被競賣者ノ所有權ヲラス他ニ正當ノ所有者ナルトキハ買受人ハ之ヲ對抗スルコトヲ得ス

一、判決ノ效力ハ當事者間ニ止マリ第三者ニ及ハサルコト勿論ナリト雖モ本件ノ場合ノ如ク已ニ一ノ物件ニ付キ甲乙間ニ争ヲ生シ審判ノ結果係争物ノ所有權ハ乙者ニ存シ甲者ニ屬セサル旨ノ裁判ヲ受ケ確定シタル後ニ至リ丙者カ更ラニ同一物件ニ對シ嘗テ甲者ヨリ自己ニ讓受ケタルモノナリトノ理由ヲ以テ乙者ニ對抗シタルトキハ乙者ハ嘗テ甲乙間ニ行ハレタル判決ヲ以テ丙者ニ對抗スルモ法律上抵觸スル所ナシ之レ蓋シ甲者ニ對シ已ニ所有權ヲシトノ判決存スルトキハ甲者ヨリ讓受ケタルカ故ニ自己ニ其ノ所有權アリト主張スル者在ルニ當リ此ノ判決ヲ援用スルトキハ其ノ主張ハ直チニ根據ヲ失フニ至レハナリ其間對立者間ニ三競賣モ亦タ一ノ賣買ナルカ故ニ之レニ關スル特別ナル規定ヲ除ク外ニハ一般賣買ノ規定ヲ適用スレハナリ

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 長島武三郎 訴訟代理人 若林治  
被上告人 手塚平右衛門 訴訟代理人 武田貞之助

右當事者間ノ土地所有權確認並地代請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年二月十七日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理 由

上告理由第一點ハ原判決ニ依レハ係争地ノ數代前ノ地主ナル能勢傳吉ト被上告人間ノ係争地ニ關スル確定判決ノ効力ハ係争物件ニ追隨シテ後ノ地主ナル上告人ヲ繼承スヘキモノト論定シ若シ之レヲ繼承セスシテ同一訴訟ヲ許スヘキモノトセハ特定繼承人タル買主ニ於テ前地主ノ主張スルコトヲ得サル權利ヲ新ニ主張シ得ルコトハナリ讓渡ニ因リ其被理事物ニ對シ前地主ノ有セサル新ナル權利ヲ有スル背理ノ結果ヲ生スヘキモノトシ確定判決ノ效力ハ特定繼承人ニモ及フヘキモノト斷定セラレタリ然レトモ確定判決ノ效力ハ當事者若クハ法律上當事者ト同一視スヘキ人ヲ繼承スヘキモノニシテ買受人ノ如キハ明カニ第三者ノ地位ニ在ルモノニシテ當事者ト同一視スヘキモノニ非ラサルニ因リ其效力ヲ第三者ニ及ハス

第三者ニ對スル判決ノ效力

以キ理ナシ從テ第三者タル買受人ハ其關與セサル前地主間ノ被理事物ニ付テ前地主主張  
タルコトヲ得サル權利ヲ主張シ得ルコトハ明カニ法律ノ認許スル所ニシテ民法第七十七  
條ノ規定ニ徴スルモ登記法ノ定ムル所ニ從ヒ登記ノ存在セサル限りハ前地主ト他人間ニ被  
理事物ニ付テ何等ノ拘束ヲ受ケサルコトハ明カナリ若シ原判決ノ如ク確定判決ノ效力第三  
者タル買受人ニ及ホスヘキモノトセハ第三者ニ對シテモ尙ホ強制執行ヲ爲シ得ルコト云フニ  
均シキ背理ノ結果ヲ生スルニ至ルヘシ故ニ原判決ハ確定判決ノ效力ニ關スル法則ヲ不當ニ  
適用シタル不法アルモノナリト云フニ在リ

然レトモ本件ノ係争地タルヤ登記法施行以前ニ在テ被告上告人カ舊規則ニ從ヒ公證ヲ經テ之  
ヲ買取タルモノナルコトハ上告人ノ原院ニ於テ争ハサリシ所ナリ然レハ上告人ノ前所有者  
ナリト主張スル能勢傳吉カ被告上告人ニ對シ係争地ノ所有者ニ非サル旨ノ確定判決ヲ受ケタ  
ル上ハ此確定判決タルヤ傳吉ヨリ輾轉シテ係争地ヲ取得シタリト主張スル上告人ニ其效力  
ヲ及ホスモノトシテ毫モ妨アルコトナシ何トナレハ上告人ハ係争地ノ前主ナリトスル能勢  
傳吉カ真正ノ所有者ナリシコトヲ證明スルニアレハ公證ヲ經テ所有權ヲ得タル被告上告人ニ  
對シ結局係争地ノ所有權ヲ正當ニ取得シタルコトノ主張ヲ維持スヘキ原因存セザレハナリ  
故ニ原裁判所カ前掲能勢傳吉ト被告上告人トノ間ニ存スル確定判決ヲ以テ上告人ニ其效力ヲ  
及ホスモノト爲シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

得シタルモノナレハ其競賣以前ニ於テ如何ナル判決ノ存スルニセヨ競賣ノ效力トシテ登記  
簿上ニ存セサル負擔及ヒ制限ヲ受クルノ理ナキコトヲ主張(準備書面)シタルモノナレハ其  
競賣前ニ於ケル確定判決ノ效力競賣後ノ所有者タル上告人ニ及フヘキモノトセハ既判效ヲ  
以テ競賣ノ效力ヲ打破スヘキ理由ヲ明示スヘキモノナルニ競賣ノ事實ヲ不問ニ付シ去リ其  
點ニ關スル何等ノ説明ヲ爲サ、リシハ重要ナル事實ヲ遺脱シ且ツ裁判ニ理由ヲ付セサル不  
法アルモノナリト云フニ在リ

然レトモ假令裁判所ノ競賣ニ依リ地所ヲ買受ケタルモノト雖モ實際其被競賣者ニ所有權ア  
ルコトナク他ニ第三者ニ對抗スルヲ得ヘキ正當ノ手續ニ依テ之ヲ所有スル者アル場合ニ於  
テハ競賣ニ依リ其所有權ヲ失フヘキモノニアラス從テ競買者ハ真正ノ所有者ニ對抗スルヲ  
得ス然レハ競賣ニ因ルト契約ニ因ルトハ其間ニ區別アラサルヲ以テ競賣ニ因リタリトテ原  
判決ニ特ニ其競賣ノ無効ナル理由ヲ説明セサルモ違法ニアラス

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條ニ依リ主文ノ如ク判決スルモノナリ

●約束手形請求事件

明治三十五年(オ)第四百六十七號  
明治三十五年九月二十三日判決 (棄却)

判決要旨

一、證書訴訟トシテノ要件ヲ具備セサルトキト雖モ一般訴訟

證書訴訟ニ關シ特別要件ヲ缺クシタル訴ノ効力

ノ要件ヲ具備シタルトキハ訴ノ提起ハ權利拘束ノ效力ヲ生スルニ妨クルコトナシ從テ原告カ通常訴訟手續ニ依リ審理ヲ求メタルトキハ裁判所ハ本案ニ付キ裁判ヲナサ、ルヲ得ス  
二、手形ノ償還請求者カ被請求者ニ對シ其請求ノ延期ヲ承諾スルモ爲メニ手形上ノ權利ヲ失フモノニアラス

說明

一、證書訴訟ハ普通訴訟ニ比シ本來ノ性質ヲ異ニスルモノニアラス商業若クハ其他一般取引ノ迅速ヲ計ルカ爲メニ普通訴訟トシテ提起シ得ヘキ或ル一定ノ請求ニ對シ審理ノ落着ヲ速ニスルノ目的ヲ以テ普通訴訟手續ノ幾部ヲ省略シタル一ノ簡易訴訟タルニ過キス然リ而シテ此ノ簡易訴訟モ亦タ一ノ訴訟タルコト勿論ナルカ故ニ其ノ訴ノ提起ハ獨リ證書訴訟ニ關スル特別ノ規定ニ準據スルヲ以テ足レリトセス必スヤ其以外ニ於ケル一般の訴訟要件ヲ具備スルニアラスンハ有效ナラス然レトモ素ト證書訴訟事件ナルモノハ普通訴訟トシテモ亦タ之ヲ請求シ得ヘキ事件ナルカ故ニ證書訴訟トシテノ特別要件缺クシタル場合ト雖モ苟モ

普通訴訟ノ要件ヲ具備シタルハ民事訴訟法ノ規定ヲ按スルニ其第四百八十九條ニ於テ證書訴訟ヲ申出テス又ハ完全ニ之レヲ舉ケサル場合ニ於テハ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之レヲ舉ケサル場合ニ於テハ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之レヲ舉ケサル場合ニ於テハ被告ノ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若シハ證書訴訟ニ於テ許サ、ル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此ノ訴訟ニ於テハ其訴ヲ許サ、ル所アルトシテ之レヲ却下ス可シト規定シテ却下セサル可ラサルカ故ニ偶々普通訴訟ノ要件ヲ具備シタルハトシテ却下セサル可ラサルカ故ニ偶々普通訴訟ノ要件ヲ具備シタルハトテ之ニ權利拘束ノ效力ヲ認ムルハ前掲法文ノ規定ニ牴觸スルカ如シト雖モ然ラズ抑モ該法文ノ趣旨ハ當事者カ證書訴訟ニ關スル特別要件ヲ欠如スルニ拘ラス猶ホ證書訴訟トシテ其ノ手續ヲ進行セントスル關係ノ存在スル場合ニ應スルノ規定ニシテ其ノ訴ニ權利拘束ノ效力ヲ否認スルノ規定ナラズ何トナレハ已ニ說明スルカ如ク證書訴訟事件ハ普通訴訟トシテモ亦タ之レヲ提起シ得ヘキ事件ナルカ故ニ證書訴訟ノ要件ヲ缺クシタル故ヲ以テ普通訴訟トシテノ訴ノ效果則チ權利拘束ノ效力ヲ絕對ニ否認スルノ理由ナケレハナリ

證書訴訟ニ關シ特別要件ヲ缺クシタル訴ノ効力

證書訴訟ノ要件欲欠シタルトキト雖トモ普通訴訟トシテノ條件ヲ具備スルニ於テハ之レニ權利拘束ノ效力ヲ發生スル以上ノ如シトセハ之レニ基キ普通訴訟トシテノ手續ヲ進行シ得ヘキ亦タ當然ニシテ裁判所ハ原告ノ申立ニ對シ相當ノ審判ヲ辭スルヲ得サルナリ

二、本項ハ説明ヲ要セス

(參照) 所持人カ前條ノ請求ヲ爲サント欲スルトキハ支拂ヲ求ムル爲メ爲替手形ヲ支拂人ニ呈示シ若シ手形金額ノ支拂ナキトキハ滿期日又ハ其後二日內ニ支拂拒絕證書ヲ作ラシメ且償還ヲ爲サシメント欲スル者ニ對シ拒絕證書作成ノ翌日マテニ償還請求ノ通知ヲ發スルコトヲ要ス(商法第四百八十七條第一項)

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 築山八五郎

訴訟代理人 石山彌平

被上告人 平森文五郎

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年六月四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告論旨ノ第一點ハ爲替訴訟トシテ訴ヲ提起スルニハ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナ

ル事實カ證書ニ依リテ證セラレ得ヘキコトヲ要シ又其訴狀ニハ證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フルコトヲ要スルコトハ民事訴訟法第四百八十四條同第四百八十五條及ヒ同第四百九十四條ニ規定スル所ニシテ若シ其訴カ以上ノ要件ヲ缺クトキハ其訴ハ不合法トシテ却下スヘキモノタルハ同法第四百八十九條第二項ノ證書訴訟ヲ許ス可ラサルトキ(中略)ハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許サハル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許サルモノトシテ之ヲ却下ス可シトノ規定ニ依テ明カナリ而シテ其訴ノ證書訴訟(又ハ爲替訴訟)トシテ許ス可ラサルヤ否ヤノコトハ訴狀ヲ提出シタル當時ノ事實ニ基キ職權ヲ以テ調査スヘキ事爲タルコトモ亦同法第四百九十六條第二項ニ訴ノ許スヘキモノナルトキハ直チニ口頭辯論ノ期日ヲ定ムト規定シアルニ徴シテ明カナレハ其後ニ於ケル當事者ノ行爲ハ訴訟ノ成立ニ關シテ何等ノ效果ヲ生セサル道理ナリトス然ラハ即チ本件ノ訴ハ不合法トシテ之ヲ却下セサル可ラサルモノナリ何トナレハ本件ノ訴ハ爲替訴訟トシテ被上告人ヨリ提起セラレタルモノナルモ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實即チ係爭約束手形カ滿期日ニ振出人ニ呈示セラレタリトノ事拒絕證書ノ作成セラレタリトノ事實還要求ノ通知ヲ發シタリトノ事カ證書ニ依リテ證セラレ得可ラス又其訴狀ニハ以上ノ事實ヲ證スヘキ證書ノ原本又ハ謄本ノ添付ナク全然不合法ノ訴ナルコトハ被上告人提出ノ訴狀及ヒ上告人提出ノ答辯書(明明三十四年二月七日附)ニ依リ明カナレハナリ然ルニ原院ハ職權調査ヲ怠リ不合法ノ訴ヲ受理審判シテ

證書訴訟ニ關シ特別要件ヲ缺クシタル訴ノ効力

四百二十九

被告上告人ノ請求ヲ裁可シタルハ前記ノ訴訟法則ニ違背シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ然レトモ證據訴訟トシテ提起シタル訴訟カ其特別要件ヲ具備セサルトキト雖モ一般訴訟要件ヲ具備スルモノナルトキハ其事件ノ權利拘束ヲ生スルコトヲ妨ケサルヲ以テ若シ原告カ更ニ通常訴訟手續ニ依リテ審理ヲ求メントスル場合ニ於テハ裁判所ハ其申立ニ因リ本案ニ付キ裁判ヲ爲ササル可ラス本件ノ記録ヲ査閱スルニ被告上告人ハ上告人ニ對シ本訴ニ於テ償還請求ヲ爲スニ方リ書證ニ依リ其通知ヲ發シタル事實ヲ證明スヘキ方式ヲ缺キタルヲ以テ證據訴訟トシテ之ヲ許スヘカラサルハ勿論ナルモ原告即チ被告上告人ハ更ニ通常訴訟手續ニ依リ審理ヲ求ムル申立ヲ爲シタル場合ナルヲ以テ其申立ニ因リ通常訴訟手續ニ於テ本案ノ判決ヲ爲シタルコトハ固ヨリ相當ニシテ上告論旨ノ如キ不法アルコト無シ

上告第四點ハ被告上告人ノ主張スル所ニ依レハ係争約束手形ハ其支拂期日ヲ明治三十三年十二月二十日迄延期スルコトヲ承諾シタル事實トナレリ(第二審判決事實ノ揭示及ヒ明治三十四年十一月十九日附補充書參照)果シテ然ラハ被告上告人ノ權利ハ一種無名ノ民事上ノ債權ト變シ夫レト同時ニ被告上告人ハ手形上ノ權利ヲ失フタルモノナリ然ルニ原院ハ被告上告人ノ申立及ヒ甲第二號證ノ提出ニ依リ右ノ事實アルコトヲ認メ乍ラ(判決書ニ摘示ス)被告上告人ニ尙ホ手形上ノ權利アルトシタルハ手形ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタル不法アル判決ナリト信ス(明治二十八年二月十二日言渡二十七年第二五一號約定金請求ノ判例引用)ト云フニ在リ

然レトモ手形金償還請求者カ被請求者ニ對シ延期ヲ承諾シタルハトテ之ヲ以テ手形上ノ權利ヲ失フヘキ謂ハレナシ況ンヤ之ヲ本案訴訟記録ニ徵スルニ該延期ノ約束ハ結局成立セサル事實ナルニ於テオヤ故ニ此論旨モ亦其理由無シ

以上説明セシ如ク上告論旨ハ總テ其理由ヲキテ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

●株式競賣不足額及損害賠償請求事件 明治三十五年(乙)第三百六十二號 (棄却)

判決要旨

催告ハ之レヲ受領スヘキ特定ノ人ニ對スル意思表示ナルカ故ニ公告ノ方法ヲ以テ之レヲ爲スモ其ノ效ナシ

說明

本件ハ說明ヲ要セス

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 佛教生命保險株式會社

右法定代理人 大貝武布 訴訟代理人 若林秀溪

被告上告人 和田安兵衛

右當事者間ノ株式競賣不足額及損害賠償請求事件ニ付キ大阪控訴院カ明治三十五年五月九

催告ノ方式

日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告趣旨ノ第三ハ催告ト云ヒ公告ト云ヒ又通知ト云フモ只タ其名稱ヲ異ニスル迄ニテ要ハ相手方ニ對スル意思表示ニ外ナラス故ニ相手方カ其意思表示ノアリタルコトヲ知リタルニ於テハ右三種中何レノ名稱ヲ用ユルモ妨ケアルヘキ理由ナシ殊ニ株式會社ノ如キハ數萬ノ株主ヲ有シ之ニ對シ一々催告ノ手續ヲ行フコトハ實際不能ニ屬ス故ニ上告人ハ原院ニ於テ甲三號證ノ定款ヲ以テ公告スルコトヲ規定シ本件ニ於ケル株金拂込モ甲第一號證ノ如ク新聞紙ヲ以テ公告シタレハ被上告人カ之ヲ知ルト否トニ拘ハラズ有效ノモノトス況ンヤ此公告ノアリタル事實ハ被上告人カ第一審ニ於テ自白スル所ノモノナリト主張セリ然ルニ原院ハ之レニ對シ(公告ト催告トハ其手續ヲ異ニシ公告ハ以テ催告ニ代ルヘキ效ナキニ於テオヤ)ト説明セラレタルハ催告ニ關スル法則ヲ不當ニ適用セラレタルモノト思考スト云フニ在リ

然レトモ原判決ニハ甲第三號證定款ニ記シタル公告ノ規定ハ催告ノ場合ニ適用スヘキ趣旨ニ非サル旨判示シアリ而シテ催告ハ特ニ之ヲ領受スヘキ人ニ對シテ發スヘキモノニシテ公告ト同視スヘキニ非ス故ニ特殊ノ規定若クハ意思表示アラサル限ハ以テ催告ニ代フルコト

● 詐害行爲廢罷并質米返還請求事件

明治三十五年(オ)第二百二十八號 明治三十五年十月三日判決 (棄却)

判 決 要 旨

刑事訴訟法第十三條ニ規定スル賠償責任ハ告訴告發ニ關スル特別規定ニシテ不法行爲ニ關スル一般ノ賠償責任ヲ定メタル民法第七百九條ト抵觸スルモノニアラス從テ民法實施後ト雖モ此ノ兩法文ハ互ニ并立シテ悖ラサルモノトス

說 明

本件ハ說明ヲ要セス

(參照) 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得「被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ」民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得「要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテ

刑事訴訟法第十三條ト民法第七百九條トノ關係

其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得(刑事訴訟法第十三條)

故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之ニ因リテ生ジタル損害ヲ賠償スル責任ニ任ス(民法第七百九條)

第一番 大阪地方裁判所 第二番 大阪控訴院

上告人 小倉賀一郎

訴訟代理人

中近鳩上  
川村清元  
原山鹿和  
嘉造夫

被上告人 株式会社第一銀行

右法定代理人 熊谷辰太郎

右當事者間ノ詐害行爲廢罷並質米返還請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年二月二十一日言渡シタル判決ニ對シテ告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由第一點ハ原判決ハ不當ニ法則ヲ適用シタル不法ノ裁判ナリ原院ハ其判決理由ノ部ニ於テ「要スルニ乙第一號證告訴ハ被控訴人ノ惡意又ハ重大ナル過失ニ出ツルモノト認ムヘカラサレハ控訴人カ刑事訴訟ノ結果損害ヲ蒙リタレハトテ之レカ賠償ノ責任ヲ被控訴人ニ歸ス可カラサルハ刑事訴訟法第十三條ノ法意ニ照シテ明白ナリ」ト說示シ被控訴人ノ責任ヲ審按スルニ當リテ刑事訴訟法ニ準據セラレタリ抑モ告訴人告發人ノ責任ヲ論スルニ當

リ刑事訴訟法ニ準據スルハ民法施行以前ニアリテハ其當ヲ得タルモノナルヘシト雖モ民法施行ノ今日ニ於テ尙ホ刑事訴訟法ニ準據スルハ法律ノ適用ヲ誤マルモノト云ハサル可カラズ今民法及ヒ刑事訴訟法ヲ對比スルニ刑事訴訟法第十三條ニ被告人免訴無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原因告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得ト規定シ民法第七百九條ニ故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之レニ因リテ生ジタル損害ヲ賠償スル責任ニ任スト規定セルヲ以テ刑事訴訟法第十三條ノ場合ハ民法第七百九條ニ包容セラル、ノ結果此二個ノ法律ハ相互ニ抵觸スルモノト謂ハサル可カラス斯ノ如ク抵觸セル二個ノ法律カ存在スル場合ニ於テ後ノ法律カ前ノ法律ヲ廢止スルノ效力ヲ有スルコトハ法律上ノ一般原則ナルヲ以テ刑事訴訟法第十三條ハ民法ノ施行ニヨリテ當然廢止セラレタルモノト論定セサル可カラズ隨テ告訴人告發人ノ責任ヲ審按スルニ當リテハ民法第七百九條ニ準據ス可キモノナルニ原院ニ於テ刑事訴訟法ニ依リテ被控訴人ノ責任ヲ判定セラレタルハ不當ニ法則ヲ適用シタル不法ノ判決ト謂ハサル可カラスト云フニ在リ

然レトモ刑事訴訟法第十三條ハ告訴告發等ニ關シ特別ニ損害賠償ノ責任ヲ定メタル法條ニシテ一般ノ賠償責任ヲ定メタル民法第七百九條ト抵觸スルモノニアラサルカ故ニ同第十三條ノ規定ハ民法實施ノ後ト雖モ依然其效力ヲ有スルコト勿論ナリ然レハ原裁判所カ後ニ施行サレタル民法ノ規定ニ據ラス本案ノ場合ニ適用スヘキ刑事訴訟法ノ規定ニ照シテ被上告

人ニ責任ナキコトヲ判斷シタル適法ニシテ上告論旨ハ理由ナシ  
右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ主文ノ如ク判決スルモノナリ

●株式競賣代金引渡請求事件 明治三十五年(九)第三百二十一號 判決 (破産、廢棄)

判決要旨

租稅滯納處分ニ依リ競賣ニ附セラレタル物件カ質權ノ目的タルトキハ質權者カ之レニ對スル優先權ヲ主張シテ競賣代金ノ引渡ヲ官廳ニ求ムルノ訴ハ司法裁判所ノ管轄ニ屬スヘク行政裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノニアラス

說明

行政裁判ノ性質。行政裁判ノ性質ニ關シテハ二三ノ異說ナキニ非ト雖モ其ノ本質ハ行政監督ノ一種ナリトノ說明ハ吾人ノ層々唱道シタル所ニシテ又一般學說ノ是認スル所タリ蓋シ行政行為ニ對シ行ハルヘキ行政監督ノ方法ハ普通ノ場合ニ在テハ上級廳ノ命令ヲ以テ其ノ目的ヲ達スル所ナ

リト雖モ亦タ或ル場合ニ在テハ裁判ノ形式ヲ以テスルニアラスハ完然ナル監督ノ實ヲ舉クルコト能ハサル場合アルカ故ニ近時ノ法治國家ニ在テハ何レモ行政裁判ノ設備ヲナサハルハナシ則チ凡テノ行政處分ノ内ニ於テ直接ニ人民ノ利害ニ接觸シ不當ニ個人ノ權利ヲ侵害シタリトスル行政處分ニ對スル行政監督ノ方法ハ一方ニ於テハ人民ヲシテ被害ノ事實ヲ主張シテ權利ノ回復ヲ求ムル自由ヲ許シ同時ニ當局ノ官廳ニ對シテハ之レニ對スル相當ノ意見ヲ徵シ獨立ノ機關ニ依テ其ノ當否ヲ審査スルニアラスハ到底完然ナル目的ヲ達スルコト能ハサルニ由ル行政裁判ノ由テ生スル理由已ニ茲ニ存ストセハ是レニ依テ審理判決ヲ行ルヘキ事項ハ獨リ行政處分ノミニ限定セラレ其以外ノ事項ニ及ハサルヤ行政裁判ノ性質ニ照シテ自ラ明カナリ  
今此ノ觀念ヲ以テ本件ノ場合ヲ想像スルトキハ其ノ判決ノ因テ生スルノ原由自ラ明カナルヲ得ヘシ則チ官廳ノ滯納處分ニ對シ民法上ノ優先權ヲ主張シ競賣代價ノ引渡ヲ求ムルハ其ノ目的トスル處政テ行政處分ノ取消變更(即チ行政)ヲ求ムルニアラス專ラ質權ノ目的ヲ達セントスルニ外ナラサルヲ以テ此ノ請求モ尚ホ行政裁判ノ權限ニ屬スヘシトノ論旨ハ未タ行政裁判ノ本質ヲ知ラサルニ座セスハアル可ラス

行政裁判ノ性質



(參照) 法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得「一海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件」二租稅滯納處分ニ關スル事件」三營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件」四水利及土木ニ關スル事件」五土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件(明治二十三年法律第百八號)

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 株式會社尼ヶ崎銀行

右代表者 村 松 秀 致

被上告人 神戸稅務管理局

右代表者 司稅官山田周藏

訴訟代理人 頓 宮 雄 藏

右當事者間ノ株式競賣代金引渡請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年二月二十六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ  
立會檢事岩野新平ハ意見ヲ陳述シタリ

判 決

原判決ヲ破毀ス

第一審判決ヲ廢棄ス

被上告人ノ妨訴抗辯ハ之ヲ棄却ス

本案ニ付辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本事件ヲ 戸地方裁判所ニ差戻ス

理 由

上告論旨ハ上告人ハ被上告人カ訴外久納豐藏ニ對スル酒造稅滯納處分ニ依リ上告人ニ於テ質權ヲ有スル株式會社西宮銀行假株券五十株及ヒ株式會社伊丹銀行假株券十五枚ヲ競賣ニ附シ因リテ得タル代金七百五十五圓ハ上告人カ先取權アルコトヲ主張シ被上告人ニ對シ之レカ引渡ヲ請求スルモノニシテ上告人ハ被上告人カ國稅滯納處分法ノ規定ニヨリ右有價證券ヲ競賣ニ附シタル處分ハ反テ之ヲ適法ノ行爲ト認メタリ抑モ行政裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ハ行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタル場合ニシテ本件ノ如キ被上告人カ國稅滯納處分法ニ基キ處分シタル賣賣ヲ違法トスルニアラス唯其賣得金ニ對シ先取特權ノ何レニ存スルヤ其優劣ヲ爭フ事件ハ普通ノ民事事件ニシテ行政裁判所ノ管轄ニ屬スヘキニアラス況ンヤ上告人ハ租稅滯納處分ニ干シテハ第三者ノ地位ヲ有シ其當事者ニアラサルニ於テヤ然ルニ原院ニ於テ本件ヲ行政裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト判定シ控訴ヲ棄却セラレタルハ法則ノ適用ヲ誤リタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ  
依テ按スルニ上告人ノ請求ハ被上告人カ訴外久納豐藏ニ對シ租稅滯納處分ヲ爲スニ際シ質權ノ目的トシテ上告人ノ占有セシ久納豐藏ノ所有物件ヲ差押ヘ競賣シタルニ因リ其ノ賣得金ハ該物件ノ代價ニ付先取特權ヲ有セル上告人ニ交付アリ度ト云フニ在リテ上告人ハ民法上ノ權利ヲ主張スルモノナレハ本訴ハ其性質民事ノ爭訟ニ外ナラス蓋シ其行使ハ滯納處分ノ實效ヲ消滅又ハ減少セシムルコトアルヘキモ是レ唯其結果ニシテ爲メニ其民事ノ爭訟ヲ行政裁判所ノ性質

ル性質ニ影響ヲ及ボスモノニアラス而シテ民事ノ性質ヲ有スル争訟ハ之ヲ特別裁判所ノ權限ニ屬セシムル旨ノ特別規定アラサル以上ハ民事裁判所ニ於テ之ヲ受理裁判スヘキモノナ  
ルヲ以テ本訴ノ場合ニ付キ特別規定ノ存否ヲ探究スルニ明治二十三年法律第六號第二項  
第二號ニハ租稅滯納處分ニ關スル事件トノ汎博ナル規定アルニ依リ滯納處分ヲ受ケタル者  
ト其他ノ者トノ別ナク何人ト雖モ其處分ニ關係シテ生スル争訟ハ之ヲ行政裁判所ニ提起シ  
得ルモノ、如ク解シ得ラレサルニアラスト雖モ元來行政訴訟ハ行政處分ノ不當ヲ主張シ之  
ヲ取消若クハ變更セシメントスルノ訴ナレハ其處分ヲ受ケタル者ニ限り之ヲ許スヘキモノ  
ニシテ同法ノ精神モ亦之レニ外ナラサレハ同法ハ滯納處分ニ關シ行政廳ト其處分ヲ受ケタ  
ル者トノ間ニ生スル争訟ニ限り行政裁判所ノ權限ニ屬セシメタルモノト云ハサルヘカス然  
ラハ則チ本件ノ如ク被處分者ニアラサル上告人カ民法上ノ權利ヲ主張スル争ニ係ル民事裁  
判所ノ權限ハ同法ニ依リ毫モ變更ヲ受クヘキモノニアラサルカ故ニ本件ハ民事裁判所ニ於  
テ之ヲ受理裁判スヘキモノトス然ルニ原院ニ於テ本件ハ民事裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノ  
ニアラストシ上告人ニ敗訴ヲ言渡シタルハ不法ヲ免レス而シテ前記上告人ノ請求事實ハ原  
判決ノ確定シタル所ニシテ且妨訴抗辯ニ付テハ裁判ヲ爲スニ熟スルヲ以テ民事訴訟法第四  
百五十一條第一號及ヒ第四百二十二條ニ依リ本院ニ於テ直ニ裁判ヲ爲シ尙ホ本案ニ付キ辯  
論ヲ必要トスルヲ以テ本事件ハ之ヲ第一審ノ裁判所タリシ神戸地方裁判所ニ差戻スヘキモ  
ノトス

有體動產假差押ニ對スル異議事件

明治三十五年(才)第二百十三號  
明治三十五年七月七日判決 (棄却)

判決要旨

假差押ノ申請ニ付テハ本案請求ノ趣旨ヲ表示スルヲ以テ  
足り請求ノ原因ヲ開示スルヲ要セス

說明

本件ハ說明ヲ要セス

第一審 青森地方裁判所八戸支部 第二審 國館控附院  
上告人 小向菊次郎 訴訟代理人 石塚源吉  
被上告人 風穴留吉

右當事者間ノ有體動產假差押ニ對スル異議事件ニ付國館控訴院カ明治三十五年二月三日言  
渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由第一點ハ本訴ノ争點ハ第一審判決中事實ノ摘示ト同一ナルコト原判決ニ掲載セラ  
レタルカ如シ即チ本件有體動產假差押申請書ヲ閱スルニ債務者小向菊次郎ハ土地ヲ冒認販

假差押ノ申請ノ要件

賣シタル被告訴及私訴ノ提起前債務者ノ有體動産ニ對シ假差押命令ヲ發セラレタシト云フニ在リテ一日瞭然公訴ニ附帶シテ以テ私訴ヲ提起ス可キヲ要件トシ以テ假差押命令ヲ申請シタルコト明ナリ凡ソ假差押命令ハ假差押ヲ可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所又ハ本案ノ管轄裁判所ノ管轄タルヘキナリ(民事訴訟法第七百三十九條)而シテ本案ノ未タ繫屬セサルトキハ假差押裁判所ハ債務者ノ申立ニ依リ口頭辯論ヲ經スシテ相當ニ定ムル期間内ニ訴ヲ起ス可キコトヲ債權者ニ命ス可シ(同法第七百四十六條)トノ規定ニ照セハ原則トシテ管轄裁判所ハ第一審管轄裁判所タルヘキコト灼然タリ(第七百六十二條參考)今右被上告人ノ申請ニ依レハ之レヲ青森地方裁判所八戸支部へ提出シタルヲ以テ物ノ所在地管轄裁判所ヲ其管轄トシタルニアラサルハ勿論此點ニ就テハ第一審以來何等ノ申立ヲ爲シタルモノニアラス又告訴及ヒ私訴狀提起前債務者ノ有體動産ニ對シ假差押命令ヲ發セラレタシト云フニ在ルヲ以テ未タ告訴セサルコト明カニシテ若シ果シテ告訴ヲ爲スモ其告訴ハ受理セラルヘキヤ否ヤ(一)告訴ハ受理セラレタリトスルモ亦果シテ公訴ハ提起セラルヘキヤ否ヤ(二)公訴ハ提起セラレタリトスルモ何レノ裁判所ノ管轄ニ屬スヘキヤ否ヤ(三)實ニ未知不明ノ事ニ屬ス而シテ私訴原因トシテ假差押ノ申請ヲ爲サントセハ私訴タル其性質トシテ既ニ定マリタル公訴管轄裁判所へ其申請ヲ爲サルヘカラサルコト前記法條ノ如シ故ニ此管轄不明ナル原裁判所(第一審トナルヘキヤ否ヤ不明ナル本件ノ第一審裁判所)へ未知不定ノ私訴ヲ原因トシテ被上告人カ申請シタル假差押命令ハ不法ナルヲ以テ之レヲ取消シ其申請ヲ却下ス

ヘナモノタルコト上告人カ異議申立ノ要件ト爲セリ然ルニ第二審タル原院ノ判決理由ニ曰ク(前略)本案カ未タ裁判所ニ繫屬セザルト雖モ假差押ヲ爲シ得ヘキ事ハ民事訴訟法第七百四十六條ノ法意ニ依ルモ明カナレハ控訴人カ損害金請求ノ私訴狀ヲ提起セサル以前ニ在テ其訴ヲ管轄ス可キ原裁判所ニ本件ノ假差押申請ヲ爲シタルハ相當ニシテ云々ト漫然以テ原裁判所(本件ノ第一審裁判所)ヲ私訴ヲ管轄スヘキ裁判所ト爲シ告訴及公訴ハ提起セラレタルヤ否ヤ控訴裁判所ハ何レノ管轄ナルヤ否ヤ何故ニ原裁判所ハ私訴ヲ管轄ス可キ裁判所タルヘキヤ否ヤ之レヲ説明セス而モ被上告人(第一審ノ被申立人第二審ノ控訴人)ハ第一審以來告訴ハ之レヲ爲サルコト(一)公訴ハ勿論提起ナキコト(二)ヲ申立タルコト本件口頭辯論調書ニ依リテ明確ナリ斯ノ如クナルニ第二審判決ハ不法ニ管轄ヲ豫定シ當事者ノ論爭主點ヲ判決セザルハ法律ニ違背シタル裁判ナリトス(第三點ハ私訴ナルモノハ其性質トシテ公訴ニ附帶セザルヘカラス從ツテ公訴ノ提起前私訴ノ提起セラルヘキ場合ヲ生セス此理由ヨリ之レヲ推ストキハ私訴原因トシテ其請求ニ關シ假差押ノ申請ヲ爲サンニハ少クトモ公訴ノ提起セラレタルコトヲ説明セサルヘカラス今原判決ヲ見ルニ「因テ審按スルニ控訴人カ其請求又ハ假差押ノ理由ヲ完全ニ説明セサルコトハ被控訴人(上告人)所論ノ如シト」アリテ其疎明ヲ欠缺セザルコト明カナリ而シテ民事訴訟法七百四十六條ノ本案カ未タ裁判所ニ繫屬セザルトキト雖モ假差押ノ申請ヲ爲シ得ヘシトノ法意ハ小クトモ其本案カ其裁判所ニ繫屬スヘキ性質タルヲ要スルモノニシテ明カニ無訴權又ハ管轄違ノ訴求ニ就テモ之レヲ許

容スヘキモノニアラス即チ私訴ニ就テハ本案ノ未タ繫屬セサル場合トハ公訴提起セラレタル後ニ於テ未タ私訴ノ提起ナキ場合ヲ想像セサルヘカラス而カモ此想像ハ公訴ノ管轄タル刑事裁判所ニ於テ之レヲ爲スヲ得ヘク通常民事裁判所ニ於テハ之レヲ見ルヲ得サルモノナリ然ルニ原院判決ハ私訴狀ヲ提起セサル以前ニ在テ其訴ヲ管轄ス可キ原裁判所ニ本件ノ假差押申請ヲ爲シタルハ相當ニシテ云々ト判定シ何カ故ニ私訴トシテノ本案カ其通常民事裁判所タル本件第一審裁判所ノ管轄タルヘキヤ否ヤ其理由ヲ明示セサル違法ノ裁判ナリト思料スト云フニ在リ

然レトモ假差押ノ裁判ハ民事訴訟法第七百二十九條ニ依リ本案ノ管轄裁判所ノ管轄ニ屬シ而シテ訴訟記録ヲ閱スルニ本件ハ其假差押ノ裁判ヲ爲シタル青森地方裁判所八戸支部ニ於テ民事上本案ヲ管轄スヘキ事件ナリ又假差押ノ申請ニ付テハ本案請求ノ趣旨ヲ表示スルヲ以テ足り請求ノ原因ハ之ヲ開示スルヲ要セス即請求ノ原因ヲ示スハ假差押申請ノ要件ニアラス故ニ本案ノ管轄裁判所ハ請求ノ原因如何ニ論ナク假差押申請ノ手續ニ缺クル所ナキ申請ハ之ヲ受理審判セサルヘカラス又假差押ハ本案ノ未タ繫屬セサル以前ト雖モ之ヲ爲シ得ヘク民事訴訟法第七百四十六條ノ規定ニ依リ債權者カ相當ノ期間ニ訴ヲ提起セサルトキ債務者ノ申立ニ基キ假差押ノ取消ヲ爲スコトアルノミ然レハ本件假差押ノ基本タルヘキ本案ノ請求原因ニ付テハ其關係如何ヲ論スルノ要ナク本件民事上ノ請求權ヲ目的トスル訴訟ヲ當然管轄スヘキ青森地方裁判所八戸支部カ被告上告人ノ申請ヲ理由アリト認メ其假差押ヲ命

シタルハ不法ニアラス從テ原裁判所カ上告人ノ異議申立ヲ却下シタルハ結局相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ主文ノ如ク判決スルモノナリ

定期賣立株式代金并保證金請求事件

明治三十五年(大)第百三十三號  
明治三十五年七月五日 判決

(棄却)

判決要旨

一、注文者ト取引所仲買人トノ關係ハ一種特別ノ委任關係ニシテ普通委任ノ法則ノミニ依リ之ヲ斷スルコトヲ得ス  
一、仲買人カ注文者ノ委任ニ依テ爲ス仲買行爲ハ自己ノ名ヲ以テ之レヲ爲シ且ツ自己ニ對シ直接ニ權利ヲ得義務ヲ負フモノトス從テ其ノ取引ノ相手方ト注文者トハ何等ノ關係ヲ有スルモノニアラス

二、仲買人カ注文者ノ意ニ反シテ擅ニ解合ヲナシタルトキハ仲買人ハ注文者ニ對シ自ラ履行ノ責メニ任スルモノトス

注文者ト仲買人トノ關係○仲買人ノ義務

說明

本件ハ說明ヲ要セス

第一審 横濱地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人 矢野甚藏

訴訟代理人 小出御太郎

被上告人 深澤正三郎

訴訟代理人 岸岡時正 一也

右當事者間ノ定期賣立株式代金並保證金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十五年一月二十八日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理由

上告理由ノ第四點ハ假リニ被上告人ノ明諾ナキカ爲メ解合ヲ爲シタルハ違法ナリトスルモ已ニ本件ノ如ク總解合ヲ爲シ取引所ニ對シ何等ノ關係ナキニ立至リタル場合ニ於テハ委任者タル被上告人ハ違約賠償ヲ請求スルハ格別本訴ノ如ク受任者タル上告人ニ對シ直接履行ヲ求ムル權利ハ委任關係ノ原則上存立セサル所以ヲ抗辯シタルニ(原院判文事實ノ摘記中

二三

院訴代理人陳述ノ(四)原判決ハ又仲買人ハ自己ノ計算ニテ賣買ヲ爲シ得ルモノナレハ取引所ノ帳簿上注文主ニ報告シタル通リノ取引ヲ受渡期日迄其儘存立シ置ク可キ義務アル者ナラサルヲ以テ云々被控訴人ハ控訴人ノ請求ニ應ジ賣付約定ノ履行ヲ爲ス責アルモノナリトノ理由ヲ附シ結局此抗辯ヲ排斥サレタリト雖モ原判決ノ此說明理由タル委任契約ノ原則ニ反スルノミナラス又仲買人ノ權義ニ關シ誤解ヲ爲シタル不法アリ仰モ仲買人ハ依頼者ノ爲メニ匿名代理ヲ爲スモノニシテ仲買人カ委任ヲ受テ賣立若クハ買付ヲ爲スニハ必スヤ其委任ノ本旨ニ從テ之ヲ實行セサルヘカラス而シテ仲買人ナルモノハ委任者ノ委任事項ヲ直チニ取引所ニ對シテ實行セサル可ラサルモノニシテ一面委任者トノ間ニ取引ヲ爲シ他ノ一面取引所ニ於テ他ノ取引ヲ爲スト云フカ如キ二箇別途ノ行爲ヲ行フヘキ性質ノモノニ非ス故ニ仲買人ニ於テ他人ノ委任ニ依リテ買付ク又ハ賣立ヲ爲シタルトキハ其委任ノ本旨ニ從ヒ取引終了ニ至ル迄之ヲ取引所ニ保持スルノ責任アルコト勿論ナリ苟モ然ラサルトキハ仲買人ハ委任者トノ間ニ隨意ニ取引ヲ爲シ之ヲ取引所ニ提出スルノ責任ナシト云フニ歸着セサルヘカラス反對論者タル控訴人(被上告人)ハ仲買人カ其注文ノ賣買ヲ取引所ニ保持スルノ責任アリトスルトキハ轉賣買戻ニヨリ取引ヲ相殺スルノ方法ハ全ク其實效ヲ失フニ至ルト論スルモ之レ殆ント解スル能ハサル奇論ニシテ取引所ニ於ケル轉賣買戻ハ賣買期限内ニ賣買者カ其都合上賣買ヲ終了シ損益計算ヲ爲ス場合ニ行フモノニシテ取引所ニ於テハ賣買取組高ノ相一致スル以上ハ受渡期限ニ至リ受渡及決算ニ支障ヲ生セサルヲ以テ之ヲ行ヒ得

注文者ト仲買人トノ關係○仲買人ノ義務

四百四十七

ヘキモノニシテ仲買人カ其注文ノ賣買ヲ取引所ニ保持スルノ責任ノ有無ト關係アルモノニ非ス要スルニ本點原判決ノ說明理由ハ御院三十四年(ヲ)第一號明治三十四年五月四日第一民事部判決ニ於テ「東京米穀取引所ニハ仲買人カ注文者ノ委任ニ因リテ賣立若クハ買立ヲ爲シタル後買戻若クハ轉賣ヲ爲シタル場合ニ於テ若シ注文者カ之ヲ承諾セサルトキハ更ニ賣立若クハ買立ヲ爲シ注文者ヲシテ初メヨリ買戻若クハ轉賣セザリシ地位ニ在ラシムルノ商慣習アルコト」ヲ是認シタル右特殊ノ場合ヨリ轉倒シテ之ヲ一般ニ推論シタル推理ノ誤謬ニ出テタルモノニシテ委任ノ原則並ニ取引所法ノ精神ニ違背シタル不法アリトス而シテ又本點ニ述ヘタル抗辯ニ牽連シテ第三點ニ述ヘタル本件解合ノ性質ニ關スル所爭付隨シタルモノニシテ之レニ關スル原判決中ノ說明ノ不法タルハ前點已ニ述ヘタルカ如キ次第ニシテ假リニ解合ハ上告人ノ權限外ノ行爲ナリトスルモ已ニ受託ノ定期賣立ハ解合ニ依リ茲ニ其受任事項ハ取引所ニ對シ終了シ何等ノ關係ヲ上告人ト取引所トノ間ニ殘留セサルニ至リタルモノナレハ損害賠償權利ノ有無ハ別問題トシテ本件直接履行請求ハ不當タルニ之レヲ認許シタル原裁判ハ委任關係ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタルモノナリト云フニ在レトモ

○注文者ト其注文ヲ受クタル取引所仲買人トノ關係ハ一種特別ノ委任關係ナルヲ以テ普通委任ノ法則ノミニ依リテ之ヲ定ムルコトヲ得ス何トナレハ仲買人ハ他人ノ注文ニ因リ取引ヲ爲ス場合ト雖モ自己ノ名ヲ以テ之ヲ爲シ其相手方ニ對シテハ直接ニ自ラ權利ヲ得義務ヲ負フニ注文者ハ該取引ノ相手方ト何等ノ權利義務ノ關係ヲ有セサルヲ以テ普通ノ委任關係

ト同一ニ論スルコトヲ得サルモノアレハナリ而シテ本件ノ如ク仲買人カ注文者ノ意思ニ反シテ勝手ニ解合ヲ爲シタルトキハ仲買人ハ注文者ニ對シテ自ラ履行ノ責任ヲ賣建タル株券ヲ受取り賣建代金ヨリ支拂フヘキ義務ヲ負フヘキコトハ從來本院ノ判例(同上判決)トスル所ニシテ原判決ハ全ク此判決ノ旨趣ニ適合スルヲ以テ固ヨリ違法ノ裁判ニアラストス以上辯明スルカ如ク本件上告ハ一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條及ヒ同法第七十七條ニ從ヒ棄却スヘキモノトス

●破産宣告ノ決定棄却ノ裁判ニ對スル抗告事件 明治三十五年(ヲ)第二百四十九號 (廢棄) 廢棄破産申立 明治三十五年九月二十五日決定

決定要旨

民法第七十九條第八十條ノ規定ハ株式會社。株式合資會社ノ精算ノ場合ニノミ之レヲ準用スヘク合名會社。合資會社ノ精算ニ之レヲ準用スヘキモノニアラス

說明

本決定ノ要旨ハ會社ノ精算ニ關シ民法ノ規定ヲ準用スルニ當リ其ノ第八十一條ノ規定ハ合名。合資及ヒ株式並ニ株式合資ノ各會社ニ之レヲ準用シタルニ不拘同法第七十九條第八十條ノ規定ハ獨リ株式並ニ株式合資會社

ノ精算ノミニ準用セラレタル法文ノ結果ニ基クモノニシテ別ニ深淵ナル  
法理上ノ判断ニ由ルニアラス其ノ詳細ハ判文ヲ一讀スルニ於テ明瞭ナル  
ヲ以テ之レヲ略ス

(參照) 清算人ハ其就職ノ日ヨリ二个月内ニ少クトモ三回ノ公告ヲ以テ債權者ニ對シ一定ノ期間内ニ其請求ノ申出ヲ爲  
スヘキ旨ヲ催告スルコトヲ要ス但其期間ハ二个月ヲ下ルコトヲ得ス前項ノ公告ニハ債權者カ期間内ニ申出ヲ爲サ  
ルトキハ其債權ハ清算ヨリ除外セラレヘキ旨ヲ附記スルコトヲ要ス但清算人ハ知レタル債權者ヲ除外スルコトヲ得ズ  
清算人ハ知レタル債權者ニハ各別ニ其中申出ヲ催告スルコトヲ要ス(民法第七  
十九條)  
(參照) 前條ノ期間後ニ申出テタル債權者ハ法人ノ債務完済ノ後未タ歸屬權利者ニ引渡サ、ル財産ニ對シテノミ請求ヲ  
爲スコトヲ得(民法第八十條)

原 審 大阪控訴院

抗 告 人 榮 谷 喜 代 太

訴訟代理人 種 野 弘 道

右抗告人ハ明治三十五年七月三十一日大阪控訴院カ奈良地方裁判所ノ爲シタル破産宣告ノ  
決定ヲ廢棄シ破産申立ヲ棄却シタル裁判ニ對シ抗告ヲ爲シタリ

決 定

原決定ハ之ヲ廢棄ス

本件ノ裁判ヲ大阪控訴院ニ委任ス

理 由

本件抗告ノ理由ハ原院決定ノ理由ハ相手方會社ハ清算中ニ支拂ヲ拒絶シタルハ商法第二百

六十二條第十號ニ基キ即チ民法第七十九條ノ期間内ナリトシテ支拂ヲ拒絶シタルモノナレ  
ハ支拂停止ノ行爲ナリトスルヲ得スト謂フニアリ然レトモ此ノ如キ裁判ハ擬律ノ錯誤ナリ  
ト信ス何トナレハ商法ヲ按スルニ商法第二百六十二條第十號ノ適用ヲ受クヘキハ獨リ株式  
會社ニアリテ合資會社又ハ合名會社ニハ適用スヘキモノニアラサルコトハ商法第二百三十  
四條ニ於テ民法第七十九條ハ株式會社ノ清算ノ場合ニ之ヲ準用ストノ特別條項アリテ合資  
會社又ハ合名會社ニハカ、ル民法第七十九條ヲ準用スヘキ條項ヲ定メ去レハ株式會社ナ  
ルトキハ民法第七十九條ノ規定ヲ清算ノ場合ニ準用スヘキ結果トシテ商法第二百六十二條第  
十號ヲ適用スヘキハ當然ナルヘシト雖モ合資會社合名會社ニハ民法第七十九條ヲ清算ノ場  
合ニ準用スヘシトノ規定モナケレハ從テ商法第二百六十二條第十號ノ規定ヲ適用スヘキモ  
ノニアラスト解釋セサルヘカラス論者或ハ民法七十九條ノ規定ハ商法ノ會社ニ總テ準用ス  
ルモノナラントセンカ然ラハ商法中特ニ二百三十四條ノ如ク民法七十九條ハ株式會社ノ清  
算ノ場合ニ準用ストノ規定スルノ必要ナキニ至ル既ニ商法二百三十四條ノ如ク特ニ之ヲ規  
定スル所ニ依レハ立法ノ精神ハ民法七十九條ノ規定ヲ準用スヘキハ商事會社中獨リ株式組  
織ノ會社ニ限ルコトヲ示シタルヲ知ル可シ、开ハ株式組織ト合名又ハ合資組織ノ會社トハ會  
社ノ性質上大ニ異ナル所アルヲ以テナラン以上ノ如ク要スルト原院ニ於テ株式會社ノ清算  
人ニ適用スヘキモノナルニ商法第二百六十二條第十號ノ規定ヲ本案事件相手方ノ如キ合資  
會社ノ清算人ニモ適用スヘキモノトシテ裁判ヲ下シタルハ失當ヲ免レサルモノト思考候ニ

付民事訴訟法第四百五十六條第二項ニ依リ抗告スト云フニ在リ  
 因リテ按スルニ民法第七十九條ノ規定ハ株式會社及株式合資會社ノ清算ノ場合ニ之ヲ準用  
 スヘキモノナルモ合名會社及合資會社ノ清算ノ場合ニハ之ヲ準用スヘキモノニ非ストス何  
 トナレハ商法ニ於テ民法第八十一條ノ規定ハ各種ノ會社ノ清算ノ場合ニ又同法第七十九條  
 及第八十條ノ規定ハ株式會社及株式合資會社ノ清算ノ場合ニ準用スヘキコトノ規定アルモ  
 之ヲ合名會社及合資會社ノ清算ノ場合ニ準用スヘキ規定ナキヲ以テ同條ノ規定ハ合名會社  
 及合資會社ニハ之ヲ準用セサルノ法意ナリト解釋スルヲ相當ト爲セハナリ商法第二百六十  
 二條第十號ハ清算人カ民法第七十九條ノ期間内ニ或債權者ニ辨濟ヲ爲シタル場合ニ於ケル  
 制裁ヲ規定シタルモ是レ固ヨリ民法第七十九條ヲ準用スヘキ株式會社及株式合資會社ノ清  
 算ノ場合ニノミ適用スヘキ規定ナルカ故ニ之ヲ以テ同條ヲ合名會社若シハ合資會社ノ清算  
 ノ場合ニ準用スヘキ論據ト爲スニ足ラストス夫レ既ニ民法第七十九條ノ規定ニシテ合資會  
 社ノ清算ノ場合ニ準用スルコトヲ得サル以上ハ合資會社ノ清算人ハ債權申立催告ノ期間中  
 ナリトノ理由ヲ以テ債權者ノ請求ヲ拒絕スルコトヲ得ルモノニ非ス然ルニ原院ハ民法第七  
 十九條ハ合資會社ノ清算ノ場合ニモ準用スヘキモノト誤解シタル結果合資會社ノ清算人ハ  
 債權申立催告ノ期間中ハ債權者ノ請求ヲ拒絕セサルヲ得サルモノト爲シ以テ合資會社ニ對  
 スル破産申立ヲ棄却シタルハ失當ナリトス因リテ本件抗告ハ適法ニシテ且其理由アルヲ以  
 テ民事訴訟法第四百六十四條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク決定ス

●貸金請求事件

明治三十五年(オ)第二百五十三號 (棄却)  
 明治三十五年六月十二日 判決

判決要旨

一、法律ノ規定ニ依リ當然訴訟ヲ爲スノ代理權限ヲ有スル者  
 本人ニ代リ訴訟行爲ヲ爲サンニハ民事訴訟法第六十三條  
 ノ規定ヲ適用スルノ限ニアラス  
 二、復代理人ヲ任スルニ當リ民法第四百四條ノ制限ヲ受クルハ  
 委任ニ因ル代理人ノミニ限ルモノニシテ法定代理人ハ此  
 ノ制限ヲ受クルモノニアラス

說明

本件ハ說明ヲ要セス

(參照) 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲サ、ルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス辯護士ノ在ラサル場合ニ於テ  
 ハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟  
 代理人ト爲スコトヲ得區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト  
 爲スコトヲ得(民事訴訟法  
 第六十三條)

(參照) 委任ニ因ル代理人ハ本人ノ許諾ヲ得タルトキ又ハ已ムコトヲ得サル由アルトキニ非サレハ復代理人ヲ選任ス  
 法定代理人ノ訴訟行爲及ヒ其ノ訴訟委任



ルコトヲ得ス(民法第百四條)

第一審 神戸地方裁判所豊岡支部

第二審 大阪控訴院

上告人 藤本俊郎

訴訟代理人 山中兵吉

被上告人 株式会社府中銀行支配人 赤木敏太郎

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年二月二十七日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告論旨ハ本件第一審訴狀ニ於ケル當事者ノ表示ニ依レハ「兵庫縣城崎郡國府村ノ内府中新村七番屋敷株式會社府中銀行支配人原告人赤木敏太郎」ト記載シアリテ株式會社府中銀行支配人ヲ職業トセル一箇人赤木敏太郎カ原告人タルヲ知ルヘク而シテ其請求ノ原因タル權利關係ヲ證明スルノ材料トシテ呈出セシ甲第一號證ハ上告人及ヒ大江仁兵衛富田佐兵衛カ訴外人タル株式會社府中銀行ニ宛テ差入レタル金員借用證書ニ係ルヲ以テ上告人ハ第一赤木敏太郎ハ自己ニ屬セサル府中銀行ノ債權ヲ行使セルモノニシテ其請求ハ不當ナルコト第二假リニ同人カ原告ニナリタルニアラスシテ府中銀行ノ代理人タル資格ニ於テ本訴ヲ提起シタルモノトセハ訴狀ニハ代理人タル赤木敏太郎ノ表示アルノミニシテ當事者タル府中

銀行ノ表示ヲ欠缺セル不適法ノ訴狀ナリ故ニ其後ノ訴訟手續モ亦無効ナルコト第三假リニ同人ハ右銀行ノ代人トナリ訴訟ヲ提起シ且ツ第一審訴狀ニハ原告タル府中銀行ノ表示アルモノト看做スモ同人ハ府中銀行ノ支配人ニシテ本訴事物ノ管轄ハ地方裁判所ニ屬セリ而シテ所謂支配人ナルモノハ一ノ商業使用人ニ過キサルカ故主人ニ代テ訴訟行為ヲ爲スニハ民事訴訟法第六十三條ノ制限ニ從ヒ訴訟行為ヲ爲スヲ得サルモノナルニ同人カ支配人ノ資格ヲ以テ其行為ヲ爲シタルハ不法ナリトノ防禦方法ヲ提出シタルニ原院ハ商法第三十條ノ規定ヲ根據トシ支配人ハ主人ノ營業ニ關シテハ一切ノ裁判上ノ行為ヲ爲ス法定權限ヲ有セルモノナルカ故民事訴訟法第六十三條ノ制限ヲ受ケス因テ地方裁判所以上ニ於テ訴訟行為ヲ爲スヲ得ヘキモノナリト説明シ又第一審訴狀及ヒ判決書ニ株式會社府中銀行支配人赤木敏太郎ト表示シアル其肩書ハ單ニ敏太郎ノ職業ヲ記載セシニ止マラスシテ支配人ノ權限上銀行ノ債權ヲ主張スルモノナルコトヲ明認スルトノ理由ニ依リ孰レノ防禦方法ヲモ排斥セラレタリ然レトモ商法第三十條ハ支配人カ主人ノ營業ニ關シテ爲シタル法律上ノ效力ヲ定メタルモノニ外ナラスシテ固ヨリ民事訴訟法第六十三條ノ例外ヲ規定シタルモノニアラス故ニ支配人カ訴訟行為ヲ爲スノ權限ヲ有スルヤ否ヤハ當然民事訴訟法ニ依テ決セサルヘカラス而シテ同法ニ依レハ其第六十三條ノ規定ニ從ハサルヘカラスナルコト亦論ヲ待タサル所ナルカ故被上告人タル赤木敏太郎カ本件ニ付訴訟行為ヲ爲スノ權限ヲキコト亦甚々明白ト云ハサルヲ得ス又民法第四百條ノ規定ニ依レハ代理人ハ本人ノ許諾ヲ得タルトキ又ハ已ムコ

法定代理人ノ訴訟行為及ヒ其ノ訴訟委

トテ得サル事由アリタルトキノ外復代理人ヲ選任スルノ權限ヲ有セス然ルニ被上告人ハ原  
院ニ於テ辯護士竹内國敏ヲ以テ其復代理人トナシ毫モ本人ノ許諾アリタルコト又己ムヲ得  
サル事理アリタルコトヲ證明セス然ラハ即チ其復代理人タル竹内國敏ノ爲シタル訴訟行爲  
モ亦無効ト云ハサルヲ得ス又原院ノ認定セラル、如ク訴狀及ヒ判決書ノ肩書ヲ以テ同時ニ  
職業及當事者ノ表示アリタルモノト見ルコトヲ得ヘキモノトセハ法律カ特ニ當事者及ヒ代  
理人職業等ノ表示ヲ必要トセシ所以ノ精神ハ全ク没却スルノミナラス何々會社社員某ト記  
載シタルカ如キ訴狀モ亦其何々會社ヲ以テ當事者ト見做サ、ルヲ得サルカ如キ奇怪ナル結  
果ヲ生スヘシ之ヲ要スルニ原判決ハ孰レノ點ヨリ觀察スルモ不法ノ判決タルヲ免カレサル  
モノト確信スト云フニ在リ

依テ按スルニ支配人ハ主人ニ代リ其營業ニ關スル一切ノ裁判所又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲スノ  
權限ヲ有スルコトハ商法第三十條ノ明規スル所ナリ而シテ民事訴訟法第六十三條ハ法令ニ  
依リ其權限ノ範圍ヲ規定シアラサル雇人ヲ訴訟代理人ト爲ス場合ヲ規定シタルモノニシテ  
本件場合ノ如ク商法ノ規定ニ因リ特ニ代理權ノ範圍ヲ定メ訴訟行爲ヲ爲スノ權限ヲ與ヘタ  
ル場合ヲ併セテ規定シタルモノニアラサレハ被上告銀行ノ支配人タル赤木敏太郎カ銀行  
ニ代リ訴訟ヲ爲ス場合ニハ民事訴訟法第六十三條ヲ適用スヘキモノニアラス依テ本論旨中  
ノ第一段ハ適法ノ上告理由タラス又支配人ハ前段説明ノ如キ權限ヲ有スルモノニシテ苟モ  
主人ノ營業ニ屬スル行爲ナル以上ハ其行爲カ委任ノ性質ヲ帶フルトキト雖モ更ニ主人ノ許  
諾ヲ得ルコトナク又止ムヲ得サル事由存セサルモ支配人ハ當然其行爲ヲ爲シ得ルモノト云  
ハサルヘカラス而シテ訴訟委任ノ行爲ハ一ノ裁判上ノ行爲ニ外ナラサレハ支配人ハ前示法  
條ノ規定ニ因リ當然之ヲ爲スノ權限ヲ有スルモノニシテ該場合ニハ民法第四百四條ヲ適用ス  
ヘキモノニアラサレハ赤木敏太郎カ本件訴訟ニ關シ辯護士竹内國敏ニ訴訟委任ヲ爲シタル  
ハ正當ナリ從テ其委任ヲ受ケタル竹内國敏カ本件ニ付キ爲シタル訴訟行爲モ亦有效ナレハ  
本論旨ノ第二段モ亦適法ノ上告理由タラス又本論旨ノ第三段ハ全ク原院ノ職權ニ屬スル事  
實ノ認定ヲ論難スルニ過ギサルモノナレハ是又適法ノ上告理由タラス  
以上ノ理由ナルヲ以テ本件上告ハ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ則リ棄却スヘキモノ  
トス

約束手形金請求事件

明治三十五年(オ)第四百六十九號  
明治三十五年九月二十五日判決 (棄却)

判決要旨

約束手形(爲替手形)ノ裏書讓渡ニ關シテハ商法第五百二十  
九條第四百五十五條乃至第四百五十七條及ヒ第四百六十  
四條ノ特別規定アルヲ以テ民法第四百六十九條ハ之ニ適  
用スヘキモノニアラス

手形ノ裏書ト民法第四百六十九條トノ關係

說明

本件ハ說明ヲ要セス

(參照) 爲替手形ハ其記名式ナルトキト雖モ裏書ニ依リテ之ヲ讓渡スコトヲ得但振出人カ裏書ヲ禁スル旨ヲ記載シタルトキハ此限ニ在ラス(商法第四百五十五條)

振出人引受人又ハ裏書人カ裏書ニ依リテ爲替手形ヲ讓受ケタルトキハ更ニ裏書ニ依リテ之ヲ讓渡スコトヲ得(商法第四百五十六條)

裏書ハ爲替手形、其原本又ハ補箋ニ被裏書人ノ氏名又ハ商號及ヒ裏書ノ年月日ヲ記載シ裏書人署名スルニ依リテ之ヲ爲ス「裏書ハ裏書人ノ署名ノミヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ爾後爲替手形ハ引渡ノミニ依リテ之ヲ讓渡スコトヲ得(商法第四百五十七條)

裏書アル爲替手形ノ所持人ハ其裏書カ連綴スルニ非サレハ其權利ヲ行フコトヲ得ズ但署名ノミヲ以テ爲シタル裏書アルトキハ次ノ裏書人ハ其裏書ニ因リテ爲替手形ヲ取得シタルモノト看做ス(商法第四百六十四條)

第四百四十六條、第四百四十九條乃至第四百五十一條、第四百五十三條乃至第四百五十七條、第四百五十九條乃至第四百六十四條、第四百七十一條、第四百八十八條乃至第四百九十九條、第五百八條乃至第五百十七條及ヒ第五百二十二條ノ規定ハ約束手形ニ之ヲ準用ス(商法第五百二十九條)

指圖依權ノ讓渡ハ其證書ニ讓渡ノ裏書ヲ爲シテ之ヲ讓受人ニ交付スルニ非サレハ之ヲ以テ債務者其他ノ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス(民法第四百六十九條)

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院  
上告人 株式会社伊豫三島銀行

右法定代理人 山中好夫

被上告人 田村松太郎

訴訟代理人 小島忠里

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年七月九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由ノ第二點ハ其末尾ニ於テ「何トナレハ右裏書カ記名裏書ヲ爲ス當事者ノ意思ナリシコトハ裏書ノ記載自體ニ據リ明カナレハ商法第四百五十七條ニ依リ被裏書人ノ商號ヲ記載スルヲ要スルモノナルニ右手形ニ付テハ商號ノ記載ナキニ因リ商法ノ裏書ナリト見ルコトヲ得サレハ債務者タル振出人ニ對シ其裏書讓渡ヲ對抗スルコトヲ得サルハ民法第四百六十九條ニ依リ明カナレハナリ」ト判決シタルハ(第一)「右裏書カ記名裏書ヲ爲ス當事者ノ意思ナリシ」トノ事實ハ當事者カ主張シタル「ナキ事實ナリ即チ爭點ニ非ラサルナリ故ニ當事者ノ主張セサル事實即チ判決ノ基本ト爲スカラサル事實ヲ判決ノ基本ト爲シタル不法ノ判決ナリ(第二)假リニ其事實ハ當事者ノ主張シタル事實ナリト定ムルモ手形ノ文言以外ノ當事者ノ意思ヲ推察シ之ヲ判決ノ資料ニ供シタルモノナルカ故ニ商法第四百三十五條(手形ニ署名シタル者ハ其手形ノ文言ニ從ヒテ責任ヲ負)及同法第四百三十九條(本編ニ

手形ノ裏書ト民法第四百六十九條トノ關係

規定ナキ事項ハ之ヲ手形ニ記載スルモ手形上ノ效力ヲ生セスニ違背シタル不法ノ判決ナリ(第三)其「裏書カ記名裏書ヲ爲ス當事者ノ意思ナリシコトハ裏書ノ記載自體ニ據リ明カナレハ」ト云フハ「裏書ノ記載自體」ヲ證據トシテ當事者ノ意思ヲ認定シタルモノナリ然ルニ「其裏書自體」ハ原判決ノ認定スル事實ニ據レハ被裏書人ノ記載ナキモノニシテ商法第四百三十九條ニ規定シタル手形上ノ效力生セサルモノナリ故ニ其無効ノ記載即チ無効ノ證據ヲ以テ當事者ノ意思ヲ認定シタル不法ノ判決ナリ(第四)民法第四百六十九條ヲ適用シタルハ民事訴訟法第四百三十五條ニ所謂法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ判決ナリ何ントナレハ手形ニ適用スヘキ法律ハ商法第四百六十四條ニ規定シタル特別法ナレハナリト云フニ在リ(第五)其「右手形ニ付テハ商號ノ記載ナキニ因リ商法ノ裏書ナリト見ルコトヲ得サレハ債務者タル振出人ニ對シ其裏書讓渡ヲ對抗スルコトヲ得サルハ民法第四百六十九條ニ依リ明カナレハナリ」ト云フハ被裏書人ノ記載ナキ裏書讓渡ハ無効ナリト云フモノナルカ故ニ商法第四百五十七條第二項(裏書ハ裏書人ノ署名ノミヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ爾後爲替手形ハ引渡ノミニ依リテ之ヲ讓渡スコトヲ得)同法第四百六十四條但書(但署名ノミヲ以テ爲シタル裏書アルトキハ次ノ裏書人ハ其裏書ニ因リテ爲替手形ヲ取得シタルモノト看做ス)及ヒ同法第五百二十九條ヲ適用セサル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ(第一)原審ハ本件約束手形ノ裏書カ果シテ連續ヲ欠クヤ否ヤノ爭點ヲ判斷スルニ當リ其裏書ノ記載自體ニ依リ其裏書ノ果シテ記名式ノ者ナルカ將タ白地式ノモノナルヤヲ當然判斷

スルコトヲ得ルノミナラス原判決ノ引用シタル第一審判決ノ事實摘示ニ依レハ被上告人ハ原審ニ於テ本件約束手形ノ裏書カ記名式ノモノナルコトヲ暗黙ニ主張シタルコト明白ナレハ第一段ノ論旨ハ其理由ナシ(第二)原判決ハ本件約束手形裏書ノ記載自體ニ據リテ其裏書ノ記名式ナルヤ將タ白地式ナルヤノ爭點ヲ判定シタルモノニシテ手形文言以外ニ於テ判定ノ資料ヲ採リタルモノニ非サルコトハ上告人ノ指摘スル原判文上明白ナレハ第二段ノ論旨ハ其根據ナシ(第三)原判決ハ上告會社ノ商號カ被裏書人トシテ記載セラレサル事實ヲ確定シタルニ止マリ被裏書人トシテ記載セラレタル伊豫三島銀行ノ記載カ全ク無効ニシテ記載セサルト同一ナルコトヲ認定シタルニ非サレハ第三段ノ論旨ハ原判旨ニ相副ハサレハ固ヨリ其理由ナシ(第四)然レトモ約束手形ノ裏書讓渡ニ關シテハ商法第五百二十九條、第四百五十五條乃至第四百五十七條及第四百六十四條ノ特別規定アルヲ以テ民法第四百六十九條ハ之ニ適用スヘキモノニ非サレハ原審カ之ヲ適用シテ判決ヲ爲シタルハ上告論旨ノ如ク不法タルヲ免カレサルモ本件ノ權利關係ニ於テハ何レノ法律ヲ適用スルモ其結果全ク同一ニ歸着シ即原判決ハ其理由ニ於テ不法ナルモ他ノ理由ニ因リ正當ナルヲ以テ此瑕疵ハ民事訴訟法第四百五十三條ノ規定ニ從ヒ上告ノ理由ト爲スニ足ラサルモノトス(第五)原判決ハ本件手形ノ裏書ノ記名式裏書タルコト及上告會社ノ商號ハ被裏書人トシテ記載セラレサルコトヲ確定シタルモノニシテ裏書人ノ署名ノミヲ以テ爲シタル裏書(所謂白地式裏書)シタルコトヲ認定シタルニ非サレハ第五段ノ論旨モ亦タ失當ナリトス

以上辯明スル如ク本件上告ハ一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ノ規定ニ從ヒ棄却スヘキモノトス

四百六十二

●米代金辨濟請求事件 明治三十五年(オ)第三百二號 (棄却)

明治三十五年九月十八日判決

判決要旨

一旦證人訊問ヲ他ノ裁判所ニ囑托スヘキコトヲ決定シタルモ之レヲ囑托セスシテ自ラ訊問ヲナシタルハ囑托ノ決定ヲ變更シテ自ラ訊問ヲナシタルニ外ナラサレハ不合法ニアラス

說明

本件ハ說明ヲ要セス

第一審 山口地方裁判所赤間關支店 第二審 廣島控訴院

上告人 林 徳兵衛

訴訟代理人 莊 田 經 綸

被上告人 岩 谷 三 郎

右當事者間ノ米代金辨濟請求事件ニ付廣島控訴院カ明治三十五年三月二十四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

三八

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由ノ第二點ハ原院ハ上告人ノ申請ニ基キ證人新井文次ノ取調ヲ高松區裁判所ニ囑托シテ之レカ訊問ヲ遂クル旨ノ決定ヲ下シタルニモ拘ラス爾後其決定ノ變更ヲ爲サス又其決定ノ執行ヲ遂ケスシテ極ク結審ヲ告ケタルハ法則ニ違反セリト云フニ在レドモ○原審記録ヲ查閱スルニ原審ハ明治三十四年十二月二十四日ノ口頭辯論ノ際證人新井文治ヲ高松區裁判所ニ囑托シテ訊問スヘキコトヲ決定シタルモ之ヲ囑托セスシテ明治三十五年三月十七日ノ口頭辯論ノ際自ラ同證人ヲ訊問シタルコト明白ナレハ原審ハ一タヒ爲シタル囑托訊問ノ決定ヲ變更シ自ラ訊問ヲ爲シタルモノト謂フヘシ故ニ本上告理由ハ其根據ナシ  
以上辯明スルカ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ棄却スヘキモノトス

●貸金請求事件 明治三十五年(オ)第三百三十二號 (棄却)

明治三十五年十月二日判決

判決要旨

一、保證人ハ主タル債務者カ債務ヲ履行セサル時ニ於テ始メ  
貸辨濟ヲチテズノ責アルモ以テトズ隨テ主タル債務者ノ如ク

保證債務ノ性質及ヒ擔保減少ニヨリ保證人免責ノ限度

四百六十三

辨濟期日到来シタルノ一點ヲ以テ直チニ辨濟ヲ爲サドル  
 可ラサルノ責ヲ負フモノニアラス  
 二、債權者カ擔保物ヲ減少シタルニ依リ保證人カ債務ヲ免カ  
 ルヘキ限度ハ其ノ減少シタル擔保物ノ價額ニ依リ之レヲ  
 定ム  
 三、前項ノ場合ニ於クル担保物ノ價額ハ減少當時ノ價額ニ依  
 リ定ムルニアラスシテ保證人カ實際ニ辨濟ヲ爲スヘキ時  
 期ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ定ム

保○證○債○務○ノ○性○質○。保○證○債○務○ハ○純○然○タ○ル○擔○保○ニ○シ○テ○主○タ○ル○債○務○ニ○對  
 ス○ル○從○タ○ル○債○務○ナ○リ○隨○テ○保○證○債○務○ハ○消○長○ハ○常○ニ○主○タ○ル○債○務○ト○其○ノ○運○命○ヲ  
 同○フ○ス○ル○モ○ハ○タ○ル○ハ○別○ニ○說○明○ヲ○待○タ○ル○所○ナ○リ○ト○雖○モ○保○證○債○務○ハ○性○質○ト  
 ス○ル○所○ハ○是○ニ○止○マ○ラ○ス○別○ニ○一○ケ○ハ○補○充○的○性○質○ヲ○有○ス○ル○モ○ハ○ト○ス○蓋○シ○保○證  
 債○務○カ○從○タ○ル○性○質○ヲ○有○ス○ト○云○フ○ハ○主○タ○ル○債○務○者○債○務○ヲ○負○擔○セ○サ○ル○ト○ハ○保  
 證○人○モ○亦○タ○其○ノ○債○務○ヲ○負○ハ○ス○ト○云○フ○ノ○謂○ニ○保○證○債○務○カ○補○充○的○性○質○ヲ○有○

ス○ト○云○フ○ハ○債○權○者○カ○主○タ○ル○債○務○者○ヨ○リ○辨○濟○ヲ○得○サ○ル○ニ○至○リ○テ○始○メ○テ○保○證  
 人○ニ○對○シ○辨○濟○ヲ○請○求○ス○ル○コ○ト○ヲ○得○ル○ノ○義○則○チ○是○ナ○リ○。保○證○債○務○ニ○シ○テ○保○證  
 充○的○性○質○ヲ○有○シ○其○ノ○債○務○履○行○ノ○責○任○ハ○主○タ○ル○債○務○者○カ○辨○濟○ヲ○サ○ハ○ル○  
 事○實○ア○ル○ヲ○待○テ○始○メ○テ○生○ス○ル○モ○タ○ル○以○上○ハ○保○證○人○ノ○債○務○履○行○ノ○責○任○ハ  
 單○ニ○辨○濟○期○限○ノ○到○來○シ○タ○ル○ノ○一○事○ヲ○以○テ○直○チ○ニ○生○ス○ヘ○キ○モ○ノ○ニア○ラ○ス○必  
 ス○ヤ○主○タ○ル○債○務○者○カ○履○行○ヲ○サ○ハ○ル○事○實○ア○ル○ヲ○待○タ○サ○ル○可○ラ○サ○ル○ヲ○知  
 ル○ヘ○キ○ナ○リ○今○此○ノ○點○ニ○關○ス○ル○各○國○ノ○法○制○ヲ○考○フ○ル○ニ○債○權○者○カ○保○證○人○ニ○對  
 シ○辨○濟○ヲ○強○要○ス○ル○ニ○當○テ○ハ○(一)或○ハ○債○權○者○ハ○主○タ○ル○債○務○者○ト○同○時○ニ○保○證○人  
 ヲ○訴○追○ス○ル○コ○ト○ヲ○得○ル○ト○ナ○シ○(二)或○ハ○債○權○者○カ○主○タ○ル○債○務○者○ニ○對○シ○テ○強○制  
 執○行○ヲ○ナ○ス○モ○尙○ホ○完○然○ナ○ル○辨○濟○ヲ○得○サ○ル○場○合○ニ○於○テ○始○メ○テ○保○證○人○ニ○請○求  
 ス○ル○コ○ト○ヲ○得○ト○ナ○シ○(明治八年布告第三百二號金穀貸借請人證人辨償規則三)  
 或○ハ○債○權○者○カ○主○タ○ル○債○務○者○ニ○催○告○シ○債○務○者○之○レ○ニ○應○セ○サ○ル○場○合○ニ○於○テ○始  
 メ○テ○保○證○人○ニ○對○シ○請○求○ス○ル○コ○ト○ヲ○得○ト○ナ○セ○リ○以○上○三○主○義○中○第○一○ノ○主○義○ハ  
 保○證○ノ○性○質○ニ○反○ス○ル○モ○ト○云○フ○ヘ○シ○何○ト○ナ○レ○ハ○已○ニ○說○ク○カ○如○ク○保○證○ハ○補  
 充○ノ○性○質○ヲ○有○シ○主○タ○ル○債○務○者○履○行○セ○サ○ル○場○合○ニ○代○テ○之○レ○カ○履○行○ノ○責○任  
 ス○ヘ○キ○モ○ノ○ナ○レ○ハ○ナ○リ○第○二○ノ○主○義○ハ○保○證○ノ○性○質○ヨ○リ○推○ス○ト○キ○ハ○簡○然○ス○ル  
 所○ナ○キ○モ○而○モ○取○引○ノ○頻○繁○ナル○當○時○ノ○狀○況○ニ○在○テ○ハ○債○權○者○ヲ○保○護○ス○ル○ニ○盡  
 保○證○債○務○ノ○性○質○及○ヒ○擔○保○減○少○ニ○ヨ○リ○保○證○人○免○責○ノ○限○度  
 四百六十五

サ、ル所アルヘシ又々當事者ノ意思ニモ適合セサル所アルヘシ然レトモ  
 獨リ第三ノ主義ニ至テハ能ク兩者ノ中庸ヲ得債權者ヲ害セサル範圍内ニ  
 於テ適當ニ保證人ヲ保護スルモノト云フヘシ我カ民法ニ於テハ其ノ第四  
 百四十六條ニ於テ保證人ハ主タル債權者カ其ノ債務ヲ履行セサル場合ニ  
 於テ其ノ履行ヲ爲ス責ニ任ス下規定シ保證債務ニ補充的性質アルヲ認メ  
 其ノ第四百五十二條ニ於テ債權者カ保證人ニ債務ノ履行ヲ請求シタルト  
 キハ保證人ハ先ツ主タル債權者ニ催告ヲナスヘキ旨ヲ請求スルコトヲ得  
 云々ト規定シ以上三列舉セル三ヶノ主義中第三ノ主義ヲ採用シタルコト  
 ヲ明ニセリ然レトモ第三ノ主義ト至テハ致セサル點ハ彼ニ在テハ債務者  
 ニ對スル催告ノ手續ハ直接ニ債權者ニ命ジタルニ不拘是レニ在テハ保證  
 人ノ抗辯權ニ委ネタルノ差アルニシテ要是民法上保證債務ノ性質ハ從タル  
 性質ノ外更ラニ補充的性質ヲ有スルカ故ニ債權者ハ期限經過ノ一事ヲ以  
 テ直チニ保證人ニ對シ請求スルコトヲ得必ズヤ一應主タル債權者ニ對  
 シ催告ヲナシ債務者之レニ應ゼサルニ至リ始メテ保證人ニ對シ請求ヲナ  
 スコトヲ得ヘシ然レトモ其ノ所謂催告ナルモノハ債權者カ保證人ニ對ス  
 ル請求ノ要件ニアラス故ニ債權者カ何等ノ催告ヲナサズシテ保證人ニ請  
 求ヲ爲スモ此ノ請求ハ違法ナルニアラス從テ保證人カ何等ノ抗辯ナク其

四

ノ請求ニ應シ辨濟シタルトキハ其ノ辨濟ハ有效タルヲ失ハス是レ蓋シ債  
 務者ニ對スル催告ノ手續ハ保證ノ性質ヨリ生スル當然ノ順序ナルニ不拘  
 法律ハ之レヲ以テ單ニ保證人カ債權者ニ對シテ爲ス一ノ抗辯權ニ委ネタ  
 ルニ止マリ豫メ債權者ニ此ノ手續ヲナスコトヲ要求セザレハナリ

五

第一審 奈良地方裁判所

第二審 大阪控訴院

上告人 井上綱藏

訴訟代理人 高木益太郎

被上告人 株式会社田原本銀行

右法定代理人 志村清治

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付キ大阪控訴院カ明治三十五年五月七日言渡シタル判決ニ對  
 シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

理由

本件上告ハ之ヲ棄却ス  
 上告理由ノ第一ハ原判決「理由」ノ中段ニ於テ「控訴人ハ右限度ヲ定ムルハ債務辨濟期日  
 ニ於ケル拋棄セラレタル抵當地ノ價額ニ基クヘキモノナリト主張スレトモ保證人ノ債務者  
 ニ對スル求償權ハ保證人カ債權者ニ辨濟ヲナスニヨリ確定スルモノナレハ擔保物ノ減少ニ  
 ヨリ償還ヲ受クルコト能ハサルニ至リタル限度ハ保證人カ債權者ニ現實辨濟ヲナス時ニア  
 保證債務ノ性質及ヒ擔保減少ニヨリ保證人免責ノ限度

ラサレハ知ルコト能ハス從テ保證人カ債權者ニ現實辨濟スヘキ時期ハ保證人カ債權者ヨリ  
辨濟ノ請求ヲ受ケタル時ニ在リテ保證人カ免責主張ヲナスモ亦此時期ニ在ルヲ以テ保證人  
カ免責ノ限度ヲ定ムル爲メ減少セラレタル擔保物ノ價額ヲ評定スルハ被控訴人カ控訴人ニ  
對シ起訴シタル時ニ在リトスト判決シタルハ左記ノ法理ニ違背シタル不法ノ判決ナリ  
(舊民法財産編第四百八拾二條舊民法債權擔保編第三拾六條同第四拾五條現行民法第五百  
條同第五百一條同第五百四條民法施行法第五十三條明治三十四年五月大審院判決錄第七輯  
第五卷百四十七頁記載)ト云フニ在レトモ○元來保證人ハ主債權者カ債務ヲ履行セザル場  
合ニ於テ始メテ辨濟ヲ爲スノ責アル者ニシテ隨テ辨濟期日到来シタレハトテ主債權者ノ如  
ク直ニ辨濟ヲ爲サル可ラサル責アル者ニ非ス(但シ保證人カ主債權者ト連帶シテ債務ヲ  
負擔スル場合ハ格別ナレトモ)上告人カ之ト連帶シテ債務ヲ負擔スル者ニ非サルコトハ原判  
決ニ徴シテ明確ナル事實ナリトス)又保證人ノ主債權者ニ對スル求償權及ヒ代位ハ保證人  
カ債權者ニ辨濟ヲ爲スニ因リ始メテ發生スルモノニシテ固ヨリ辨濟期日ニ發生スルモノニ  
非ス然レハ債權者ノ擔保物ヲ減少シタルカ爲メ保證人カ主債權者ヨリ償還ヲ受クルコト能  
ハサルニ至リタル限度ハ保證人カ債權者ノ請求ニ依リ之ニ辨濟ヲ爲サルヘカラサル時モ  
於ケル擔保物ノ價額ニ因リ定ムヘキモノトス蓋シ擔保物減少ニ因ル免責ノ抗辯ヲ以テ債權  
者ノ請求ニ對抗スル保證人ハ其擔保物減少ノ程度ヲ定メ其程度ニ相當スル辨濟ノ責ヲ免カ  
レトストスルニ外ナラサレハナリ今マ原院ノ確定シタル事實ニ依レハ債權者タル被上告人カ

債務ノ辨濟期限前ニ一部ノ辨濟ヲ受ケ抵當地ニ筆ヲ拋棄シ其後殘餘ノ抵當地ニ付キ強制執  
行ヲ爲シ其競賣金ヲ以テ債務ノ辨濟ニ充テタルモ尙ホ不足額アルカ故ニ之ヲ上告人ニ請求  
シタルニ對シテ保證人タル上告人ヨリ擔保物ノ減少ニ因ル免責ノ抗辯ヲ爲スモノナレハ免  
責ノ限度ヲ定ムルノ時期ハ上告人カ被上告人ニ辨濟ヲ爲サル可ラサル時即チ主債權者カ  
辨濟ヲ爲サル爲メ被上告人ヨリ上告人ニ對シテ辨濟ノ請求ヲ爲シタル時尙ホ之ヲ換言ス  
レハ本訴提起ノ時ナリト云ハサルヘカラス然ルニ上告代理人ハ數多ノ法條及ヒ判例ヲ引用  
シテ此等ノ法條及ヒ判例ヲ綜合スレハ債務ノ履行期日ニ於ケル擔保物ノ價額ニ依リ免責ノ  
限度ヲ定メサルヘカラサル法理ヲ知ルニ足レリト論辯スルモ其法條及ヒ判例ハ或ハ代位ノ  
利益ヲ受クヘキ者或ハ代位者ノ順位或ハ代位ノ効力ヲ規定シタルモノ又ハ保證契約後債權  
者カ保證人ノ承諾ナク主債權者ニ與ヘタル期限ヲ以テ保證人ニ對抗スルコトヲ得サル旨ヲ認  
メタル者ニ過キスシテ前示辯明ノ支障ト爲ルヘキモノニ非ス夫レ然ラハ原院カ「前畧  
保證人カ免責ノ限度ヲ定ムル爲メニ減少セラレタル擔保物ノ價額ヲ評定スルハ被控訴人カ  
控訴人ニ對シ起訴シタル時ニ在リトスト」說明シタルハ洵ニ相當ニシテ非難スヘキ廉ナシ  
右ノ理由ナルニヨリ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ主文ノ如ク判決ス

●約束手形金請求事件

明治三十五年(才)第二百三十一號 (破毀)  
明治三十五年十月二十一日判決

判決要旨

新年宴會ト休暇日



一月五日カ休暇日タル所以ハ宮中ニ新年宴會ノ御催アリ  
テ祝日タルニ因ルモノトス故ニ若シ其御催ナシトセハ同  
日ハ祝日ニアラス隨テ法律上ノ休暇日ニ相當セス

說明

本件ハ說明ヲ要セス

第一審 長野地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 池田佐吉

訴訟代理人 須田 義之

被上告人 鹽入 嘉重 耶

訴訟代理人 兩角 彦六

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十五年三月十一日言渡シタル判  
決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ止告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告理由ノ第一ハ原院ニ於テ本件控訴提起ノ日ハ明治三十五年一月七日ニシテ控訴ノ不變  
期間ハ一月六日滿了スルヲ以テ期日經過後ニ沙ル不適法ノ控訴ナリト判決セラレタル理由  
ハ「明治六年第三百四十四號布告ハ毎年一月五日新年宴會ノ祝日ト規定シタルヲ以テ同日  
カ民事訴訟法第六十六條ニ所謂一般ノ祝祭日ニ該ルコトハ論ヲ俟タス而シテ明治三十四

年十二月宮内省告示第十七號ハ明治三十五年新年式中ニ其一月六日ヲ以テ新年宴會ト定メ  
ラレタルコトハ控訴人(上告人)所論ノ如シト雖モ同告示ハ前記布告第三百四十四號ヲ變  
更シタルモノニ非ス從テ明治三十五年一月六日ハ民事訴訟法第六十六條ニ所謂一般ノ祝  
祭日ト云フ可ラスト云フニ在リ然リ明治六年第三百四十四號布告ハ毎年一月五日ヲ新年  
宴會祝日ト規定シアルニ相違ナキモ熟々該布告ノ精神ヲ玩味スルニ宮中ニ於ケル新年宴會  
ノ日ヲ祝日ト規定セラレタルコトハ主ニシテ其一月五日ト云フ如キハ從タル規定ニ過キス  
ト云ハサルヲ得ス故ニ其祝日ノ如キハ宮中ノ御都合ニヨリ多年ノ例ヲ變シテ六日トスルコ  
トハ宮内省ノ權限内ニ屬スルモノト論斷セサル可ラサルヤ言ヲ俟タス且夫レ該布告ノ新年  
宴會祝日ノ如キハ其性質ヨリ見テ他ノ祝祭日ト區別セサル可ラス例ヘハ天長節ノ如キハ云  
フ迄モナシ 陛下御降誕ノ日ヲ祝スルニアルヲ以テ其御降誕ノ日ハ一定不變ノモノタラサ  
ル可ラス之ニ反シテ新年宴會祝日ノ如キハ宮中ニ於テ新年ノ宴會ヲ催サル、日ト解釋セサ  
ル可ラス若シ原判旨ノ如クセハ本年モ新年宴會祝日ハ一月五日ニシテ一月六日ハ無意味ノ  
休暇日ナリト謂ハサル可ラス然ルニ事實ハ現ニ一月六日ハ新年宴會祝日トシテ諸官廳モ  
休暇ナリシニ非ラスヤ如此原判旨ニ仍ルモ新年宴會ノ日ヲ以テ一般ノ祝祭日ト認メナカラ  
本年ノ新年宴會ノ日ニ限リ一般ノ祝祭日ト云フ可ラストノ論旨ハ到底法則ヲ不當ニ適用シ  
タルコトヲ免レスト云ヒ之ニ對スル被上告人ノ答辯ハ上告人ハ明治六年布告第三百四十  
四號ニ一月五日ヲ以テ新年宴會ト定メタルハ宮中ニ於ケル新年宴會ノ日ヲ祝日ナリト規定

新年宴會ト休暇日

シタルモノニシテ其一月五日タルト六日タルト將タ十日タルトハ宮中ノ御都合次第ニテ如何様ニモ之ヲ定メ得ヘシト論スレトモ該布告ノ精神カ上告人所論ノ如キモノニ非スシテ一月五日タル確定ノ日ヲ以テ新年宴會ト定メ之ヲ祝日ト爲シタルハ明白ナル所ナリ假リニ上告人所論ノ如ク單ニ宮中ニ於ケル御儀式日ナリト解セハ假令諸官廳ニ休暇ヲ命シタリトテ是テ之レ民事訴訟法第百六十六條ニ所謂一般ノ祝祭日ト云フヲ得ス要之上告本論旨ハ畢竟無意味ノ論點ナリト云フニ在リ

按スルニ明治六年第三百四十四號布告ニハ「年中祭日祝日等ノ休暇日左ノ通候條云云新年宴會一月五日云云」トアリテ恰モ毎年一月五日ハ一定不變ノ休暇日ナルカ如キ觀テキニ非スト雖モ其一月五日カ休暇日タル所以ハ宮中ニ於テ新年宴會ノ御催アリテ祝日タルニ因ルモノト云ハサルヲ得ス然レハ若シ新年宴會ノ御催ナシトスレハ一月五日ハ祝日ニ非ス隨テ休暇日ニ非スト云ハサルヘカラス故ニ前掲布告ハ新年宴會ハ通例一月五日ニ御催アルヘキコトヲ定メタルニ過キス然ルニ明治三十四年十二月宮内省告示第十七號ヲ以テ明治三十五年新年式中ニ其一月六日ヲ新年宴會ノ當日ト定メテ告示シタルコトハ原院モ認メタル公知ノ事實ナリトス夫レ然リ然ラハ明治三十五年ニ在テハ一月六日カ祝日即チ民事訴訟法第百六十六條ニ所謂一般ノ祝祭日ニシテ一月五日ハ祝日ニ非スト云ハサルヘカラス然ルニ原院ハ「前署明治三十五年一月六日ハ民事訴訟法第百六十六條ニ所謂一般ノ祝祭日ト云マヘカラスナルニ付本件ニ在テハ明治三十五年一月六日限リ控訴期間終了スルモノト云ハサルヘカ

ラスニ云云」ト説明シ三十五年一月六日ハ新年宴會ノ當日タル事實ヲ認メタルニモ拘ラス民事訴訟法第百六十六條ニ所謂一般ノ祝祭日ニ非スト判示シタルハ上告所論ノ如ク法則ヲ不當ニ適用シタルモノニシテ原判決ハ破毀ヲ免カレス既ニ此點ニ於テ原判決破毀ノ理由アルカ故ニ上告理由ノ第二ニ付テハ別ニ説明ヲ與ヘス  
上來説明スル如クナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項第四百四十八條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

●約束手形金請求事件

明治三十五年(オ)第三百八十四號  
明治三十五年十一月十一日判決 (破毀)

判決要旨

手形ノ作成若クハ交附ナシタル地ニアラサル場合ハ之レヲ以テ手形ノ振出地トナスコトヲ得ス

說明

●手形ノ振出地。手形ノ振出地トシテ記載セシニハ左ノ要件ヲ具備スルコトヲ要ス  
●(一)手形ノ振出地トシテ有効ニ記セシニハ法律ニ定ムル行政區畫ニ基キ獨立シタル地名ヲ以テスルコトヲ要ス。故ニ獨立シタル地名ヲ記セズ單ニ

手形振出地ノ要件

其ノ區畫内ナル町名若クハ字番號ノミヲ以テ振出地ヲ表示シタルトキハ無効タルヲ免カレズ此ノ點ニ付テハ學者間ニ於テ頗ル議論ノ存スル所ナルモ我大審院ノ見解ハ此ノ要件ヲ必要トスルコト已ニ判例ノ一定スル所ナルカ故ニ特ニ之ヲ揭示シテ敢テ讀者ノ注意ヲ促ス所以ナリ判例彙報第十二卷百六十四頁參照)

(二) 手形ノ振出地トシテ有效ニ記載セシムルハ手形ヲ作成シタル地又ハ手形ヲ交附シタル地ヲ以テスルコトヲ要ス。凡シ手形ノ振出ナルモノハ單ニ手形ヲ相手方ニ交附スルノミヲ云フニアラス手形ヲ作成スルコトモ亦タ手形振出ノ一種ナルカ故ニ手形ニ振出地トシテ記載シ得ヘキモノハ獨リ手形ヲ交附シタル地ノミニ限ラス手形作成ノ地モ亦タ手形振出地トナシ之レヲ記載スルコトヲ得ザル可ラス(判例彙報第十三卷三百七十頁參照是レ蓋シ法律ニ於テ手形ニ記載スヘキ振出地ハ必スシモ手形ノ作成并ニ其ノ交附ヲ完了シタル地ヲ以テスヘキノ制限ヲケレハナリ然リト雖モ手形ノ作成若クハ交附ニ關係ナキ以外ノ土地ニ至テハ手形ト何等ノ關係ナキヲ以テ之レヲ以テ振出地トナスカ如キハ法律ノ許サザル所ナリトス

第一審 大津地方裁判所彦根支部

第二審 大阪控訴院

上告人 塚本米治郎

訴訟代理人 望月長夫

被上告人 今泉卯吉

訴訟代理人 高橋四郎

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付キ大阪控訴院カ明治三十五年五月二十日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタル

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ差戻ス

理由

上告理由第三點ハ原決判ニ於テハ「振出地ナルモノハ專ラ他人ニ交付シタル場所ヲ記載スルヲ要スルモノニアラスシテ支拂其他ノ便宜ヲ爲メ適宜ノ地ヲ記載スルコトヲ妨サル」旨判示セラレタリト雖モ是レ約束手形ノ要件タル振出地ヲ其要件タラサル支拂地ト混同シタル違法ノ判決ナリト信ス蓋シ約束手形ノ支拂地ハ其法定要件ニアラサルカ故ニ當事者ノ便宜ノ爲メ隨意ニ其場所ヲ指定シ得ヘシト雖モ振出地ニ至ツテハ即チ約束手形成立ノ一要件ナルカ故ニ當事者ノ意思ニ依リテ事實ニ反シタル記載ヲ爲シ得ヘキニ非ス(事實ニ反スル記載ハ記載ナキニ均シ)然ルニ原判決ニハ振出地ハ支拂其他ノ便宜ノ爲メ隨意ノ場所ヲ記載スルヲ得ルカ如ク判示シ全ク支拂地ト振出地ト混同シタル不法アルモノナリト云フニ在リ

手形振出地ノ要件

四四七十六  
因テ按スルニ手形ノ振出地トハ手形ノ振出行爲ヲ爲ス地ヲ指稱シ而シテ手形ノ振出行爲  
トハ獨リ手形ヲ取受人ニ交付スル行爲ノミヲ謂フニ非スシテ手形作成ノ行爲ヲモ指稱スル  
モノナレハ必シモ手形ノ交付地ヲ振出地ト爲サシムル可カラサルモノニ非スシテ其作成ノ地  
ヲモ振出地ト爲スコトヲ得ヘキハ固ヨリ論ナシト雖モ手形ノ振出行爲ニ全ク關係ナキ地ヲ  
以テ振出地ト爲スヘキモノニ非ス若シ振出人カ便宜上振出地以外ニ於テ手形ノ支拂ヲ爲サ  
ント欲セハ宜ク其便宜ノ地ヲ支拂地トシテ手形ニ記載スヘキモノトス故ニ本件手形ノ振出  
人ノ肩書ノ地カ果シテ振出地タルヤ否ヤノ爭點ヲ判斷スルニハ其地ノ果シテ振出行爲ノ地  
ナルヤ否ヤヲ判定セサル可カラズ然ルニ原判決ハ「(前略) 振出地ナルモノハ專ラ他人ニ交  
付シタル場所ヲ記載スルヲ要スルモノニ非スシテ支拂其他ノ便宜ノ爲メ適宜ノ地ヲ記載ス  
ルコトヲ妨クサレハ現實該手形ニ記載シタル振出人ノ肩書ノ地ヲ以テ振出地ト認ムルニ足  
レリトス」云々ト説明シ振出人ノ肩書地ノ振出行爲地タルコトヲ確定セスシテ直ニ其地ヲ  
以テ振出地ト判定シタルハ不法ニシテ結局原判決ハ理由不備ノ裁判ナリトス被上告代理人  
ハ原判決ハ畢竟手形作成地ヲ以テ振出地ト爲シタルニ外ナラサレハ毫モ不法ニ非スト辯論  
スルモ本院ハ斯ノ如ク之ヲ解釋スルコトヲ得ス以上ノ理由ハ原判決ノ全部ヲ破毀スルニ足  
ルヲ以テ他ノ上告理由ニ對シテハ特ニ説明ヲ爲スノ要ナシ因テ民事訴訟法第四百四十七條  
第一項及同第四百四十八條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

●地所所有權移轉登記手續請求事件

明治三十五年(オ)第三百七十八號 (棄却)  
明治三十五年十月八日判決

判決要旨

寺院ハ民法實施以前ニ在テハ法人格ヲ有シタルハ判例ノ  
認ムル所ナリ

說明

是レ民法施行法第二十八條ニ於テ民法中法人ニ關スル規定ハ當分ノ内神  
社寺院及祠堂佛堂ニハ之レヲ適用セストノ規定ヲナシ暗ニ民法實施以前  
ニ在テハ此等ノ神社若クハ堂宇カ法人格ヲ有スルコトヲ了知スルニ難カ  
ラサレハナリ

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 秋本幸次郎

訴訟代理人 神原和三郎

被上告人 招慶院

右法定代理人 河村南日解

右當事者間ノ地所所有權移轉登記手續請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年五月三日言  
渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

寺院ノ性質

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告諭旨ハ原院判決ハ寺院ハ私法上人格アルモノト認メラレ明治九年第五十四號布告並ニ同十年第四十三號布告ヲ引用セラレタルモ該布告ノ趣旨ハ毫モ寺院ニ法人格ヲ認メタルコトナク或ハ所有權移轉ノ時期ヲ示シ或ハ債務關係上ノ手續要件等ヲ規定シタルニ過キサルモノナリ故ニ原院說明ノ如ク民法施行法第二十八條ヲ打破スヘキ規定アルニ非サルニ依リ原院ノ判定ハ法則ノ誤解ニ出テ不當ニ法則ヲ適用シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ

依テ審按スルニ寺院ハ法人ナリト直接ニ規定シタル法令ハナクレトモ民法施行法第二十八條ニ民法中法人ニ關スル規定ハ常分ノ内神社、寺院、祠宇及ヒ佛堂ニハ之ヲ適用セストアリテ若シ民法ニ於テ寺院ヲ法人ニアラサルモノトスレハ此ノ如キ規定ヲ設クル筈ナキニ此ノ如キ規定ヲ設ケタル所ニ由レハ民法ハ寺院ヲ法人ト爲シタルモノトス又從來ヨリ存在セル布告(明治六年三月五日第八十九號同年七月十七日第二百四十九號明治九年第五十四號明治十年五月十六日第四十三號)及ヒ之ニ類スル數多ノ布告等ニ由ルモ寺院ハ慣習上從來ヨリ一ノ法人トシテ寄附ヲ受ケ財產ヲ所有スルコトヲ許サレタルコトモ毫末ノ疑ナシトス

依テ原院カ被上告人タル寺院ヲ人格ヲ有スルモノトシテ裁判シタルハ相當ニシテ本諭旨ハ理由ナシ

以上説明スル如ク本件上告ハ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依

リ棄却スヘキモノトス

●約束手形金償還請求事件

明治三十五年(乙)第四百四十號 明治三十五年十月十四日判決 (棄却)

判決要旨

- 一、訴訟代理人カ受訴裁判所ノ所在地ニ假住所ノ届出ヲナシタル場合ト雖モ其裁判所所在地ニ事務所ヲ有シ又ハ届出ノ後新ニ事務所ヲ設ケタルトキハ書類ノ送達ハ其事務所ニ於テ之レヲ爲スモ有效ナリトス
- 二、事務所ヲ有スル辯護士ニ對スル送達ハ本人不在ナルトキハ其事務所ニアル營業使用人若クハ筆生ニ之レヲナシ得ヘキハ勿論其ノ辯護士ヨリ特ニ送達ヲ受クルコトニ付キ委任ヲ受ケ其ノ事務所ニ在ル者ニ之レヲ爲スモ亦タ有效ナリトス

說明

假住所選定○送達ヲ受ケヘキ人

一 訴訟關係人カ受訴裁判所ノ所在地ニ事務所ヲ有スルトキハ此ノ事務所ハ民事訴訟法上當然書類ノ送達ヲナスヘキ場所ナルカ故ニ例令ハ假住所ノ届出ヲナシタリトスルモ所在地ノ事務所ハ之レカ爲メ書類送達ノ場所タル關係ヲ消滅スヘキモノニアラサレハナリ

二 是レ法文ノ解釋ヨリ然ルモノニシテ別ニ深淵ナル法理ノ存スルニアラズ法文ノ規定ハ送達ヲ受クヘキ人住所ニ出合ハサルトキハ同居ノ親族若クハ雇人ニ之レヲ爲スコトヲ得トアリテ送達ヲ受クヘキコトノ特別委任ヲ受ケタル者ニ對シテハ何等規定スル所ナシト雖モ法文ノ趣旨ヨリ推ストキハ之等ノモノニ對シテモ尙ホ且ツ有效ニ送達ヲナスコトヲ得ヘシ何トナレハ凡ソ法律カ書類ノ送達ニ關シ一般ノ規定ヲナス所以ノモノハ送達ノ確實ヲ保セントスルニ外ナラス果シテ然ラハ送達ヲ受ケルニ付キ特ニ委任ヲ受ケタル者ニ對シテ爲ス送達ハ何等ノ委任ヲ受ケサル親族若クハ雇人ニ比スレハ其送達一層確實ナルヘク之ヲ無効トスルノ理由毫モ存スル所ナケレハナリ

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院  
 上告人 和田孫三郎 訴訟代理人 横山寛平  
 被上告人 荒木英一

右當事者間ノ約束手形金償還請求事件ニ付キ大阪控訴院カ明治三十五年五月二十八日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決  
 本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告理由ノ第一點ハ上告人ハ辯護士岩田信ヲ訴訟代理人トシ明治三十四年九月七日日本件ノ訴ヲ大阪地方裁判所ニ提起シ同時ニ代理人岩田信ハ大阪ニ事務所ヲ有セサルヲ以テ民事訴訟法第四百三十三條ニ從ヒ大阪市北區若松町二十七番地關正是方テ假住所ニ選定シタル旨ヲ届出タリ(一審記録ニ在リ)凡ソ送達ハ本人ニ之ヲ爲ス場合ニ於テハ假令住居又ハ事務所以外ニ於テ爲シタルトキト雖モ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り之ヲ有效トスルコト民事訴訟法第四百四十四條第一項ノ規定スル所ナリ然レトモ本人以外ノ者ニ爲ス場合ニ於テハ必ズ法定ノ場所ニ於テセサルヘカラス是レ法律ニ本人以外ノ者ノ送達ヲ受クヘキ場合ニ於テ前掲第四百四十四條第一項ノ如キ規定ナキニ徴シ自ラ明ナリ然ルニ本件第一審ノ判決正本ハ其送達證書ニ明ナル如ク適法ニ届出タル假住所ニ於テ送達セラレシテ却テ本人事務所トシテ大阪市北區小幡町三百七十番邸ニ於テ同居人ニ送達セラレタリ然ラハ其送達ハ適法ノ場所ニ於テ執行セラレサルヲ以テ無効ナリト云フニ在レトモ○訴訟當事者又ハ其訴訟代理人ノ假住所ハ受訴裁判所ノ所在地ニ住居モ又ハ事務所モ有セサル場合ニ限り之ヲ選定シテ受訴假住所選定○送達ヲ受クヘキ人

裁判所ニ届出ツヘキモノニシテ現ニ住居又ハ事務所ヲ有スル場合ニハ之ヲ届出ツヘキモノニ非スト雖モ現ニ事務所ヲ有スルニ拘ハラズ誤テ假住所ノ届出ヲ爲シ若クハ假住所ノ届出ヲ爲シタル後事務所ヲ設ケタル場合ニ該事務所ニ於テ爲シタル送達ハ之ヲ有效ト爲サル可ラス何トナレハ受訴裁判所ノ所在地ニ在ル事務所ハ民事訴訟法上當然送達スヘキ場所ナルカ故ニ此場所ニ於テ爲シタル送達ヲ以テ無効ト爲スヘキ理由存セザレハナリ故ニ原判決カ上告人ノ訴訟代理人タリシ辯護士岩田信ノ事務所ニ爲シタル送達ヲ以テ有效ト爲シタルハ相當ニシテ毫モ批難スヘキモノニ非ス

其第二點ハ假ニ代理人辯護士岩田信カ大阪ニ事務所ヲ有スルモノトスルモ(送達證書ニアル如ク)事務所ニ於テ爲スヘキ送達ハ民事訴訟法第四百六條ニ於テ之ヲ受クヘキ人ヲ限定シ單純ノ同居人ヲ含マス然ルニ第一審判決正本ノ送達ハ其送達證書ニ明記スルカ如ク同居人ニ之ヲ爲シタルモノトス然ラハ其送達ハ適法ノ人ニ執行セラレサルヲ以テ無効ナリト云フニ在レトモ○事務所ヲ有スル辯護士ニ對スル送達ハ本人不在ナルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人若クハ筆生ニ之ヲ爲スコトヲ得ヘキハ勿論其辯護士ヨリ特ニ送達ヲ受クルコトニ付キ委任ヲ受ク其事務所ニ在ル者ニ之ヲ爲スモ亦有效ナリト謂ハサル可ラス何トナレハ民事訴訟法ハ斯ノ如キ受任者ニ送達スルコトヲ禁スル規定ヲ設ケサルノミナラス送達ヲ受クヘキ辯護士ノ事務所ニ在ル營業使用人又ハ筆生ニ送達ヲ爲シ得ヘキコトヲ規定シタル精神ニ徴スルモ其有效ナルコトヲ知リ得ヘキヲ以テテ其故ニ本上告理由モ亦タ失當ナリト

其第三點ハ原院ハ代理人辯護士岩田信カ適法ニ假住所ノ届出ヲ爲シタルコトヲ認メナカラ猶ホ之ト相容レサル事務所ニ於ケル送達ヲ有效ナラシメシカ爲メ一審判決ノ送達證書ニ署名セル福原馨一ト岩田信トノ間ニ送達ニ付テノ委任關係アルコトヲ斷定セラレタリ而モ第一審ニ於ケル明治三十四年九月十七日ノ期日呼出狀ヲ福原馨一ニ送達シ之ニ基ツキ代理人カ訴訟行為ヲ爲シタル事實ヲ引證シテ委任關係アルコトヲ認メタルモノ、如クナルモ這ハ送達吏ノ過誤ニ因リ執行セラレタルモノナレトモ之ヲ争フトキハ期日遷延ノ虞アルヲ以テ之ヲ不問ニ付シタルノミカ爲メ終始兩人間ニ委任關係アリト謂フヘカラサルノミナラス斯ノ如キ事實ハ當事者ノ提出シタルモノニアラス假令斯ル事項ハ職權調査ニ屬ストスルモ送達ノ適否ハ送達ニ關スル法則ニ基キ之ヲ判斷セサルヘカラス然ルニ原院ハ送達ノ證據ニ供シタル送達證書ノ記載以外ニ逸出シ又假住所ノ規定ヲ顧ミスシテ委任關係ヲ認メタルハ法則ニ違背シ事實ヲ確定シタル不法アリト云フニ在レトモ○控訴ハ其法定期間ニ提起セラレタルヤ否ヤハ控訴審カ職權ヲ以テ調査スヘキ事項ニ屬スルコトハ民事訴訟法第四百十九條ノ規定スル所ナリ而シテ控訴期間ハ判決ノ有效ナル送達ヲ以テ始マルカ故ニ其送達ハ果シテ適法ノ場所ニ於テ適法ノ人ニ爲サレタルヤ否ヤノ問題モ亦其職權調査ノ事項ニ屬スト謂ハサル可ラス然リ而シテ裁判所ノ職權調査ニ屬スル事項ノ判斷ニ付キテハ當事者ノ特ニ援用セサル證據ト雖モ訴訟記録上明白ナル事實ノ存スルトキハ裁判所ハ之ヲ資料トシテ判

假住所選定○送達ヲ受クヘキ人

斷ヲ爲スコトヲ得ルモノナレハ原判決ニハ毫モ不法ノ點アルヲ視ス本上告理由末段ノ失當ナルコトハ第一項及第二項ノ説明ニ依リテ之ヲ知ルヘシ  
以上説明スル如ク本件上告ハ一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク棄却スヘキモノトス

貸金請求事件

明治三十五年(乙)第二百十九號  
明治三十五年十月二十五日判決

(破毀)

判決要旨

- 一、債務者カ任意ニ制限超過ノ利息ヲ債權者ニ支拂フハ民法第七百八條ニ所謂不法ノ原因ノ爲メニ給付ヲナレタルニ外ナラス從テ之レカ返還ヲ請求スルコトヲ訴サス
- 二、裁判所カ民法第四百九十一條ニ從ヒ辨濟ノ充當ヲナスニ當リ制限外ノ利息ニ對シ充當スヘキ旨ノ裁判ヲナシタルハ不當ナリトス

說明

一、利息制限法ノ趣旨トスル所ハ唯ニ債權者ニ對シ制限以外ノ利息ヲ徵收

スルコトヲ禁ズルノミナラス債務者ニ對シテモ亦タ之レカ支拂ヲナス  
コトヲ禁止スルモノトス此ノ規定ニ違背シテ高利ノ支拂ヲナシ又ハ徵  
收ヲ爲スハ共ニ法律ノ禁制ヲ犯スモノニシテ則チ不法ノ原因ニ基ク財  
物ノ受授ニ外ナラス返還ヲ請求スル能ハサル所以ナリ

二本項ハ説明ヲ要セス

(參照) 不法ノ原因ノ爲メ給付ヲシタルモノハ其給付シタルモノ、返還ヲ請求スルコトヲ得ス但不法ノ原因カ受益者ニ付テノミ存シタルトキハ此ノ限ニアラス(民法第七百八條)

第一審 盛岡地方裁判所 第二審 宮城控訴院  
上告人 澤田 藤兵衛 訴訟代理人 中村 徳重郎  
被上告人 齋藤 喜右衛門

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付宮城控訴院カ明治三十五年二月十七日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

原判決及ヒ原院明治三十五年二月十日ノ訴訟手續ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ宮城控訴院ニ差戻ス

理由

上告趣旨ノ第一ハ原判決ハ「而シテ制限ヲ超過スル利息ト雖モ已ニ之ヲ辨濟セシ以上ハ之



ヲ取戻ス事ヲ得サルヲ法則トスルカ故ニ控訴人ハ其制限超過ノ利息ヲ計算シ本訴ノ金圓ト  
 差引ヲ爲スヲ得サルモノトス」ト判定セラレ法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ裁判ナリ何ト  
 ナレハ契約ノ利子ト雖モ利息制限法ニ規定シタル以上ハ利子ハ裁判上無効ノモノトス既ニ  
 裁判上無効ナルモノヲ被上告人ニ於テ取得シタルモノナレハ之レ不當ニ利得シタルモノナ  
 ルヲ以テ上告人主張ノ如ク計算シテ本訴ノ金員ト差引ヲ爲スヘキモノナリ要スルニ利息制  
 限法ノ律意ハ任意ニ辨濟シタルト將又裁判上請求スルトヲ問ハス苟モ制限以上ノ利息ハ貸  
 主ニ於テ如何ナル名義ヲ以テスルモ之カ得取スルヲ許サ、ルモノト解釋セサル可ラサルニ  
 前掲ノ如ク判定セラレタルハ不法ノ裁判ナリト云フニ在リ  
 然レトモ利息制限法ハ公益規定ナルヲ以テ若シ制限ニ超過シタル利率ヲ契約シタルトキハ  
 獨リ債權者ニ背法ノ行爲アルノミナラス債務者モ亦背法ノ行爲アルコト勿論ナレハ債務者  
 カ任意ニ制限超過ノ利息ヲ債權者ニ支拂ヒタル場合ニ於テハ所謂不法ノ原因ノ爲メ給付ヲ  
 爲シタルモノト云ハサルヲ得ス而シテ不法ノ原因ノ爲メ給付ヲ爲シタル者ハ其給付シタル  
 モノ、返還ヲ請求スルヲ爲サルコトハ民法第七百八條ニ於テ明ニ規定スル所ナリ故ニ本論  
 旨ハ上告ノ理由トナラス

上告趣旨ノ第二ハ原判決ハ「(前略)該利息ノ計算前記説明ニヨリ八百圓一口ヲ除キタル其  
 他三口元金ニ對シテハ利息制限ヲ超過シタルモノナリト雖モ其後控訴人藤兵衛ハ元利金ノ  
 内へ九千二百六十七圓十二錢八厘ノ辨濟ヲ爲シタルコトハ爭ヒナク而シテ右金員ハ普通ノ

法則ニ從ヒ先ツ其利息ニ充當シ其餘金ヲ元金ニ充當シタルト看做サルヘキヲ以テ甲第一號  
 證ノ利金全部ハ既ニ辨濟シ終リタルモノト認ムルヲ相當トス」ト判示セラレ上告人カ其充  
 當方法ヲ定メスシテ辨濟シタル金圓ノ一部ヲ以テ法律カ禁止セシ利息制限法ノ制限ヲ超過  
 セシ不法ノ利息ニ對シ之ヲ充當シタルト看做スヲ以テ相當トスト判斷セラレタルハ是レ明  
 ニ利息制限法ニ違背シタルモノト云ハサル可ラス勿論同制限ヲ超過シタル利息ト雖モ已ニ  
 之ヲ授受シ終リタル金員ハ之ヲ取戻スコト能ハサルコトハ御院判例ニ於テ認メラレタル所  
 ナルヲ以テ若シ當事者ニシテ其制限超過ノ利息ニ對シ辨濟スルトノ意思表示ヲ爲シタルト  
 キハ最早之ヲ取戻シ能ハサルコト原院判示ノ如クナルヘシト雖モ本件ニ於テハ當事者間右  
 意思表示ナキコトハ原院ノ已ニ之ヲ認ムル所ナリトスレハ制限超過ノ利息ニ對シテ未タ辨  
 濟ナシト云ハサル可ラス未タ其辨濟ナシトスレハ上告人ニ於テ之ヲ支拂フヘキ義務ナキコ  
 ト尤モ明瞭ナリ原院ハ或ハ民法第四百九十一條ニ基キ充當ノ順序ハ第一費用第二利息第三  
 元本トアルヲ以テ本件ニ於テモ第一利息ニ充當シ次ニ元本ニ充當スヘキ筋合ナルヲ以テ本  
 件利息ハ全部辨濟シタルモノナリト云フヲ得ヘシト雖モ同法ニ於テ利息トハ法律ノ許容シ  
 タル適法ノ利息ヲ云フモノニシテ本件ノ如ク制限超過ノ利息ヲ指示スルモノニアラサルコ  
 トハ利息制限ニ於テ制限超過ノ利息ヲ禁止スル規定アルニ對照シテ明カナリ若シ原院ノ解  
 釋スルカ如ク同條ノ利息ニハ制限超過ノ不法利息ヲモ包含ストスレハ法律ハ一方ニ於テハ  
 利息制限法ニ於テ制限超過ノ利息ノ支拂ヲ禁止シテ却テ同條ニ於テ利息制限法ニ於テ

禁止シタル利息ニ對シ尙強制シテ元本ニ先テ辨濟セシムルノ結果ヲ來スヘクレハナリ是ヲ以テ本件制限超過ノ利息ハ一方ニ於テハ當事者間充當ノ意思表示ナキカ爲メニ未タ辨濟ナク而シテ他ノ一方ニ於テハ民法第四百九十一條ノ利息ノ意義ハ制限超過ノ利息ヲ包含セザルヲ以テ法律上辨濟シタリト看做スニト能ハサルヲ以テ結局本件係爭利息ハ未タ全ク其辨濟ナキモノト云ハサル可ラス故ニ原院カ其利息ニ充當シタリト看做スヲ以テ相當トスト判決セラレタルハ利息制限法及ヒ民法第四百五十一條ノ規定ニ違背シタルノ不法アリト云フニ在リ

按スルニ制限外ノ利息ト雖モ當事者間ニ於テ既ニ任意授受シタルモノハ債務者返還ノ請求ヲ爲スヲ得サルコトハ前段ニ於テ説明セシ所ノ如シ故ニ本論告ノ目的トナリタル原判旨ヲシテ當事者ノ意思ヲ以テ債務者ノ支拂ヒタル金額ヲハ先利息ニ充當シ其餘金ヲ元金ニ充當シタルモノナリト事實ヲ確定シタルモノナラシメンカ其判斷ハ不法ナリト云フヲ得ザレトモ原判決ニハ「前略右金圓ハ普通ノ法則ニ從ヒ先其利息ニ充當シ其餘金ヲ元金ニ充當シタリト看做サルヘキヲ以テ云々」ト說示シアルヲ以テ法律上ノ充當ヲ爲シタル判旨ナリト云ハサルヲ得ス然レハ則チ制限外ノ利息ニ關スル契約ハ當然無効ナルヲ以テ原院カ法律上ノ充當ノ場合ニ於テ制限外ノ利息ニ付テ有效ニ充當スルコトヲ得ヘキモノト爲シタルハ不法ノ裁判タルコトヲ免レス

以上ノ理由ニ照ラシ原判決ノ全部ヲ破毀スルニ十分ナリ而シテ被告上告人ハ口頭辯論ノ期日

ニ出頭セスト雖モ原判決破毀ノ理由ハ純然タル法律上ノ理由ナルヲ以テ對席トシテ判決スヘキモノトス仍テ民事訴訟法第四百四十七條及ヒ第四百四十八條第一項ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

辯濟金返戻請求事件

明治三十五年(オ)第三百九十九號  
明治三十五年十月十四日 判決 (棄却)

判決要旨

法律上ノ原因ナクシテ不當ニ他人ノ金錢ヲ受領シタル者ハ假令之レヲ不生産的ニ費消シタル場合ト雖モ其ノ利益ハ直接又ハ間接ニ受領者ノ爲メニ存在スルモノト看做スヘク從テ受領者ハ之カ返還ヲ爲スノ義務ヲ負フモノトス

說明

民法第七百三條ノ法文ハ法律上ノ原因ナクシテ他人ノ財産又ハ勞務ニ因リ利益ヲ受ケ之レカ爲メニ他人ニ損失ヲ及シタル者ハ其利益ノ存スル限度ニ於テ之レヲ返還スルノ義務ヲ負フト規定スルカ故ニ受益者カ返還ノ義務ヲ負フノ範圍ハ返還ノ請求ヲ受ケタル當時ニ存在スル利益ヲ以テ之レカ限度トナスコト動カナリト雖モ其ノ所謂利益ナルモノハ獨リ受益者

不當利得

ノ手裡ニ現在スル利益ノミニ限ラズ生産的若クハ不生のニ費消シ最早首  
己ノ手裡ニ存在セサルモノト雖モ猶ホ之レヲ以テ受益者ノ爲メニ存在ス  
ル利益ナリト云ハサル可ラス何トナレハ生産的ニ消費シタル金銭ハ其ノ  
結果トシテ諸種ノ利益ヲ享受スルガ故ニ利益ノ存在ヲ想像スルコト難カ  
ラサルノミナラス假令不生のニ消費シタル金銭ト雖モ消費者ハ之レニ  
依リテ無形上ノ快樂ヲ得タルヘク從テ此ノ快樂ハ不當利得ノ金銭ナカリ  
セハ他ノ金銭ヲ以テ之レカ費用ニ充テタルヘシト推定スルヲ以テ最モ穩  
當ナルヘシ然ルルハ此ノ種ノ目的ノ爲メニ消費セラレタル場合ト雖モ亦  
タ間接ニ其ノ利益ノ存在スルモノト云ハサルヲ得サレハナリ然レトモ天  
災地變其ノ他受益者ノ過失ニ依リ滅失若クハ毀損シタル場合ノ如キハ不  
時ノ喪失ニシテ全ク利得シタル利益ヲ消滅シタルモノト云ハサルヲ得ス  
セス所謂利益ノ存スル限度トハ此等ノ原因ニ依リ滅失シタル部分ヲ控除  
スルノ意味ニ外ナラサルヲ如ルヘキナリ

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院  
原告人 坂上喜藏 訴訟代理人 天ヶ野 敬一

被告上告人 岸上嘉一郎  
右當事者間ノ辨濟金返戻請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十五年四月十七日言渡シタル判  
決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

本件上告ハ之ヲ棄却ス  
理 由

上告理由ノ第六點ハ本件被告上告人請求ノ原因ハ不當ノ利得ナル事ハ第一審訴狀及ヒ調書判  
決等ニ依リ明ナリ民法第七百三條ニ依レハ法律上ノ原因ナクシテ他人ノ財産又ハ勞務ニ因  
リテ利益ヲ受ケ之レカ爲メニ他人ニ損害ヲ及ボシタル者ハ其利益ノ存スル限度ニ於テ之ヲ  
返還スル義務ヲ負フト所謂現存シタル利益トハ返還ノ當時現ニ存在スル利益ノ謂ヒニシテ  
而シテ其現存セル利益ノ限度ハ債務ノ幅域ナルト同時ニ債務其ノモノナリ換言セハ利益ニ  
シテ現存セサルトキハ何等義務ナク從テ亦之ニ對當スル權利ナキモノナリ且ツヤ取得シタ  
ル當時ノ利益ハ必スシモ返還ノ當時ニ現存スルモノニアラサルカ故ニ不當利益ナリト主張  
スルモノハ必ス先ツ其利得現存ノ事實ヲ立證セサル可カラス是レ前述説明ノ如ク不當利得  
ノ場合ニ於テハ單一ナル舉證ノ問題ニ止マラスシテ實ニ權利其モノノ存否ニ關スル問題ナ  
レハナリ從テ普通ノ舉證責任ノ如クナリトセハ相手方ニ於テ明ニ爭ハサル以上ハ主張者其  
人ノ單純ナル供述ノミヲ以テ足レルニ反シ此場合ニ於テハ主張者其人ニ於テ供述シ且ツ之

不當利得

ヲ立證セサルニ於テハ相手方カ明ニ之ヲ認メサル限リハ原告ノ主張夫自身ニ於テ法定ノ要件ヲ欠缺セルモノニシテ棄却ノ運命ヲ有スヘキモノトス今本件被告上告人ノ訴狀ニ依レハ云々「要ハ被告ハ原告ノ關與セサル債務ノ辨濟トシテ原告人ノ財産ヲ不當ニ領受シタルモノニシテ其額ハ即チ本訴返還ヲ求ムル處」云々ト云ヒ第一審辯論調書ニハ「原告代理人ハ云々訴狀記載ノ如ク事實ヲ陳述シタリ」トアリ第一審判決事實ノ摘示中「要之原告ハ毫モ貸借ニ干與セサルモノナルニ原告ノ所有不動産ヲ賣却シ其代金ヲ以テ辨濟シタルニアレハ被告ニ於テ之ヲ返還ス可キハ當然ノ筋合ナリ」ト云ヒ而シテ第二審辯論調書並ニ判決ニ於テモ第一審判決事實ノ摘示ト同一ナリトアリテ四者共ニ單ニ利得シタル事實ノ點ノミニ止リ其利得ノ今日尙現存セルヤ否ヤノ事實並ニ其限度ニ就テハ嘗テ一度モ主張セラレタルコトナク立證セラレタルコトナク又説明セラレタルコトナキナリ而シテ上告人ハ一定ノ申立ニ於テ被告上告人ノ請求棄却ヲ申立タルノミナラス利益ヲ不當ニ取得シタル事實ヲスラ極力論争セルモノナレハ勿論利益ノ現存ヲ認メタルコトナシ要之被告上告人ノ請求ハ其自體ニ就テ既ニ不當利得ノ要件ヲ具備セサルモノナルニ關ハラス原判決カ被告上告人ノ請求ヲ許容セラレタルハ不當利得ノ法則ニ違背セル不法アルモノナリト云フニ在レトモ○法律上ノ原因ナクシテ他人ヨリ金錢ヲ取得シタルトキハ其取得シタル金錢ハ之ヲ消費スルト否ト其消費ノ方法ハ生産的ナルト否トニ關セス直接又ハ間接ニ存スルモノト看做スヘキモノナレハ原判決カ被告上告人ノ現ニ受取リタル金額ヲ以テ利益ノ存スル限度ト爲シ上告人ニ其返還ヲ命ジタ

ルハ相當ナリトス而シテ原審ニ於テ上告人ハ不當利得ノ原因ナキコトヲ論争セシモ利益ノ存スル限度ニ至リテハ毫モ論争スル所ナカリシヲ以テ原判決カ其限度ニ關シ特ニ説明ヲ爲サ、ルモノヲ以テ違法ト爲スコトヲ得ス故ニ本論旨モ亦タ失當ナリトス以上説明ノ如ク本件上告ハ一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク棄却スヘキモノトス

土地抵當登記抹消請求事件 明治三十五年(オ)第三百五十一號 (棄却)

判決要旨

讓渡シタル不動産ニ對シ未タ登記ヲナサ、ル以前再ヒ同一ノ不動産ヲ以テ第三者ニ對シ抵當權ヲ設定シ之レカ登記ヲ爲シタルトキハ其ノ抵當權設定ノ所爲カ刑法第三百九十五條ニ該當シ犯罪ヲ構成スルモ民法第七十七條ニ依リ其ノ抵當權ハ有效ナリトス

說明

民法第七十七條ノ規定ハ物權ノ設定移轉ニ關シ犯罪所爲ノ牽連セル場

登記ノ效力

合ヲ除外シタル規定ナキヲ以テ其ノ設定移轉ノ行為ガニ法律行為ノ要件ヲ具備シタランニハ同條ノ適用ヲ受クルニ付キ敢テ妨クル所ナキモノトス

(參照) 不動産ニ關スル物權ノ得喪及ヒ變更ハ登記法ノ定ムル所ニ從ヒ其登記ヲ爲スニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對スルコトヲ得ス(民法第百七十七條)

第一審 新潟地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 布施 幸藏

訴訟代理人 竹内 平吉

被上告人 折戸 善八

右當事者間ノ土地抵當登記抹消請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十五年五月二日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ上告人ハ甲第一號證ヲ以テ本件係争ノ宅地ハ上告人カ所有權者ナル事ヲ證シ甲第二號證ハ被上告人カ抹消登記ヲ受ク引續キ假處分ヲ爲シタルコトヲ證シ甲第三號證ハ被上告人カ抵當ニ取リタルハ訴外川上喜七ノ犯罪行為ニ出テタルコトヲ立證セリ然ルニ原院ニ於テハ訴外川上喜七カ冒認シテ被控訴人(被上告人)ニ對シ本訴ノ土地ヲ抵當ニ供シ而

シテ被控訴人カ之レヲ登記シタル事ハ當事者雙方ニ争ナキ事實ナリ此事實ニ對シ民法第百七十七條ヲ適用スヘキヤ否ヤハ本件ノ争點ナリトス云々民法第百七十七條ハ其適用ノ範圍ハ汎博ナルヲ以テ犯罪行為ノ牽聯セル場合ト否ト問ハス苟モ第三者ニ對スル關係タルニ於テハ同條ノ支配ヲ受ク可キ者トスト判決ヲ下サレタリト雖被上告人カ抵當權ヲ得タルハ訴外川上喜七ノ犯罪行為ニ出テ其行為ハ詐欺取財ヲ以テ論セラレタルモノナレハ右等ノ場合ヲモ民法第百七十七條ニ包含シタルモノト爲スヲ得サルモノト思考ス何トナレハ川上喜七カ處分セラレタル刑法第三百九十三條第一項ニハ他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物トナシタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ストアリテ甲第三號證判決理由ニハ被上告人カ欺罔シ金四百圓ヲ騙取シタル事實ヲ認定シ其ノ被害者ハ被上告人タルモノト確定シ居レハナリ若シ如斯被害者ノ確定シ居ルニモ拘ラス民法第百七十七條ニ依リ被上告人カ抵當權ヲ得タル登記ヲ抹消スルヲ得サル者トスレハ其ノ被害ハ上告人ニ歸シ刑事判決ノ確定事實ヲ民事判決ニ於テ變更スルニ至ル可シ抑モ民事訴訟法ニ影響ヲ及ス場合ハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ民事訴訟ノ辯論ヲ中止スヘシトハ民事訴訟法第百二十二條ニ規定スル所ナリ況ヤ已ニ確定シタル被害者ヲ轉到シテ上告人ヲ被害者ト爲ス如キハ有ル可カラサル事ナリトス然ルニ原院ニ於テハ前記ノ如ク直ニ民法第百七十七條ニ包含シタル者ト爲シタルハ法律ニ違背シテ事實ヲ不當ニ確定シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ

登記ノ效力

場合ヲ除外シタル規定ナキヲ以テ他ニ先チテ不動産ヲ買受ケタリトモ之レカ登記ヲ爲サ  
ル間ニ同一ノ不動産ニ付キ抵當權ヲ設定シテ而シテ抵當權者カ買主ニ先チテ登記ヲ爲シタル  
場合ニ於テ買主ノ買主ニ對スル所爲カ犯罪タルト否トヲ問ハス右法條ノ適用ヲ受ケ抵當權  
ノ設定ハ有效ナリトス而シテ以上ノ如ク抵當權カ有效ニ設定セラレタルカ爲メニ賣買當事  
者ノ賣買行爲ニ變更ヲ生スルモノニ非ス本件ニ於テ上告人カ不動産ノ買主タルニ拘ハラズ  
賣主ノ犯罪ノ爲メ害ヲ被フリタルハ其買受クルヤ直チニ之カ登記ヲ爲サ、ルニ由ルモノニ  
シテ此場合ニ民法第七十七條ヲ適用シタリトテ上告論旨ノ如ク民事判決ヲ以テ刑事判決  
ヲ左右スルモノニ非ス依テ本論旨ハ上告ノ理由ナシ

上告第二點ハ上告人ハ甲第三號證ヲ以テ訴外川上喜七カ宅地ヲ被上告人ニ抵當ニ差入ル、  
當時ハ取調ノ結果已ニ登記洩ノ事ヲ發見シ是カ手續中ニシテ川上喜七ノ犯罪行爲ニ出テタ  
ル事ヲ立證シタル者ナリ此場合ニ於テハ上告人ハ喜七カ該係争地ノ登記ヲ爲スコトニ付豫  
メ之レヲ防禦スヘキ手段ヲ爲サ、ル可カラサル義務ナケレハ上告人ハ何等過失ナキ者ナリ  
當院判決例(明治三十四年(オ)第四百二十號明治三十四年十一月一日判決)ニ依ルモ斯ル  
場合ハ所有權者タル上告人ヲ保護セラル可キハ理ノ當然ナルニ付上告人ハ被上告人カ係争  
地ノ抵當權ヲ得タルハ上告人ニ過失ナク喜七ノ犯罪行爲ニ出テタル旨立證シタルニ原院ニ  
於テハ上告人ニ過失アルヤ否ニ付テハ審理ヲ盡サス單ニ民法第七十七條ノ支配ヲ受ケ可  
キモノトノミ判決ヲ下シタルハ審理ヲ盡サス且理由ヲ付セスシテ事實ヲ不當ニ確定セル不

法ノ判決ナリト云フニ在リ  
依テ審按スルニ民法第七十七條ノ精神ハ不動産ニ關スル物權ヲ取得シタリトモ之カ登記  
ヲ爲サ、ル間ニ他ノ者カ同一ノ不動産ニ付キ物權ヲ取得シテ速カニ登記シタルトモキハ實際  
先ニ取得シタル者ヲ以テ過失アルモノト爲シタルモノナレハ同條ヲ適用スルニ當リテハ事  
實上登記ヲ爲サ、ル權利ノ最初ノ取得者ニ過失アルヤ否ヤヲ審究スルコトヲ要セス依テ原  
院カ上告人ハ本件ノ不動産ニ付キ其取得ヲ被上告人ニ對抗スルコトヲ得ストシテ民法第百  
七十七條ヲ適用シタルヲ以テ上告人カ登記ヲ爲サ、リシハ過失アリヤ否ヤヲ審究セサリシ  
ハ相當ニシテ本論旨モ亦理由ナシ  
以上辯明スル如ク本件上告ハ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ棄却  
ス可キモノトス

貸金請求事件

明治三十五年(オ)第四百五十四號  
明治三十五年十月二十八日判決 (棄却)

判決要旨

一、新辯論ニ基キ爲スヘキ判決ハ故障申立ニ依リ事件カ缺席  
以前ノ程度ニ復シタル爲メ本案ニ付キ爲スヘキ判決ナル  
ヲ以テ故障ノ適法ナルヤ否ヤヲ判示セサルモ違法ニアラ

新辯論ニ基テ判決ノ欠席判決ノ維持○證人ノ申出

ス

二、闕席判決ノ主文ト新辯論ニ基キ爲スヘキ判決ノ主文ト符  
合スルトキハ其理由相異ナル所アルモ闕席判決ヲ維持ス  
ル旨ノ裁判ヲナスヘキモノトス

三、證人ノ申出又ハ證據決定ニ於テ訊問スヘキ證人ノ氏名知  
レサルトキハ其人ヲ表示スルニ足ルヘキ事項ヲ掲記スル  
ヲ以テ足ル

說明

本件ハ說明ヲ要セス

第一審 松江地方裁判所

第二審 廣島控訴院

上告人 和田久太郎

訴訟代理人 原 夫次郎

被上告人 中野 植松

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付廣島控訴院カ明治三十五年五月三十日言渡シタル判決ニ對  
シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告趣旨ノ第一ハ原判決ノ主文ニハ「曩キニ當院ノ言渡シタル闕席判決ヲ維持ス故障申立  
後ノ訴訟費用ハ控訴人ノ負擔トス」ト判示シタルモ其事實並ニ理由ノ部ニ於テ原院カ明治  
三十四年三月十二日言渡シタル右闕席判決ニ對シ(一)上告人(控訴人)ヨリ故障ヲ申立テタ  
ルヤ否ヤ(二)故障ハ適法ナリシヤ否ヤニ付テハ絶テ説示スルナシ然ルニ民事訴訟法第二百  
五十七條乃至第二百六十一條ノ規定ニ據ルトキハ闕席判決ニ對スル故障カ判然許スヘカラ  
サル場合若クハ判然不適法ナル場合ノ外裁判所ハ故障ニ付キ口頭辯論期日ヲ定メ當事者雙  
方ヲ呼出シ審理ノ結果其故障ヲ適法ナリトスルトキ茲ニ訴訟ハ闕席前ノ程度ニ復スルニ因  
リ新辯論ニ基キ爲ス可キ判決カ右闕席判決ト符合スルトキハ其闕席判決ヲ維持スル旨ノ言  
渡ヲ爲ス可キ筋合ナリ而シテ此規定ハ同法第四百八條ノ規定ニ據リ控訴審理ニ準用セラレ  
ルヲ以テ原院カ原判決事實並ニ理由ノ部ニ於テ控訴人(上告人)ノ爲シタル故障ノ適法ナリ  
シ旨ヲ説示セスシテ直ニ前掲主文ノ如ク判決シタルハ右ノ法規ニ違背シ結局原裁判ニ理由  
ヲ付セサルノ不法アルヲ免レスト云フニ在リ

然レトモ原院カ上告人ノ故障申立ニ因リ定メタル新辯論ノ期日ニ於テ故障ヲ適法トシテ受  
理スル旨ヲ告テ本案ノ辯論ヲ命シタルコトハ載セテ原院明治三十四年四月十八日ノ口頭辯  
論調書ニ在リテ明ナリ而シテ新辯論ニ基キ爲ス可キ判決ハ故障ノ適法ナルヤ否ヲ判斷スル

新辯論ニ基テ判決○欠席判決ノ維持○證人ノ申出

裁判ニ非サルヲ以テ原判決ニ之ニ關スル理由ヲ判示セサルハ當然ニシテ本論旨ハ上告ノ理由トナラス

上告趣旨ノ第四八第一審ニ於ケル關席判決ニハ被告(上告人控訴人)カ口頭辯論期日ニ關席シタルニ因リ被告ハ原告(被控訴人被告上告人)ノ事實上ノ主張ヲ明白シタルモノト看做シ「被告ハ金六百八拾圓ニ對スル明治三十二年十一月迄ノ損害金四拾五圓貳拾錢及ヒ金六百參拾圓ニ明治三十二年十二月ヨリ執行辨濟ニ至ルマテ一割五分ノ割合ヲ以テ算出シタル損害金ヲ原告ヘ辨濟ス可シ訴訟費用ハ被告ノ負擔トス」トアリ而シテ其後ノ第一審終局判決理由ノ部ニ於テ「然シテ本訴請求金ノ内金百五拾八圓拾五錢及ヒ之ニ對スル明治三十三年一月ヨリ返濟ニ至ルマテ一割五分ノ損害金ハ被告ノ認諾スル所ニ係ルヲ以テ民事訴訟法第二百二十九條ニ依リ原告ノ申立ニ因リ認諾ニ基キ敗訴ノ判決ヲ言渡ス可ク又同法第五百一條第一項第一號ニ則リ右認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス部分及ヒ之ニ關スル訴訟費用ニ付テハ假執行ノ宣言ヲ爲ス可キモノトス而シテ本案判決ハ結局變ニ言渡シタル關席判決ト符合スルヲ以テ民事訴訟法第二百六十一條ニ依リ該關席判決維持ノ言渡ヲ爲ス可ク訴訟費用ハ同法第七十二條ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス」ト判示シタリ故ニ原告ノ請求金ノ内百五拾八圓拾五錢並ニ利息訴訟費用ハ所謂認諾ノ判決ニシテ其餘ノ請求金トハ全ク別途ノモノナルノミナラス前關席判決ノ如ク原告ノ事實上ノ主張ヲ明白シタルモノト看做シタルモノトハ大ニ理由ヲ異ニスルモノナリ然ルニ右終局判決ニ於テ關席判決ト符合スル

ヲ以テ之ヲ維持スル旨ヲ判示シタルハ民事訴訟法第二百六十一條ノ規定ヲ適用セサル不合法アルニ拘ラス原判決力之ヲ廢棄スルコトナシ是認シタルハ亦不合法ノ裁判ナリト謂ハサルヲ得スト云フニ在リ

然レトモ關席判決ノ主文ト新辯論ニ基キ爲ス可キ判決ノ主文ト符合スルトキハ其理由ノ異同ヲ問ハスシテ關席判決ヲ維持スヘキコトヲ言渡スヲ以テ正當トスルノミナラス本論旨ノ事項モ亦上告人ハ原院ニ於テ不服ヲ申立テタル形跡訴訟記録中ニ存在セス故ニ其上告ノ理由トナラサルヤ勿論ナリ

上告趣旨ノ第五八民事訴訟法第二百九十一條第二百七十六條ノ規定ニ據ルトキハ人證ノ申出ハ必ヤ證人ヲ指名シテ爲サ、ル可カラサルハ勿論證據決定ニモ亦證據方法ノ表示殊ニ證人ノ表示ヲ爲サ、ル可ラス然ルニ原院口頭辯論ニ於ケル證據決定ニハ證人ヲ指名スルコトナク唯某ヲ證人トシテ訊問ス可キ旨ヲ言渡シタリ(第二回口頭辯論調書)抑々證人ノ訊問決定ハ茲ニ訊問スヘキ人アリテ始メテ行ハル可ク未タ訊問ス可キ人アラサルニ之ヲ訊問スヘキ決定ヲ爲スハ誠ニ謂ハレナキコト、云フ可シ原院ハ此視易キ前掲法規ヲ誤解シテ其手續ヲ誤リ之ニ據リテ以テ判示シタル原判決ハ亦不合法ノ裁判ナリト謂ハサルヲ得スト云フニ在リ

按スルニ人證ノ申出及ヒ證據決定ニ訊問スヘキ證人ノ氏名知レタルトキハ其氏名ヲ明示スヘキハ勿論ナレトモ若シ其知レサルトキハ其人ヲ表示スルニ足ルヘキ事項ヲ掲記スルトキ

新辯論ニ基テ判決○缺席判決ノ維持○證人ノ申出



ハ人證ノ申出若クハ證據決定ノ效力ニ妨アルヘカラス而シテ本論旨中ニ指摘スル原院ノ證據決定ハ訊問スヘキ證人ヲ表示スルニ足ル事項ヲ掲記シタルコト誠ニ明白ナルノミナラス上告人ハ原院ニ於テ此ニ關スル不服ヲ申立テタル事跡毫モ訴訟記録ニ徵スルコトヲ得サルニ因リ本論旨ハ究竟上告ノ理由トナラス  
上來説明スル如キ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ノ規定ニ從ヒ主文之如ク判決ス

行政法 判例彙報第十三卷民事判例大尾

雜報

◎判決例講究の必要迫る◎

現時司法部内に於て有力なる某顯官の説なりと云ふを聞くに元來法治國の本領は法律の制定よりも寧ろ法律運用の熟達に存す等しく一法令の本に活動する裁判所か同一の事件に對し甲裁判所は之れを有效とし裁判所は之れを無効となすか如きは實に民衆の歸依する處を迷はしむるのみならず法治國の體面を保つの上に於て最も不都合ある處なり而して今此の不都合の因て生ずる原因は専ら現今の執法者か判決例講究の冷淡なるに基くものなれば目下執務家に對して大に判決例講究の必要を主張し居れりと

◎司法官の増俸

頃日衆議院に於て否決せられたる司法官の増俸案は目下貴族院に回附中なるか同院内部の意向は復活甚だ優勢にして政友會側に於ても同案が貴族院に復活せられたる曉には強て前説を固執せざるへしとの内意を漏し居る由なれば同案の通過は最早間違なかるへしと

◎本年の大審院開廷日 左の如し

- 民事第一部開廷日 火、木、土曜日
- 一人事 一米穀 一物品 一證券 一金錢
- 民事第二部開廷日 月、水、金曜日
- 一地所及水利 一建物及家賃 一損害要償

一雜事 一地所水利建物家賃損害要償及不動産競賣に關する抗告

刑事第一部開廷日 火、金曜日

一大阪控訴院管轄 一長崎控訴院管轄 一函館控訴院管轄 一廣島控訴院管轄

刑事第二部開廷日 月、木曜日

一東京控訴院管轄 一名古屋控訴院管轄 一宮城控訴院管轄

● 昨年の大審院件數 昨年一月より十二月末に至る、同院取扱件數左の如し

(民事) 五八九件 (刑事) 二二一七件 同上件數左の如し

● 昨年の東京地方裁判所件數 同上件數左の如し

民事 (訴訟、非訟事件等一切)

(舊受) 一一五一件 (新受) 三五三〇件 (既濟) 四六八二件

(未濟) 一五一〇件 (新受) 三五三〇件 (既濟) 三五〇二件

(舊受) 二四一件 (新受) 三五三〇件 (既濟) 三五〇二件

(未濟) 二六九件 (新受) 三五三〇件 (既濟) 三五〇二件

● 全國鐵道總哩數

全國官私既設鐵道總哩數三千六百四十五哩七十六鎖にして之を細別すれば左の如し

官線	八百四十二哩三十一鎖	日鐵	八百六十九哩十八鎖
東武	二十四哩六十三鎖	岩越	三十九哩十一鎖
甲武	二十六哩七十七鎖	川越	十八哩三十六鎖
青梅	十三哩	佐野	九哩五十六鎖

上野	二十一哩	總武	七十二哩二十五鎖
房越	三十五哩六十二鎖	成田	二十四哩五十五鎖
北越	八十四哩五十二鎖	七尾	三十二哩四十二鎖
中越	十八哩四十七鎖	高野	十哩四十鎖
豆相	十哩五十一鎖	豐川	十三哩三十六鎖
尾西	十五哩四十六鎖	近江	十一哩七十二鎖
關西	百四十八哩二十四鎖	參宮	二十六哩十一鎖
奈良	三十八哩十五鎖	大阪	四十五哩二十四鎖
南和	十六哩六十鎖	南海	三十八哩七十六鎖
河南	三哩五十二鎖	紀和	十三哩三十六鎖
西成	六哩六鎖	京都	二十二哩十六鎖
阪鶴	六十八哩三十三鎖	山陽	二百八十哩五鎖
播但	三十哩六十二鎖	讚岐	二十七哩十九鎖
伊豫	二十六哩六十二鎖	德島	十八哩二鎖
中州	三十四哩七十六鎖	豐州	五十二哩五十四鎖
九州	三百二十一哩七十八哩	唐洲	十八哩十四鎖
北海炭	二百〇三哩五十一鎖		

● 訴訟印紙加貼の解釋

民事訴訟用印紙規則第二條に訴訟物の價格金五千圓までは二十五圓の印紙を貼用すべく五千圓以上け千圓に達する毎に二圓を加ふとの規定に對しては各裁判所其解釋を異にせり東京地方裁判所同控訴院は五千圓以上は其金額の多少を問はず二圓の加貼を命ずるも大審院は五千圓以上六千圓未満の場合に於ては加貼を要せず六千圓に達して始めて加貼を命ぜり斯く裁判所により其解釋を異にするは訴訟當事者の大に迷惑を感ずる所なれば何れか一途に定められんことを希望す

謹賀新正

併祈讀者諸士之滿福

明治三十五年一月一日

判例彙報社

8/5/36

廣告

東京市神田區淡路町二丁目七番地  
電話番號本局八百七十二番 江木法律事務所

靜岡縣靜岡市紺屋町百廿一番地  
江木倉橋法律事務所

法學博士辯護士 江木 衷

辯護士 卜部喜太郎

辯護士 倉橋政直

事務所執務時間

每日自午前九時至午後五時日曜大祭日休業

# 謹賀新正

併祈讀者諸士之滿福

明治三十五年一月一日

## 判例彙報社

四

### 廣告

電話番號本局八百七十二番

江木法律事務所

東京市神田區淡路町二丁目七番地  
靜岡縣靜岡市紺屋町百廿一番地

江木倉橋法律事務所

法學博士辯護士

江木 衷

辯護士

卜部喜太郎

辯護士

倉橋政直

事務所執務時間

每日

自午前九時  
至午後五時

日曜。大祭日。休業

司法判例彙報第十三卷第一號第四百十號

- 一本誌ハ毎月一回發刊ス
- 一本誌定價ハ一冊金十五錢六冊前金八十
- 四錢十二冊前金一圓六十二錢外ニ郵稅
- 一冊ニ付一錢但シ郵券代用ハ一割増
- 一本誌ハ前金ニアラサレハ一切送致セス
- 一本誌廣告料ハ一行五號活字廿二字詰金
- 十錢半頁金貳圓五十錢一頁金五圓
- 一本誌代金ハ總テ東京飯田町郵便電信支
- 局宛ニテ御拂込被下度候
- 一代金拂込ノ際代金ノ領收證ヲ求メラル
- 、諸氏ハ送金ノ際端書一葉ヲ送付セラ
- ルベシ
- 一本誌前金盡キタルルハ發送ノ際封皮ノ
- 氏名ヲ**朱書**可致候間次號發兌迄ニ
- 御送金可被下候
- 一本誌代價拂込ハ麹町區飯田町五丁目三
- 十六番地**判例彙報社宛**
- 差出被下度候

明治三十二年三月一日內務省認可

明治三十二年八月十四日第三種郵便物認可

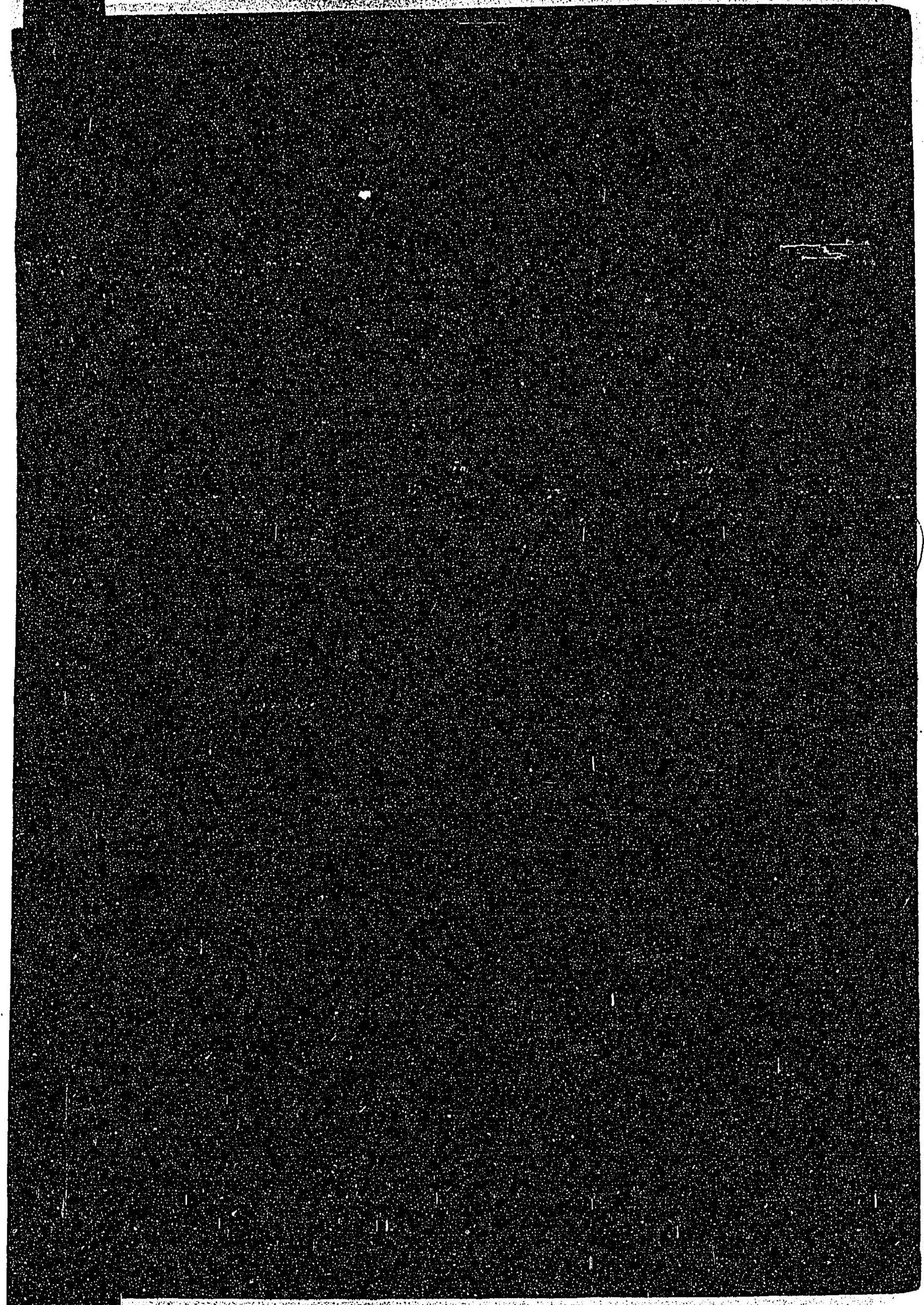
### 判例彙報大賣捌所

東京市神田區一ツ橋通町七番地  
有斐閣雜誌店  
東京市京橋區元敷奇屋町三丁目八番地  
東海堂 川合 晋  
東京市神田區表神保町  
東京 堂

明治三十五年一月二十四日印刷  
明治三十五年一月二十五日發行

編輯人 江 木 衷  
東京市神田區淡路町二丁目七番地  
發行人 工 藤 角 三 郎  
東京市神田區美土代町貳丁目壹番地  
印刷人 白 土 幸 力  
東京市神田區美土代町貳丁目壹番地  
印刷所 三 光 堂  
東京市麹町區飯田町五丁目三十六番地  
發行所 **判例彙報社**

21  
22  
107



21  
107

禁電子式複写



